
フィアーシル島物語

りおぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーシル島物語

【Nコード】

N1968D

【作者名】

りおぼん

【あらすじ】

剣士の国・魔法の国・大帝の国。ファイアーシル島にある、この三国は長年に渡る戦いを繰り返してきた。ようやく戦いも終盤を迎えたところ、誰も知らないところで、静かに闇の力が動き出す。ぶつかり合うそれぞれの感情、交錯するそれぞれの思い、全ては「心」が生み出した、壮絶なるファンタジー。

ファイアーシル島全土を舞台にした、伝説の決戦が幕を開ける。しかしそれは、闇が仕掛けた破滅の罠であった。総力戦で争う三国の中、最強の指導者が姿を現す

闇の軍隊が進撃を

開始し、ファイアーシル島最大の危機に！人々の思いを胸に決戦場へと向かう！残すは第三部のみ、感動のラストが貴方を待っています！

PROLOGUE

剣士を主とし、剣士を戦力として栄えるラフェルフォード王国
魔法使いを常とし、魔法を中心として栄えるリンディア魔法国
圧倒的兵力と領土を持ち、国家統一主義を掲げるカイレトラン帝国
ファイアーシル島に栄えるこの三国は
数年に渡る激しい戦いを繰り返してきた。

いよいよ戦いも終盤を迎えてきたころ、
隠れていた闇が、静かに姿を現す。

世界の異変に気付いた一人の少年が
闇と戦うべく立ち上がった

PROLOGUE (後書き)

。

CHAPTER 1：陰謀なる襲撃

城の中はめちゃくちゃになっていた。赤い絨毯が敷き詰められた城の廊下には、

剣士を象った石像が倒れ、見回りの兵士の死体が転がり、一面の殺風景が広がっていた。

その中を駆け抜ける、一人の少女がいた。

彼女の名はラミネ、この城を中心として栄える、ロラッタ地方の姫である。

ラミネはまだ十三歳で、体格も細く、胸も小さな膨らみを見せ始めた程度。

赤色の滑らかな短髪が特徴で、桜の花櫛がその特徴を大きく引き出していた。

顔は、ほんのりと丸く、薄紅色の頬は、美しさより可愛らしさをよく表している。

服は、滑らかな肌触りの品質を使った、王族が着る高価な洋服で、色は白。

身軽で動きやすいその洋服は、彼女にとって唯一の普段着であった。

夜の城内は静まり返っていた。その中に、少女の息遣いと足音だけが響き渡っている。

蠟燭の火は全て消えていて、光といえば、窓から差し込む月の光くらいであった。

ラミネは四階へと続く螺旋状の階段を上り、王の間へと続く直線廊下に出た。

直線廊下は、大きな鷹の紋章が描かれた赤い絨毯があるのと、左右両方の壁が全面窓であるということが特徴だ。

その窓全面から入り込む月の光に照らされて、一人の男が姿を現した。

「クツクツク、やっと来たか。ラミネ姫」

立ち止まったラミネは何者かと問う。男は、不気味に微笑みながら答えた。

「俺はレフェード」

そう名乗った男は、まるでラミネを見下しているかのような口調であった。

炎を模したような派手なコートを身にまとうその男は、背丈が百七十五センチくらいで、全体的にスマートな体格をしていた。

トゲのように尖った髪の毛はとても手入れを施されているような感じであった。

しかし、ラミネの視線は男の容姿ではなく殆どが、ある一点に向けられた。

それは、男の胸元にある、ラフェルフォードの紋章だ。

「貴様、ラフェルフォードの者か？ 一体どういふつもりで・・・」
ラミネは驚いたように言う。

驚くのも無理はなかった。

ラフェルフォード王国とリンディア魔法国は、帝国軍に対抗するため、同盟を結んでいたのだから。

「我々は、共に帝国軍と戦うのではなかったのか？」

ラミネの口調は次第に強くなっていった。

ラフェルフォード王国にとって、帝国軍に対抗するためにはリンディアの協力が不可欠なはずである。それを一方的に破る行為が、ラミネには理解できなかった。

レフェードはクククと嘲笑した後、やれやれといった仕草をしながらこう言った。

「まさか、あんな形だけの同盟を本気にしていたのか？　だとしたら滑稽だな。

我々ラフェルフォードは、ガセネタと引き換えにリンディア国の秘密を得ることができたのだから」

「何！？　まさか、貴様らは・・・」

ラミネがそう言いかけたとき、レフェードはその続きを言った。

「そう、お前らリンディア人をまんまと騙したってわけ」

「・・・くっ！」

レフェードは平然としていた。むしろ、ラミネが悔しがっているのを見て、楽しんでる様子だった。

ラミネが何かを言おうとしたとき、レフェードはその言葉を遮った。

「あ、そうそう！　姫に見せたいものがあつてな」

そういいながら、男はニヤニヤと不気味な笑みを浮かべていた。

それは、見せたい何かを早く見せてやりたいと言いたげな表情だった。

レフェードは振り向いて、王の間へと続く扉の、赤い取っ手に手を触れた。

次の瞬間、ラミネは啞然として立ち尽くすほかなかった

扉がバッと開かれた。そこには、一番避けたかった最悪の事態があった。

ラミネの目に、まず飛び込んできたのが、王座の前に倒れる父の姿だった。

それを見たとき、彼女の体にこの上ない衝撃が走る

そして、激しい怒りが込み上げてくるのを感じた。

自分の不幸に満ちた顔を見て嬉々する男に対しての怒り。

たった一人の父の命を奪った男に対しての怒り・・・

「よくも！」

とつさにラミネは、その場で右手を大きく引いた。

「はぁぁぁぁぁ！」

そして、右手の中に、卵サイズの青い玉が現れたのを目で確かめた瞬間、

腕を思い切り前に突き出した。

手の中で創り出された青い魔法弾は、空を切って飛んでいく。

レフェードはその魔法弾を、身をひょいっと逸らしてかわした。

魔法の攻撃に対して、驚いた様子は全くなく、

むしろ、「この程度か」というような表情をしている。

「知情意に身を任せるのもいいが、それでは情弱な父の二の舞だぞ？」

「黙れ！」

今度は両手に魔法弾を構えた。

しかし、レフェードの高速な動きに翻弄されて、対応できなかった。

「きゃあ！」

ラミネは横腹に激しい痛みを感じた。

そして、窓際に蹴飛ばされていた。

ラミネは、窓に当たるギリギリ手前のところで持ちこたえていた。もう一メートル後ろだったら、と考えるとゾツとする。

ラミネはよろよろと立ち上がった。すぐ目の前にレフェードの姿がある。

このとき、生まれて初めて「死に対する恐怖」というものを感じたかのように思えた。

「脆い身に今の蹴りは痛いだろ？ まあ安心しろ。すぐに父のもとへ逝かせてやるからよ」

男はやはり不気味な笑みを浮かべていた。

脆い身というのは、リンディア人のことだろう。リンディアの地で生まれ育ったもの、

あるいは魔法使いの血を引いて生まれた者は、生まれながらにして知性と精神力が突出し、

逆に肉体や運動能力が極端に低いのだ。だから、他民族の軽い攻撃を受けただけでも大きなダメージにつながってしまう。

ラミネは痛みを振り切り、必死の思いで反撃しようとした。しかし、その反撃さえもこの男の前では無力であった。

そのとき、ラミネのすぐ近くでガラスの割れるような音がした。耳をつんざくような、大きくてよく響く音だ。

ラミネがその音を聞いた、次の瞬間、ラミネの身体は宙に投げ出されていった。

このときラミネの脳は、周りにあるもの全てをスローモーションで映し出していた。

宙を舞うガラスの破片一つ一つがリアルに見える。

空に浮かぶ月も、月の後ろから少しだけ顔を出している青い惑星も、自分を蹴り飛ばしたレフェードの姿も、全てがゆっくりと見えた。まるで、死に際に、過去を思い出す時間を与えてくれているかのようだった。

ラミネの身体はだんだん斜め向きに傾いていった。
背中いっぱい風の抵抗を感じる。

やがてラミネの身体は大地と垂直になり、ほぼ倒立状態になっていた。

自分はこのまま、遥か下にある草原に叩きつけられてしまうのだろうか。

だとしたら、なんと無様なことだろう。

それだけは自分自身が許さない。

いや、許されないのだ。

大地がだんだんと近くなってくる中

ラミネは、無意識のうちに、両手に緑の魔法弾を創り出していた

レフェードは割れた窓の外を見つめていた。
この日もまた、たくさんの星が燦然と煌いている。
地上がどんな状況にあっても、星空はいつも見てみぬふりをしているのだ。

背後にいる白衣の男に、レフェードはこう問い掛けた。

「あの小娘、死んだか？」

その質問は、レフェードにとって珍しいものだった。
なぜなら、レフェードは普通、すぐに生死の確認ができない殺し方はしないからである。
生かすか殺すか、白黒がはっきりしたその二つにしか興味がないのだ。

白衣の男はレフェードの隣に立ち、四階の高さを確かめながら答えた。

「生存率は50%といったところか。普通に行けば間違いなく死ぬが、

あの娘が風術系魔法を使えるのならば、生きている可能性は高い」
白衣の男は、少し丸に近い顔立ちと黒髪のオールバックが特徴で、名はカリドルという。

眉間には常にしわが寄っており、冷酷そうな顔つきが、彼の印象を

特に強めていた。

背丈はレフェードと肩が並ぶくらいで、百七十五センチ前後。体格は丸くもなく細くもない、どこにでもいそうな普通の体つきであつた。

レフェードはカリドールの言葉を聞き、歓心したように言った。

「なら、これはもう要らねえな！」

そして、胸に付けていたラフェルフォードの紋章のタトゥーを外す。普段は付ける機会さえないこのタトゥーが気になって仕方なかったのだらう。

カリドールはその様子をじっと見つめてから注意するように言った。「それは捨てるなよ。・・・我々の任務はラフェルフォード兵を装つて

リンディアを襲撃し、両国の関係を崩すことだ。リンディア人がゴミとなった

ラフェルフォードの証を拾えば、不思議に思われるだらう？」

「なるほど、確かにそうだな」

レフェードは納得したように言つと、タトゥーをコートのポケットにしまいこんだ。

続けてレフェードは問う。

「ところでよ、あいつは今どうしてるんだよ？」

彼らの中では「あいつ」と言うだけで誰のことなのか通じる。

カリドールはフンと一瞬苦笑すると、手を白衣の後ろに回してこう答えた。

「彼の行方は依然として不明だ。まあいつものことだが・・・。

連絡といえば、殆どラフェグリフに任されているよ」

不可解な返答に、レフェードは怪訝そうな顔で言った。

「ラフェグリフ？　なんであんな怪鳥を？」

ラフェグリフというのは、ハービラ荒野に生息する凶暴な鳥である。獣と鳥を融合させたような奇妙な姿をしており、怪鳥だとか神獣だとか言われている。

レフェードは、そんな希少生物を何故連絡のために利用するのが理解できなかった。

世間知らずのレフェードに呆れたカリドールは、面倒くさそうに問い返した。

「レフェード、キャリナーバードは知っているか？」

「いいや」

レフェードは即答した。知らないどころか、聞いたことさえもない様子だった。

これが本当に、同じ目的を持った仲間なのか？と、カリドールは思った。

以前に、「いい加減にその不知さをどうかしろ」と言った事があるが、

ここまで酷いと怒るより先に呆れてしまう。

カリドールは仕方なく説明することにした。

「キャリナーバードとは、伝書を職業とする鳥のことだ。

俗にキャリナーと略されることもある。

そして、キャリナーバードには二種類あり、野生の鳥をなつかせ、自らの手でキャリナーとして育て上げた「アティーチ」と、

市販で購入することができる、既に訓練された「アビラブル」とだ。

彼のラフェグリフはおそらく前者、アティーチだろう」

それは、非常に単純でぶっきらぼうな説明だった。

レフェードは中途半端にわかったようなわかっていないような様子で確認する。

「とにかく、あいつは野生のラフェグリフをしつけて、伝書鳩にし

てるってことか」

「まあ・・・そんなところだろう」

くだらない説明に時間を使ってしまった、とカリドールは思った。

そして、カリドールはここにいる意味はもうないと感じていた。

任務は既に完了し、しかも次の任務がまだ残っている。

「私はそろそろ行かせてもらおうよ」

そういうと、カリドールは振り向き階段のほうへと向かった。

「次はキラたちとラフェルフォードをデートかい？」

レフェードのふざけた問い掛けに、カリドールは返事もしなければ振り向きもしなかった。

ただ一人残されたレフェードは、窓の外に輝く星たちを見て、一言こう呟いた。

「人間世界はこんなに荒れ狂っているのに、星は相変わらずのん気だな」

CHAPTER 1：陰謀なる襲撃（後書き）

一章・用語辞典（重要項目は）

・ロラッタ地方

リンディア魔法国の南東に位置する海岸線沿いの地方。

・氷術系魔法

ラミネが放った青い魔法弾がこれ。

一般的に被弾者を凍結させる。特例もある。

・風術系魔法

魔法弾を創り出し、それを風に変える魔法。

キャリナーバード

伝書用に訓練された鳥のこと。

訓練課程において二種類に分類される。

キャリナーと略されることが多い。

アティーチ

キャリナーバードの成長過程が

「野生の鳥をなつかせ、主人自らの手で訓練させた鳥」である鳥のこと。

アビラブル

キャリナーバードを購入した場合の鳥のこと。

一般的に使用されているのがこれ。

CHAPTER 2：ミクレス

大空を駆ける、一羽の鳥がいた。

鳥は、全身綺麗な青い毛並みと、金色のトサカが特徴の
「リュット」^①という種の賢い鳥である。

リュット系の鳥は、その賢さ故に、人になつきにくく、ペットとして飼う者はあまりいない。

しかし、この小鳥は誰かになついているのか、足首に手紙を括り付けたキャリナー^②バードで、

今その手紙を主人に届ける途中だろうと思われた。

鳥は遙か空の下を見下ろした。

広大な草原や険しい山々、大地を横切る大河や大きな建物が沢山ある街。

色々なものが眼下に見受けられるが、小鳥が探しているものはそんなものではない。

この高さからは、人の姿など小さな黒い点にしか見えない。

しかし、リュット系の鳥は驚異的な視力を持っているため、それを見分けることができる。

鳥は、若草色の大草原を歩く、一人の少年の姿を確かに捉えた。

次の瞬間、鳥は身体を斜めに向けて急降下していった。

だんだんと地表が近くなってくる。

若草色の草原との距離が三十メートルほどになったとき、

小鳥はスピードを落として調整を行った。

空を駆け抜ける鳥の姿に、少年はようやく気付いたようだった。
少年は振り向いて立ち止まり、小鳥が来るのを待つ。

そして少年は、ここに乗れと言うかのように腕を上げ、肘を直角に曲げた。

「ラフィーネ！」

それと同時に、少年はそう叫ぶ。

鳥：ラフィーネは、少年の腕に止まり、

足首につけられている届け物を外されるのを待った。

少年が手紙を外し終わった瞬間、ラフィーネは脚の開放感に嬉々した。

少年はお礼に、と、バッグから「酸性角砂糖」を取り出してラフィーネの口に運んだ。

「ありがとう。ほら、これ食べる」

ラフィーネは少年が取り出した酸性角砂糖をくちばしでくわえ、ごくりと飲み込んだ。そして、嬉しそうにピピッと鳴く。

この少年の名はミクレス。ラブレイズ（平和維持活動・自治組織）として

王国中を旅している。、十四歳の少年だ。

髪は耳が半分隠れるくらいの茶髪。

とても凛々しい顔をしていて、少し細い目が特徴だ。

体格は、この年代に相応しい細さで、背丈は百六十五センチ強。

服装は、青い麻の服と青いマントが彼の常らしい。

また、容姿以外にも小型のウエストポーチや、

腰にかけた革の鞘に包まれる両刃の剣などが印象的だ。

ラフィーネは、そんなミクレスのアティーチである。

野生の、しかもリユット系の鳥をなつかせるミクレスは、やはり只者でないということがわかる。

ミクレスは、ラフィーネに届けられた手紙を開いた。

そこにはこう書かれていた。

「ラブレイズ本部より緊急指令を出す。帝国軍討伐の調整と準備を行うため、

ラブレイズ全部隊はこれより二週間以内に本部へと帰還せよ。

もしも、事故等の都合で動けない状態にある場合は、

各自のキャリアーを使用して必ず本部へ連絡を入れること。

以上

ラ

ブレイズ第六天一同

ミクレスは手紙を読み終えるなり、こう呟いた。

「急な命令だな……。しかも何故第六天が……。？」

ラブレイズ第六天とは、ラブレイズを指揮する最高権力者の六人のことである。

ミクレスは手紙をバッグにしまうと、すぐ目の前にある目的地に向かって歩き出した。

帰還命令があつたとはいえ、期限は二週間近くある。急いで帰る必要はない。

ミクレスが向かっている先には、ラブレイズ西支部がある。

村に似せたその支部は、敵の侵入を防ぐために、

入り口以外は大きな柵に囲まれているのだ。

入り口は、今ミクレスが歩いているクラフェータ大草原方面に向かってあり、

普通の人は遠回りしなければ入ることができない仕組みになっている。

ミクレスがラブレイズの入り口まで来たとき、

すぐ近くにいた大柄の男がその姿に気付いた。

「おや・・・旅人かい？」

男はそう言いながらミクレスに近づいてきた。

男は目の前に立って、はっとしたように言った。

「もしや・・・お前さん、ミクレスか！？」

三年も経ち、ミクレスの体つきも身長も伸びたため、すぐには誰だかわからなかったらしい。

しばらくミクレスを見つめた後、「やはり」と呟いて、

三年前と変わらぬ馴れ馴れしさでミクレスの頭をポンポンと叩きながら言った。

「そうかそうか。しばらく見ない間にこんなに大きくなって！」

ミクレスは微笑んで言い返した。

「ゴリラは相変わらずデカイな」

「コ、コラ！ 久々に会って最初の言葉でゴリラはないだろう！？」
そう言いながらも、ゴリラはニコニコと笑っていた。

ミクレスが来た、ということ、支部中の人々が彼の周りに集まってきた。

そして人々は口々に言う。

「ほんの少し前はこゝんなにチビだったのに」

「大きくなつたねえ」

「いやゝ元気そうでなりよりだよ！」

洗濯物や、クワなどの農具を持ちながらミクレスに会いに来る者もいた。

同年くらい少年少女たちも、見違えるくらい大きくなっていた。顔も引き締まった感じで、まさにラブレイズと言える。

ラブレイズ西支部自体は、殆ど三年前と変わっていないかった。
藁を敷き詰めた汚い家や、もう何度も使ってボロボロになっている
テント、

柵の上からはみ出す木々、そして、人々の元気な活動だ。
それを見たミクレスは、少し安心した気分になれるのだった。

ミクレスはまず支部長に会いたかった。

「今、支部長に会いたいんだ。どこにいるか教えてくれないか？」
懐かしさ溢れる風景に感傷しながらも、ミクレスは真面目な話を切り出した。

しかし、支部長を探す必要など全くなかった。

「私ならここにいるよ、ミクレス君」

声のしたほうに目をやると、そこには赤茶色のローブを着た支部長
コーリスがいた。

以前見たときは剣士の服装をしていたコーリスが、
ローブ姿で現れるのは少し違和感があった。

似合わない、とまではいかないが、正直剣士姿のほうがコーリスらしくていい。

まあ単に、ミクレスがコーリスのローブ姿に見慣れていないだけと
いうのもあるだろうが。

「立ち話もなんだから、私の家に来なさい」
ミクレスはコーリスの指示に従い、人ごみを抜けて支部長の家に行
った。

玄関扉を開けた先は、本棚で溢れかえっていて、
床に落ちた本を避けながら通らなければいけなかった。

「すまない。散らかっていて」
「いえ」

その部屋の奥にある扉を開けると、コーリスの私室へと出た。私室は、右奥にベッドと、左奥に本棚、中央に椅子二つテーブル一つがあること以外、

殆ど何も置かれていなかった。

入り口扉と向かい側に、少し大きめの窓があり、そこから部屋唯一の明かりが入り込んでいた。

二人は中央の椅子に、テーブルを挟んで向かい合うように座った。

「君がラブレイズ本部に所属したと聞いたときは、正直びっくりしたよ」

コーリスは言う。

「本部は大人でも就くことは難しい、一流剣士の集まりだ」

彼の言うとおり、本部には剣豪たちがたくさんいる。

修行も厳しいし、任務も危険なものばかりだ。

ミクレスは少し得意げな表情で言った。

「でも、こっちはこっちで楽しくやっているよ。一流って言っても、悪い人ではない」

「はっはっは、そうか。それなら安心だ」

コーリスは立ち上がって、窓のほうへと向かった。

窓の光を見つめながら、彼は言う。

「ところで、ミクレス君。本部帰還緊急命令のことは知っているかね？」

「ああ」

そのとき、コーリスの顔が急に険しくなった。

「何故、緊急にあのようなことを言い出したか、理由を知っているかね？」

それは、声色からでも察することができた。

「どういうことだ？」

ミクレスは、否定形ではなく、あえて疑問形にした。大事な仲間が死んだと、伝えられるような緊張感が張り詰めた瞬間だった。

しかし、次に口にした事実は、それと何ら変わらないほどの重い内容であった。

「リンディア魔法国との共同関係が断ち切られた」

「何!？」

最悪の事態を告げられたような感覚だった。

「わからない・・・ただ一つ言えることは、我々が窮地に追い込まれたということだ」

ミクレスは憤慨しそうになった。

ラフェルフォード王国にとって、リンディア魔法国の協力は絶対不可欠なものであった。

少なくとも、それであってやっと優勢な立場に立つことができる状態だった。

しかし、関係を断ち切られた今、まさに万事休す。

この状況を打破するのは非常に困難である。

しかし、ミクレスはリンディアの行動が理解できなかった。

リンディアにとってもラフェルフォードは必要なはず・・・。なのに何故？

「それで・・・？ これからどうするつもりなんだ？」

とにかく今は済んだことをとやかく言っている場合ではない。

「ラブレイズは王国軍に協力し、現時点での最善の状態を確保すると発表している」

「つまりどうということだ？」

「ラブレイズ上層部は、リンディアの進撃を防ぐことに徹底し、その間に王国軍はアクスラ機関と連携して帝国軍に総攻撃をかける。」

リンディアの力が途絶えたことで、総攻撃の際に妙な策はとらないそうだ」

その作戦を聞いて、ミクレスは机を拳に叩き付けた。
あまりに無謀で、且つ最善の選択だったからである。

アクスラ機関の協力が得られたことが何よりの救いである。
彼らは戦力としてかなり心強い。

しかし、ミクレスにはもう一つの懸念があった。

「もしリンディア魔法国との関係が断ち切れたと王国に知れたら、国民は大混乱だろうな」

「仕方がないのだ。もう後戻りはできない。今やれることをやるしかない」

事態はとんでもない方向へと進展していた。

リンディアとの国交も途絶え、ラフェルフォード、万事休す

CHAPTER 2：ミクレス（後書き）

二章・用語辞典（重要項目は）

・リュット

頭が良く、警戒心が強い鳥。

色や特性によって、四種類に分けられる。

・クラフェータ大草原

若草色の草原で、ラフェルフォード王国一の巨大大さ。
王国の西に位置する。

・酸性角砂糖

ラフィーネが好物の角砂糖。
人が食べると死に至る・・・？

・ラブレイズ西支部

ラブレイズ東西南北支部制の、西にあたる支部。
コーリスが治めている。

ラブレイズ第六天

ラブレイズの実働を指揮する最高権力者六人のこと。
ラブレイズを組織したのも彼ら。

・アクスラ機関

弓術の名人ばかりを集める独立機関。

CHAPTER 3：出会いと旅立ち（前編）

あの後、コーリスとの会話は後味の悪い終わり方をした。

そして王国軍の考えに深く失望した。それが最善の決断だということにも深く失望した。

もう勝ち目のない負け戦だ。そう感じさせるほど、絶望的な状況である。

そして二日後、コーリスとは一度も話すこともなく支部を出た。別に喧嘩したわけでもない。けれども、彼とは話をする気にはなれなかった。

とりあえずミクレスは、近くの知人の家に向かうことにした。もともと立ち寄るつもりではあったが、今なら「ついで」である。ついでとは言ってもやはり会いたい気持ちは強かった。

ミクレスは、少し小高い丘の上に立ち、クラフェータ大草原を遥か遠くまで見渡した。

地平線の先まで広がる雄大な草原に、波のような風が吹き渡り、草をなびかせる。

その草は、太陽の光を受けて反射しているのか、とても綺麗に見えるた。

この自然がもたらす、ただ綺麗なだけとは違う「絶景」こそが、ミクレスの心を唯一落ち着かせてくれるものであった。

ミクレスは斜面を下り、若草色の大草原を歩き出した。

草につられたかのように、マントも風に揺られて踊りだした。

知人の家にたどり着くには約二日かかる。

まあ焦らなくても大丈夫だろう。ゆっくり行こう・・・とは言ったものの、

彼は夜までひと時の休憩を取らずに歩き続けた。これは彼の旅のスタイル、いわゆる癖だからだ。

ラブレイズから受けた遠出の任務をこなしているうちに、

自然と「不休」という癖を身につけたらしい。

その癖を繰り返しているうちに、旅のスタイルという固定的なものになったというわけだ。

そしてミクレスは、昼食もとらなければ夕食もとらなかった。

この時代には既に一日三食の習慣が身についているはずなのに、彼にはそれがない。なぜかと聞けば、「面倒くさいから」で、食べたいときに食べるという何とも気まぐれな性格である。

そして月が昇り始めたころ、適当に寝場所を探して眠りにつく。また朝が来て、朝日の光に目を覚まされた後、軽く朝食をとり（これも気まぐれで決まる）

すぐに出発する。そしてまた夜まで歩き続けその繰り返しをするという感じのスタイルだ。ちよつと変わつてるかもしれないが、実に単純である。

太陽が高く昇ったころ、彼は「桜の森」という場所に辿り着いた。そこは、まさに希少地帯ともいえる珍しい自然である。

「桜の森」の名前の通り、この森は桜が集まってできた森である。しかもその桜はこれまた珍しく、三年を基準に

咲き時期（桜が花を開く時期）と枯れ時期（桜の木が枯れる時期）を交互に繰り返す

桜なのだ。

特に咲き時期のこの森は圧巻で、見渡す限りの美しい桜が広がっている。

もちろん、この森の動物たちも非常に珍しいものばかりである。一度土の中に潜ると五年は外に出てこないコカシノや、

まるで歌を歌っているかのような鳴き声をする鳥メンルル、

桜の花びらに擬態して、ただ観賞する者を驚かせるためだけに生きるサクラモドキなど、

その種類は約三十種類といわれている。

しかし、実際のところはもっと多いと予想されているらしい。

そして、ミクレスが訪れたときの森は咲き時期、特に満開の時であった。

遙か先まで続く淡いピンク色が、目に焼きつくほどの絶景であった。動物の姿は見えなかったが、小鳥のさえずりは聞こえてくる。

チュンチュンといった、可愛い鳴き声だった。

ミクレスは桜を鑑賞しながらも、森の半ばまで進んでいった。

この方角で進んでいれば、森を抜けたあたりに木の家があるはずだ。

なんとなくの感覚で森を進んでいると、突然、ラフィーネの様子がおかしくなった。

急にミクレスの肩から離れ、しつこいくらいに鳴き始める。

「どうした？ ラフィーネ」

「ピー！」

そして、ラフィーネは進行方向と全く別の方向に進み始めた。

「おい、待てよ」

しかし、ラフィーネは止まろうとしない。

ミクレスは慌ててラフィーネの後を追った。すぐに追いつけるほどゆっくりな速さだったが、

ミクレスがすぐ後ろに來たのを確認した瞬間、急にスピードを上げた。

「あ、おい！」

ミクレスは駆け足でついていく。

しばらく進んだころ、彼らは円形状の広場のような場所に出た。まるで森の一角を切り取ったような、広く澄んだ場所だった。

その中心に、大きな翼を広げた、獣と鳥を融合させたような奇妙な動物と、

そのそばで倒れる一人の少女の姿があった。

ラフィーネはそこまでミクレスを誘導すると、ゆっくりと肩に留まった。

ラフィーネはこれを伝えたかったのだ。

ミクレスは少女に駆け寄った。いかにも高価そうな、綺麗な白い服を着ている。

「おい、大丈夫か！？　おい！」

しかし、少女は返事もしない。まるで死んでしまったかのようにぐったりとして気を失っていた。

さらに、右腕が赤くはれ上がっていた。おそらく折れているのだろう・・・。

ミクレスが現れたことで、安心した怪鳥は、静かにその場を後にした。

きっと、彼女を乗せてここまで運んできたのだろう。

命を救える誰かに気付いてもらうために。

いったいどうすれば・・・？

ミクレスは必死に考えた。この近くでこの子を助けられるのは・・・

思い当たるのは、ミクレスがこれから会いに行こうとしていた知人しかいなかった。

一番近く、一番彼女を助けられるような気がする。

ぐったりとした彼女を背中に乗せた。

もう死んでしまっているのではないかと思わせるほど、力が感じられない。

「頑張れよ！」

ミクレスはそういいながら、知人の家へと向かった。

CHAPTER 3：出会いと旅立ち（前編）（後書き）

会話が極端に少ない、というか、なかったですね…。

まあそれを踏まえての「前編」なんですけど、

ちよつと反省すべきところがあったと、自分でも感じています…（汗

CHAPTER 4：出会いと旅立ち（中編）

小さい木造の家。玄関から向かって右奥にベッドがあり、左奥には食器棚がある。中央には縦長いテーブルが横に置かれており、

椅子は向かい合うように二つずつ、計四つ置かれていた。

テーブル上の真ん中には白い花を入れた、くびれのある小さな花瓶が乗せられており、

花びらの中からは光の粉が漏れていた。

窓から差し込む太陽の光に照らされて、ベッドに眠る少女が目覚めました。

「うーん……」

少女は上半身を起こすと、右手で目を擦った。とても長い夢を見ていたような気がする。

そのとき、彼女は自分の身体に起こった大変な異変に気がついた。

「あれ……」

無意識に右手を使って目を擦っていたが、まさか……治ってる？

「やっと目を覚ましおったか」

しゃがれ声の老婆が、まさに「やっとか」といった口調で言った。

少女は驚いて老婆を見る。

「お前さん、二日も眠ったままだったんじゃないぞ？」

そうだ！ 自分はそのとき、赤いコートの男に城から突き落とされたのだ。

そして、助けを求めてよろよろと迷い歩き、荒野のようなところに出た。

そこから先はあまり覚えていない・・・が、あのときは確かに右腕が折れていたはずだ！

「あの・・・何故私はこんなところに？ それに、腕も・・・」

少女はおどおどした様子で尋ねた。

老婆はため息をついて答える。

「その青いのが倒れているお前さんを運んで来たんじゃないよ」

少女は「そこ」に目をやる。

そこには、青い服と青いマントを着た、自分と同年くらいの少年がいた。

少年は何か言わなければと思ったのか、チラッと一瞬少女を見た後、こう言った。

「森の広場みたいところで倒れていたんだ」

森？ いや、私が倒れていたのは少なくとも森ではないはず。

「森・・・？ 私は」

「近くにパードラグリフがいた。きっと荒野かどこかで倒れていたお前を、

あそこまで運んできてくれたんだろう」

「そうなの・・・」

少年は淡々とした物言いと言った。

ゴホンゴホンと咳をした後、老婆は微笑みながら言った。

「そういえば、何年か前にも似たようなことがあったのう」

それは、この少年にたいして言った言葉だった。

少年は肩に乗せている青い鳥を見つめて答えた。

「ああ、ラフィーネのことか。そういえば、こいつとの出会いはそんなだったつけ・・・」

そう、ミクレスは、ラフィーネの恩人なのだ。

数年前、身体に酷い傷を負っていた青い鳥を、ミクレスは拾い、彼女と同じように老婆のもとへと連れて行った。そして、もう飛ぶことはできないかもしれないというほどの重い傷を、

彼女の腕を数日で治したのと同じ治療法で見事、傷を負う前の、大空を駆けることができる鳥に戻すことができたのだ。

ミクレスはその鳥をラフィーネと名づけ、旅のお供として連れて行くことにした。

そして、今に至るというわけである。

賢く警戒心の強いリユット系のラフィーネが、ミクレスと共に旅を続けられるのはそのためである。彼は自分の命を救ってくれた。

そのことは、ラフィーネの心を惹き、「信頼」というものに繋げさせたのだ。

「あのときも、結局治療をしたのはわしじゃがね」
老婆は得意げに言う。そして、フンと鼻を鳴らした。

「ところでお前さん、名はなんというんじゃ？」
老婆は少女のほうも見ずに聞いた。

もうお気付きの方もいるであろう。

ミクレスと同じ年くらいの、重傷を負っていた彼女の名前は

「私はラミネ。ラミネ・ソリフェイト」

「ラミネか。なかなかの名前じゃないかえ。

ああ、わしの名か？ わしはランツ」

「ばあちゃん、誰も聞いてないよ」

「うるさいわい！・・・ああ、もうわしも年老いたババアじゃ。おばあさんなりばあちゃんなり、好きに呼ぶとええ」

「じゃ、クソババアって呼ぶといい」

「これ！ ミクレス！」

このくだらないコントのような会話は、毎回のように続いている。

そのくだらないコントを前にして、ラミネはクスクスと笑っていた。それを見た二人は、優しい微笑みを浮かべるのであった。

「あの、ミクレスさん？」

ラミネはさっきより肩の力を抜いたような、気軽な感じで話しかけてきた。

どうやら警戒心がなくなったみたいだ。

「ミクレスでいいよ」

ミクレスは相変わらず淡淡とした感じでそう言う。

ミクレスは、敬語というものがあまり好きではなかった。

まあ、敬語が好きだなんていう人もこの世にいるかどうか疑問だが。

「助けてくれて、ありがとうございます」

きつと、ラミネの心からの言葉だっただろう。

しかし、ミクレスはそんな、何か隔たりのあるような固い感謝は要らなかった。

「その敬語をどうにかしてくれれば、ちゃんと聞いてやるよ」

そう一言言い残して、ミクレスは家を出て行ってしまった。

ミクレスは怒ってはいなかった。しかし、他人からすれば誰が見ても怒っているように見える。

ラミネは何か悪い事を言ってしまったのかな、と心配していた。

その様子をそばで見っていた老婆 ランツばあさんは、

揚々とした様子でつぶやいた。

「あのバカはいつもああやって突っ張ってる。

何も怒っているわけじゃあないから、心配せんでええ」

「は、はあ・・・」

ランツばあさんは、ミクレスの相変わらずの様子に呆れていた。

初対面の相手にも偉そうにして、いつも淡々とした物言い、いい加減直せばいいのと思う。

そしてあげく勘違いされる始末で、まったく仕方ないヤツだ。

俯いて、右腕の具合を確認するラミネに、ランツばあさんは問い掛ける。

「何故折れていたはずの腕が治ったのか、気になるじゃろ？」

そういいながら、ランツばあさんはゆっくりとラミネに近付いた。

そりゃ、確かに気になる。

こんな驚異的な治療は、リンディアの魔法でさえも不可能だからだ。

「はい」

ラミネはポツリと答えた。

ランツばあさんはベッドの近くの椅子に腰を下ろし、

超驚異的治療法の秘話を語り始めた。

「それはな、この森に存在する『女神の神泉』という特殊な

泉が湧くところがあるのじゃ。その水には神の力が宿っていてな、それを飲むと、どんな病気も傷もたちどころに治す事ができる。

まあ、量によって回復の具合は多少異なるがねえ。

その水はあまり市場にも出回っておらず、世間からもあまり知られていないから、

今も滾々と沸き続けているさ」

結局のところ、成分や性質はわかっていないということだろう。

ならば、城に持ち帰って研究してもらおう。

うまくいけば回復術系魔法の大きな進歩につながるかもしれない。

「そんな水がリンディアに存在していたなんて・・・」

ラミネはボソッとつぶやいた。

しかし、ランツばあさんは首をひねったように変な顔をした。

「お前さん、何か勘違いをしてるんじゃないかい？」

ここはリンディアではなく、ラフェルフォードじゃぞ？」

そのときだった。家の外から、ミクレスともう一人の男の声が聞こえてきたのは

二人は玄関のほうに目をやる。次の瞬間、玄関扉が吹っ飛んだ。

「うわあ！！」

ミクレスは玄関扉を突き飛ばし、家の中の壁に激突した。

「いきなり何すんだよ!？」

頭をおさえながらミクレスは叫ぶ。そして、玄関扉があったところら、

背丈が二メートルくらいありそうな巨体の男が現れた。

「はっはっは、しばらく見ない間にナマったな。ミクレスよ」

ぽっかり口をあけて見つめるラミネの横で、ランツがやれやれといった感じで言った。

「なんでもいいけど、ドアは元通り直しておくれよ・・・」

巨体の男は、ラミネの存在に気付いた。

「お？ 客人か。こんな汚い家に、めずらしいな。

・・・俺はスハウって言うんだ。よろしく!」

スハウという名前を聞いたラミネは、驚いた様子で確認をする。

「スハウって、もしかして・・・ファイアーシル四天王の!？」

ファイアーシル四天王・スハウ。どんなときでも紫色の道着に身を包

む、

かつての天才剣士。その厚く引き締まった肉体から繰り出される豪快な戦術は、四天王として相応しいと聞く。

四天王の格付けがされた数日後に行方不明になり、二度と王国に姿を現さなくなったという。

「四天王って呼ぶのはよしてくれ。俺は、そんなに誇れる腕前じゃねえしな!」

そういうとスホウは、高らかに笑った。

「そんなバカ師匠、四天王でもなんでもねえよ。ただの世捨て人だ」
「はっはっは、言うねえ。そんな世捨て人にも勝てない半人前のくせに」

ミクレスとスホウはお互いを罵り合っていた。

そんな二人を眺めるランツが、はあっとため息をついて言う。

「また始まったよ・・・」

CHAPTER 4：出会いと旅立ち（中編）（後書き）

四章・用語辞典（重要事項は）

ファイアーシル四天王

ファイアーシル島の中で最強の四人のことを言う。

・女神の神泉

驚異的回復力を秘める水が湧く泉。

CHAPTER 5：出会いと旅立ち（後編）

二人はお互いを罵り合って楽しんでた。

それを横から見つめるランツは、二人が馬鹿笑いをする度にため息をつく。

そしてその隣で、ラミネはぽかんとしながら賑やかな様子を眺めていた。

「ところでよ、ミクレス。以前に会った時、お前と一緒にいた

銀髪の坊主は今どうしてんのよ？」と、スホウ。

「え・・・あ、ああ。ファールロックのことが。最近あいつと会ってねえからなあ。

わかんね」ミクレスは答えた。

スホウはまたハッハッハと笑うと、ミクレスを貶めるように言った。

「そうか。まああいつ、えらく強かったもんな！

魔法も剣術も両方できたし。ミクレスと違って、王国の上層部で働いてるんじゃないか？」

「俺と違って、は余計だよ」

ミクレスとスホウはとても楽しそうだった。

さっきまでムスツとしていたミクレスも、

人が変わったように喋りだし、そして明るく笑う。

おそらく、この賑やかな雰囲気をつくっているのはスホウだろう。

彼がやってきてから、全てが彼のペースに巻き込まれたような気がする。

そんなことを考えているとき、スホウが大きく身を反らして、ラミネに向いた。

「そつえば、まだ名前聞いてなかったな。なんていう名前なんだ

？」

ラミネはピクつと反応して答えた。

「あ、ラミネといいます」

「はっはっは、別に敬語じゃなくてもいいぞ。そうか、ラミネか。
……もしかして、ミクレスの恋人か！？」

また、時折スホウは意味不明な言動をする。

そんな彼に、ミクレスは本気でバカだなと思いながら、呆れたように呟いた。

「頭痛いんじゃないのか？」

そして、一言「バーカ」と付け加える。

何か言い返そうとしたスホウより先に、ランツばあさんが口を挟んだ。

「馬鹿笑いして楽しむのはいいけど、初対面の女の子に変なこと言うんじゃないよ！」

その言葉の殆どが、スホウに向かって言っているのだということがわかった。

ラミネはクスクスと笑いながら、「愉快な人たちだな」と思った。

実は、彼女はその身分ゆえか、生まれてこの十三年間、

こんなに気軽に話しかけたり笑ったりする人たちを見るのは初めてだった。

自分の周辺はいつも上品でいて当然で、

常に何かに牽制されているかのような状態で、でもどこかでそれは礼儀だから仕方ないのだ、と思っている自分がいた。

しかし、彼らの陽気で堂々とした笑いを見ると、

そんな形だけの振る舞いをしていた過去の自分がバカらしく思えてくる。

そして、自分は今まで何をしてきたんだろう、と思わされる。

スホウは一瞬困ったような顔をした後、ミクレスの肩に手をおいてから言った。

「それよりミクレス、お前ラブレイズに入って弱くなったんじゃないかねか？」

今からちよつと腕試しでもしようじゃないか！」

と、スホウは上手い具合に話を誤魔化した。

「おいおいスホウ、そんなんで話誤魔化してんじゃないよ」

ミクレスは冷笑して言う。

「そんなんじゃないよ。な、ランツ。ちよつとやってきていいか？」

「はあ・・・まあ、行くなら行っておいで。」

そのかわり、あんまり遅くまでやるんじゃないよ」

ランツばあさんは情けなさそうな顔をしてそれを許可した。

陽気なスホウは何故か両手の拳を握り締めて言った。

「よっしゃ、行くぞ！ ミクレス！」

「おいおい、何勝手に話し進めてんだよ」

ミクレスは外に向かおうとするスホウを呼び止めるように言った・・・

が、

スホウは返事もせずに関きっぱなしの扉を抜けて外に出た。

「ったく・・・」

仕方なくミクレスは、勝手なスホウに従うことにした。

「怪我するんじゃないよ」

バカな話をしていると思ったら急に真面目な質問に変わって、質問をし終わったと思った瞬間にまた罵り合いが始まる。

調子の波が激しい二人だったが、ランツばあさんはいつも一定の波を保っており、

彼らの言動には慣れているみたいだった。

ランツはあさんは木のコップを取り出して、保存していた水を入れ始めた。

そして、少し水を入れた後、ラミネに手渡して言った。

「バカばかりですまないねえ」

「いえ、凄く面白いですよ」

ランツは玄関の前に倒されていた、自分の身体よりも大きな扉を持ち上げ、

玄関に合わせようとした。

なんとか中を見えないようにするくらいにはできたが、

扉は玄関にはしっかり嵌っておらず、どちらかといえばもたれてい
るだけ、といった

感じであつた。

ランツは、ふうつと息を吹いてから言う。

「後はあのバカどもに任せるかねえ」

ランツは忙しいそうであつた。

水を汲んできたり、掃除をしたり、家事は殆ど一人でやっている。

ラミネは、その様子をただ見ているだけでは悪いと感じ、ランツに
呼びかけた。

「私にできることがあれば、手伝います」

さきほどの遠慮がちにおどしたものは既になく、
少し力強い口調だつた。

ラミネとランツは表に出て、洗濯物を棒に引っ掛けた。

ベッドから降りたときに気付いたのだが、ラミネは洋服ではなく
綺麗な絹のローブを着用していた。

ランツより少しばかり身長が高いラミネは、その作業をほとんど一
人でこなした。

「あんたがやってくれてほんとに助かったよ」と、ランツ。

ラミネは「いえ」と小さく呟いた後、組み手をするスハウとミクレスのほうに目をやった。

「あの二人は、どういう関係なんですか？」

ラミネは聞いた。

「ただの師弟関係さ。まあ、義理の親子というのもあるがね」
家のほうに戻りながら、ランツは答えた。

ミクレスとスハウは組み手をしていた。

組み手といっても、ミクレスの一方的な攻撃で、それをスハウがかわしたり受け止めたりしているだけだった。

「ちょっとは強くなったかい？」

スハウは挑発するように言った。

「この三年間、遊んでたわけじゃねえんだ」

「そうかい！」

力強い口調になったと思った瞬間、スハウは初めて反撃を仕掛ける。
「うぐ！」

ミクレスは吹っ飛んだ。

ミクレスは手加減なしで本気で攻撃しているのだが、まるで通用しない。

闘うたびに感じることもなのだが、彼にまともな攻撃を当てるのは不可能だと思わされる。

絶対に当たるはずの攻撃が、絶対的な防壁に弾かれる。

彼の周りにはスキというものが存在しないように思えた。

腹部を押さえながら、ミクレスは立ち上がる。

「一発でもまともな攻撃を当てれたら、今日の特訓は終了な!」
「いつから特訓になったんだよ!」

ミクレスは面倒くさそうに呟くと、また絶壁に向かって飛び掛っていった。

まともな攻撃というのは、単に身体に当てるだけの攻撃ではない。スキというものを狙い、防御を破って確実に当てることこそが、まともな攻撃を当てるということである。

この男にそれをするためには、やはり気を引きながらスキをつくるしかない。

ミクレスは手のひらで掴めるくらいの石を拾った。

(ワンパターンな戦法だな)と、スホウは思った。
石を投げ注意を引いてスキを衝く。

まず一発先手を入れるときに使う、常套手段だな。

案の定、ミクレスは石を顔面に投げつけてきた。
スホウはそれを上半身をひよいと逸らしてかわす。
そして、ミクレスは飛び掛ってきていた。

(避けて終いだ、この若造め)

ミクレスは脚を前にして、飛び蹴りを食らわそうとしていたが、
それを読んでいたスホウは驚くこともなく楽々とその攻撃をかわした。

ミクレスはスホウの目の前を通り抜けていく。

情けないと言いたげに、目を閉じながらこう言った。

「残念だったな」

そして、目を開けて続きを言う。

「その手は・・・」

次の瞬間、首がひね曲がってしまいそうな重い何かが、スホウの頬に激突した。不意を衝かれたことで、スホウは一瞬よろめいた。

「ちよつと避けたくらいでいい気になりやがって。このバカ師匠が」ミクレスは得意げに言う。

そのとき、何が起こったのか初めてわかった。

「そうか、三重攻撃か」

戦法はいたって簡単だった。

まず、石を顔面に投げて相手に反撃ができないような状況をつくる。その次に一回目、脚から突っ込んでいくような飛び蹴りをして、スホウの隣を通り抜けていく。

予想通りの攻撃をかわして、油断しているスキに、木を強く蹴って軌道をもう一度スホウに戻し、後は思い切り殴るだけ、というわけだ。

もちろん油断せずに相手の動きを見ている敵には全くもって通用しない、それどころか逆効果になるような戦法だ。

「俺としたことが、バカだと思って油断したぜ」

「もう夕暮れときだし、ちようどいい」

ミクレスたちは、長い組み手を終えて、夕食の待つ？ランツの家へと向かっていった。

ラミネとランツは協力して料理をつくっていた。といっても、森でとれた果物や木の実をナイフで切って皿に乗せるだけの、料理ともいえないシンプルなものだ。

四つの皿に、色とりどりの果物を乗せて、夕食が完成したとき、組み手を終えた二人が家に戻ってきた。

「ただいま」

スホウはもたれかかっている玄関扉を横に退けた。

そのとき、見違えるほど元気な様子でラミネが言った。

「おかえり！」

ミクレスとスホウは、彼女の揚々とした態度に驚いた。

しかし、スホウはまたにつこりと笑顔を見せて、

「ただいま！！」

と明るく返事をした。

四人は、食事が並ぶテーブルについて、この時代ならではの掛け声ではじめた。

「では、皆さんの命に感謝をして

「ラシャーナー！！！！」

最後は四人全員で一斉に言った。

食事を済ませ、彼らはしばらく談笑した。

やがて夜も深くなり、人々が眠りにつくころになった。

スホウは壁にもたれ、ランツは椅子に座り、すやすやと眠っていた。そして、ラミネも眠りにつこうと、掛け布団を被ろうとしていたときである。

ミクレスは、剣をテーブルの上に置き、ウエストポーチも外して、就寝ではなく表へと向かった。

他の三人を起こさないようにと、ゆっくり扉を横に滑らし、半開きの部分から外へと出て行った。

気になったラミネは、掛け布団を退け、床に足を下ろした。

「こんな時間に、いったいどこにいくんだろう・・・？」

ラミネは裸足で静かにミクレスの後を追いかけて、外に出た。

ミクレスは、別にどこか遠くへ行っただけでなかった。

すぐ手前の草原の上で腰を下ろし、遥か頭上に広がる

一面の星空を眺めていたのだ。

「ミクレス？」

ラミネは呼んだ。このときには既に、彼を呼び捨てにできるまでになっただけ。

驚いたミクレスは、ぱつと振り向く。

「なんだ、ラミネか」

そう言ったときには既に、ラミネはミクレスのそばまで来ていた。

「空・・・見てるの？」

「ああ」

ラミネはミクレスのそばに立ち、同じように星空を眺めた。

一瞬ミクレスをチラッと見たラミネは、こんな質問を問い掛けた。

「ミクレスは、王国のもとで戦っているの？」

「まあな」ミクレスはぶっきらぼうに答える。続けて言った。

「正確にはラブレイズってところだけど、まあ似たようなものだ」

ミクレスは、ラミネがリンディア人で、リンディア国でも身分の高い地位にいたということは既知していた。

本来ならば、ハ探りと警戒しながら話さなければいけないのだが、彼女にそんなつもりはないということはわかっていた。

「なんで？」

ラミネは質問を続けた。

「なんで戦うの？」

ミクレスは、星を見つめながら、ただ一言、こう言った。

「平和にするためかな」

実は、ミクレスは戦うというもののほど嫌いなものはなかった。

争いごと、面倒ごと、厄介ごとなど、くだらないことで

労力を使ったりするのはこの上なく嫌いであつた。

それなのに、彼が自らラブレイズという一つの剣士育成機関に入つたかというところ

のためである。

戦いが嫌いだからこそ戦い、戦いを終わらせる。

これこそ彼自身の中で最大の決断だつた。

「そつか・・・」

ラミネは呟いた。

ミクレスの言葉を聞き、少し感動させられた。

たった一言だつたけれど、優しくそして強い声色から、深い決断があつたのだとわかる。

二人はそれ以上会話を交わすことなく、ただじつと星を眺めていた。しばらくしてからラミネは、ミクレスに目で合図を送って家に戻り、静かに眠りについた。

夜が明けた。窓から朝日が差し込んでくる。

光に照らされ、部屋にいた三人は目を覚ました。

「うゝん」

スホウは大きく伸びをする。

そして、ミクレスがいけないことに気付いた。

「あれ、バカ弟子は？」

「きつと外に・・・」

そのとき、玄関扉がギギッと音をたてて動いた。

「あー、やっと起きた？　じゃさ、俺もう行くから」

ミクレスは扉の外から少しだけ顔を出し、三人にそう言った。

「えらく早い出発だな。急いでるのか？」

「ああ、ラブレイズから帰還命令が出てるんだ。

のんびりしてたら間に合わないよ」

と、言いつつも昨日はずいぶんとのんびりしていたはずだ。

「そうか。まあ仕方ねえな。また連絡くれよ！」

「気をつけてな」

スホウとランツはのほほんとしながら言う。

ミクレスは安心して出発した。

ラミネは慌てて扉を開け、ミクレスを追いかけた。

草原を歩く彼の背中に向かって、こう叫んだ。

「待って！　私も・・・私も連れていつて！」

ミクレスは振り向く。そして、こう答えた。

「好きにしろ」

そのとき、ランツがラミネに、あるものを手渡した。

「これは・・・」

手渡されたのは、ラミネが最初着ていた洋服だった。

「頑張つてきなさい」

ランツは優しく微笑んだ。

こうして、ミクレスとラミネは、共に旅をすることになったのだ。
た。

CHAPTER 5：出会いと旅立ち（後編）（後書き）

早くも5章まで参りました！

この調子でどんどんいきたいと思います！

CHAPTER 6：忍び寄る魔の手

ミクレスたちが旅立つ前夜の話である。

ここはカイレトラン帝国。

三国の中で唯一、奴隷制度を設け、
唯一、国家統一主義（国家を統一し、世界は一つの国だけで成り立たせようという考え）
を掲げている帝国である。

さらに、帝国は弱肉強食の世界で、剣術が優れるものならば誰でも国の頂点に立つことさえも許されるという、非常に不安定な国である。

つまりいえば、帝王は相当の腕前を持つということである。

そして、現在帝国を治める王は、
赤く高貴なマントを身に纏った、キヤリオルという名の男である。
キヤリオルは、その独裁的な政治の仕方でも国家統一主義をたてまえに
三国の大戦争を引き起こした元凶だ。
とても冷酷非道な性質で、気に入らないヤツは排斥しようとする性格を持つ。

しかもその上、彼は剣術において一頭地を抜く実力を誇っており、
誰も彼に逆らうことができない。

そして、彼ととても意気投合する味方が、
ファイアーシル四天王の一人、ルルカ・シャトルークである。
氷の白影々という二つ名を持ち、

その名の通り、戦闘に出るときは常に白く厚い鎧に身を包み、
何の躊躇もなく笑いながら人をなぎ倒していく冷酷な心を持ってい

る。

彼のそのような志にえらく感心を持ったキャリオルは、ルル力を第一直属特攻隊として最も前線で、最も暴れられる位置につかせたという。

王座に座るキャリオルの前でひざまずく、少し太った部隊長が言った。

「キャリオル様、ブラッドグリフの空軍の準備は既に整っております。

命令次第で、いつでも出撃させられます。」

「進撃相手はどちらにしつけておいたのだ？」

キャリオルの質問に、部隊長は顔を上げて言う。

「はい、ラフェルフォードを対象として……。」

その言葉に、キャリオルは顔をしかめた。

「今すぐリンディア対象に変更しろ。」

「はっ、しかし……。」

「何だ？」

キャリオルは部隊長を、冷たい目で見つめた。

その瞬間、この上ない恐怖のかたまりが部隊長を襲う。

恐怖に引きつった部隊長の顔を見て、キャリオルはクククと笑った。

「ラフェルフォードは領土も兵力もたかが知れてる。

リンディアと決裂したことでもはや国とも言い難い

弱小国家へと成り下がってくれた。そんな弱敵に、

我々の主力部隊を送る必要などない。数を送っていればそのうち落ちる。

それに、そのことは貴様も承知のことだろう？

ならば、我々の敵はリンディア魔法国一つということとは言わなくても判る自然な答えであろうが。

判ったらさっさとその豚みたいな身体を退ける。」

キヤリオルはだんだんと口調を強め、最後は憤慨した。
部隊長は震えながら返事をし、早々とその場を立ち去った。

その傍らで二人の会話を眺めていたルルカは、
友達感覚のような気軽な口調で提案した。

「ラフェルフォードは確かに小勢力でしょうが、
彼らにはフィアーシル四天王が二人います。

たかが二人かもしれませんが、大きな脅威に

」

キヤリオルは微笑みながら彼の言葉を遮った。

「そのうちの一人は隠居でコソコソと暮らしている臆病者だ。四天王が聞いて呆れる。

そんなクズどもの集まりに恐れることなど何もない。」

どうやらキヤリオルは、ラフェルフォードを敵とすら思っていないようだった。

あえて言うなら、リンディアのオマケといったようなものである。

「我々の力ならばリンディアも同様に数で圧倒することができるだろう。」

だが、彼らには広範囲を一度に攻撃できる「魔法」が存在する。
特に提唱によって発動する上級魔法は多大な被害を被りかねない。
数が少ないからといってラフェルフォードと同列に扱うのは危険だ」

ルルカはいつもと同様、得意げにずかずかと言った。

「突出的な戦力がないからといって、ラフェルフォードを甘く見るのは危険です」

キヤリオルはルルカにチラッと視線を送る。

「フツ、詭弁だな。仮に甘く見る行為が愚行だとしても、

彼らと総力的に比較すれば頭数だけでも我々が圧倒的に優勢なのは事実」

「全く、貴方ときたら・・・」

そういいながらも、ルルカはニヤニヤと笑っていた。

ルルカからしても、キャリオルの絶対的自身に溢れた言動は非常に興味深いものがあり、信頼できるものがある。

事実、彼が起こしたこの大戦争も、実行前は無茶だといわれ続けた戦法で

形勢を優位に運んできているのだ。

独裁という形をとれば、価値観の相違によって謬見や批判の声が飛び交ってくるが、

彼はキャリオルの発言にこそ絶対性があり、信頼性があると信じている。

「それよりルルカよ。以前にフォローガルと再戦したいと言っていたが、

本当にそれでいいのか？ 私としては、お前を危険に曝すという行為自体が

好ましくないのだが」

フォローガルとは、ファイシル四天王の一人であり、ラブレイズを指揮する最高司令官の男のことである。

以前にルルカは、フォローガルと雌雄を決する戦いをしたのだが、思わぬアクシデントのためにルルカの敗退として終わってしまったのだ。

自分の剣術に絶対的な自信を持つルルカは、納得のいかない終わり方に

悲嘆し、次こそ必ずフォローガルの首をとることを誓ったのだ。

ルルカは、周りにいるものを畏怖させてしまうようなほどの形相で言った。

「あいつの首は俺が狩^とる！ 誰にも邪魔はさせねえ！」
まるで狂ってしまったかのような発言だった。

「わかった。貴様に任せよう」キヤリオルは言った。

ラフェルフォードは、強者社会の帝国と違って、剣術を学ぶのは個人の自由としている。

故に、ルルカが敵の頭を潰してくれれば、後は大した力を使わなくても勝てるだろう。

圧倒的な戦力を持つということは、この上なく快感なことである。全力でかかってさえも捻じ伏せることのできる強さ。指示一つでそれを行うことのできる権力。

全ては帝王という地位につけたからできることだ。だとすれば、なんと素晴らしい地位なのだろうか。

キヤリオルは立ち上がり、歩き出した。

「どちらへ？」と、ルルカ。

「お休みの時間だ」

キヤリオルは微笑んだ。

キヤリオルは、直線に敷かれている赤い絨毯の上を大股で歩いた。王の間の扉の前へ来、取っ手に触れようとした瞬間、眼前の扉がバツと開いた。

「あ、キヤリオル様！ 大変でございます！」

見回りの兵士が、何やら慌てた様子で叫んだ。

「何だ、騒々しい」

「そ、それが、たった今、リハイム大橋が落ちたという連絡を受け取り・・・」

「何だと!？」

リハイム大橋というのは、帝国中部から北西部を繋ぐ唯一の鉄橋のことである。

それが落ちてしまったなれば、北西部との行き来ができなくなるの

だ。

急な事態に驚いていたキヤリオルに、さらなる悪夢が襲い掛かった。

突然現れたもう一人の兵士が、慌てた様子で言った。

「た、た、大変です！ デインブルが、デインブルが落とされました！！」

「野郎！」

キヤリオルは兵士の胸倉をつかんで持ち上げた。

「それは確かなのか！？」

「は、はい！！ たった今、連絡が・・・」

「クソ！」

キヤリオルは震える兵士を投げ飛ばした。

そして、振り向き駆け足でバルコニーへと向かう。

焦った様子で駆ける帝王に、ルル力はいぶかしげな顔をして聞いた。

「何事ですか？」

「黙れ」

キヤリオルはルル力を軽く流した後、バルコニーへの扉を両手で押し開いた。

キヤリオルは遙か遠くを眺めた。

青々と続く夜空の先、地平線が赤く燃えている。

「クソ！ いったい何が起こったというのだ！？」

キヤリオルは叫んだ。

眼前に燃えるディアンブルの前に、二人の影が映った。
トゲトゲが生える奇妙な法衣を身に纏う女と、

炎を模したように燃えるコートを着た男

レフェードだ。

「よく燃えるねえ！ メラメラだねえ！」レフェードは微笑みながら言った。

「ところでレフェードよ、貴様は帝国の担当ではないはずだろう？ では何故ここにいるのだ？」鋭い視線をレフェードに移した女は問うた。

「リンディアの任務があまりに早く終わっちまってな。手伝いにきたんだよ」

「フン、私一人で十分な仕事だよ」

女はそういうと、呆れた様子でその場を立ち去ろうとした。

「おいおい、待ててば」

レフェードも後に続く。

そして二人は、燃え盛る炎を背に、カイレトラン帝国を後にした。

王国軍でもなく、魔法国軍でもなく、そして帝国軍でもない。
では彼らはいったい何者なのか？
謎は深まるばかりであった

CHAPTER 6：忍び寄る魔の手（後書き）

一日一日順調に更新中です！

この調子で頑張ります！（これ前も同じこと言ってた！？）

とりあえず、今回はこれを覚えましょう！

提唱による上級魔法

意思だけで発動させることができる下級魔法に対して上級魔法は言葉を唱えなければ発動しない仕組みになっている。

CHAPTER 7：帰還の旅路

ミクレスは、ラミネに次の目的地を伝え、共にひたすら北へと向かっていった。

果てしなく続く平原の先に、ぼんやりと雪山が見え始めていた。

ラブレイズの本部は、帝国との国境であるその雪山のすぐ手前にあり、

ラブレイズ自治組織（東西南北支部＆本部）の中でも最も北に位置する。

ミクレスは、ラミネがリンディア人だとラブレイズの者に気付かれないように、魔法の使用禁止と、彼が身につけていた懐剣を腰に掛けるように言った。

幸い、リンディア人には民族特有の容姿や衣装がないため、ちよつとした細工を加えるだけでもある程度は通用する。

しかし、バレてしまったときは非常にマズイ。

リンディア人のラミネはもちろん、ミクレスの処分もただでは済まされないだろう。

それはミクレス自身も重々承知していることであるし、ラミネだってそれくらいは言われなくても判っている。

正直、ラミネをランツの家で待機させ、

任務を受けた後に迎えに来るという方法でもよかった。

しかし、それでは時間制限のある任務などのときにはランツの家に立ち寄ることさえもできないし、

何よりスハウが何故かそれを許さなかったのだ。

しかし、ミクレスがある意味仲間を裏切る危険な行為を行い、彼女を旅のお供として連れて行こうとした理由は

スホウの強制や仕方ないなどの軽いものではなかった。

実は、ミクレスは彼女に「連れて行って」と叫ばれたときは、正直否定するつもりであつた。

その気持ちを変えたものというのは、彼女の強い「眼」であつた。

ミクレスがあるとき、振り向いて彼女を眼を見たとき、彼の心境は一変した。

彼女の眼は、自分の持つ大きな意志を強く語っていた。少なくとも、ミクレスはそう確信している。

彼女は単に旅を楽しむためにそう頼んだのではなく、自分の心にある重い何かを納得のいくものにするために頼んだのだと。

しかし、ラミネには旅についてくる代わりに、

ミクレス自身のペースを乱すことは許さないと約束させた。

たとえば、ミクレスの朝から夜まで歩き通すというたびのスタイルである。

もちろん、もしこれで彼女が自分についていけないというのならば、その場に置き去りにしてやるつもりだ。

ラミネはミクレスとお揃いの（ランツから貰った）ウエストポーチに手を入れ、

手のひらに包み込んでしまえるくらいの小さなボトルを取り出した。

「あ、間違えた」

ラミネは咄嗟に呟く。

「どうした？」歩きながらミクレスは聞いた。

「いえ、ちよつと間違っただけ」

ラミネが手にしていたボトルは、女神の神泉から取り入れた、不思議な力を持つ水を入れたボトルであつた。

彼女は普通の飲み水とはつきり区別するため、ボトルの大きさが違うものにして入れておいたのだが、やはり間違えてしまったのだ。

ラミネは神泉の水が入ったボトルをバッグに戻し、次に大きなボトルを取り出した。

こちらは普通の飲み水が入ったボトルである。

ラミネはふたを開け、のどを潤した。

彼らは、ミクレスの旅のスタイルに従って本部に向かっていた。普段、徒歩で長距離を踏むことがなかったラミネは、きつと一歩一歩が辛いはずだ。

そう感じたラミネに、ミクレスは声をかける。

「お前、こんな歩き続いで大丈夫なのか？」

ラミネは俯いていた顔を上げ、こう答えた。

「うん。それに、約束したし」

出発して三日目になるが、彼女は決して弱音を吐くことはなかった。

この分だと、後二日もあれば目的地に辿り着くだろう。期限的に余裕だったが、ミクレスはあえて休息をとることはしなかった。

北に向かうほど、肌寒い風が吹き通るのがわかった。

雲際に見えていた国境の雪山は、もうその巨体さをあらわにし、その影を正していた。

もうすぐ、本部のあるアレが見えることではないだろうか。

ミクレスは歩きながら言った。

「ラブレイズ本部は、あの雪山のすぐ手前につくられている。後もう少し歩けば見えてくるだろう」

「うん」

ミクレスはラミネのほうをチラッと見やると、
彼女はどことなく力強さを感じさせるような笑みを浮かべていた。

ミクレスは、他にも自分たちと同様に本部へと向かっている者たち
と出会ったりすると

予想していたのだが、ここまできてまだ誰一人として
そのような者とは会っていないかった。

そしてまた一日が過ぎ、とうとう雪山の入り口付近まで来ていた。

ラミネはあたりを見渡した。しかし、本部といえるものらしき建物はどこにもない。

あるのは雪山と、木々と草原だけであった。

あちこちに目を回すラミネに、ミクレスは一言声をかけた。

「こっちだ」

ラミネはミクレスの後について歩いた。

とうに枯れ果てた木々の中を通り抜け、彼らは広場なようなところにでた。

その広場の中心に、まるで人の形をしたような奇妙で巨大な木があった。

ミクレスは黙ってそれに近づいた。

そして、巨木の周りを歩き始めて、何かを探し出した。

ミクレスはあるところで足を止め、その視線の先には目印のような跡があった。

ミクレスは巨木を見て言った。

「ここだ。ここが、ラブレイズ本部への入り口」

そして、ミクレスはその目印を強く押した。

次の瞬間、その部分が強くめり込み、ちょうど人が入れるくらいの穴が現れた。

とたんに、白い冷気が漏れ出す。

「凄い・・・これなら、襲撃されることはまずないよ」

「まあ総隊長さんは用心深いお方だからな」

ラミネは目を丸くして穴を見つめていた。

「さあ、急いで中へ入ろう！ 誰かに見られていてはマズイ」
ラブレイズ本部は、この入り口の秘密を公にはしていない。
それは、総隊長フォローガル直々の命令であった。

ミクレスとラミネは、急いで穴の中へと入っていった。

CHAPTER 7：帰還の旅路（後書き）

「そう感じたラミネに、ミクレスは声をかける」
この部分、ミスです。

「そう感じたミクレスは、ラミネに声をかける」
です。

「いやー恥ずかしいです（汗）」
もっと文章読み返します！

CHAPTER 8：それぞれの任務

暗い、螺旋状の階段だった。蝋燭がないため、足元も見えない状態である。

ミクレスたちは、壁を手で追いながら、螺旋状に続く階段を下りていった。

やがて出口らしきところに、小さな光が見えた。

二人は、暗闇に慣れていたので、眩しい光を浴びたような感覚にとらわれながらも、

そこに広がる世界を見つめた。

「これが・・・ラブレイズ・・・」
ラミネは驚嘆した。

ラブレイズ本部とは、地下都市。

ラブレイズ本部とは、地下の世界に栄える一つの王国。

予想を遥かに超える規模の大組織だ。

眼下には、屋根が針のように尖る家々が続いていた。

その中心を真っ直ぐ貫く、巨大な道の先には、屋根が天井に突き刺さるほどの高さを持つ

石造りの巨大で頑丈そうな城が築かれていた。

その背後は真っ暗で、ほとんどよく見えないが、おそらく壁だろうと予想できる。

空気はひんやりと冷たく、湿っていた。

それは、どこことなく寂しげな感じがした。

ラミネは目を丸くしてその圧巻たる風景を眺めていた。

「凄い・・・想像以上に、凄い」

「フィアーシル島の自治組織ではおそらく最高だろうな」

ラブレイズ本部は、地下都市ゆえか、かなり殺伐とした雰囲気を出していた。

どっしりとした重い空気と、じんまりした厚い壁が、その迫力を生み出している。

ミクレスたちはさらに階段を下りていった。

足元が地に触れた。

中心を貫く広大な面積の大通りに出たとき、ミクレス是不思議そうに呟く。

「おかしいな・・・。何故誰もいないんだ？」

この大通りは、いつもむさ苦しい剣士たちで賑わっているはずだった。

しかし、今日に限ってその様子はどこにも見られない。

ここに来る途中から、何かが変だと思っていた。

本部には三百人ほどの剣士が所属しており、

しかも今回は支部からも召集しているはずなのに、

ここへ来る途中、その誰とも出くわすことはなかった。

ミクレスは、急に嫌な不安に駆られた。

「まさか！」

咄嗟に走り出す。

「ミクレス！？」

ラミネもすぐさま追いかけた。

ミクレスはとても焦っている様子だった。

ミクレスは急いで眼前の城に向かった。

もしも、もしもだ。

ラブレイズ本部帰還命令を聞きつけ、本部に向かうラブレイズを襲うものがいたとしたら？

好機と見て、ラブレイズ狩りを行う者がいたとしたら？

もしもそうなら、ラブレイズは・・・。

頭に一瞬、絶望の文字がよぎった。

冷や汗が頬をつたる。

ミクレスは、城門を突き破るような勢いで押し開けた。

ミクレスは、そこで信じられないものを目にした。

「遅かったではないか」

ラブレイズ総隊長、フォローガルの声だ。

何も心配する必要はなかった。

冷静に考えてみれば、ラブレイズがそう簡単に崩壊するはずがない。

門を開けた先は、大きな中庭だった。

そして、中庭を埋め尽くしてしまうかのような大勢の剣士たちが、

フォローガルの言葉でそのミクレスの存在に気付き、遅れてきた彼に悪態をついた。

「おせえんだよこのノロマ！」

「何日待ったと思っっているんだい！？」

「そこで土下座して謝れ、カス野郎！」

ミクレスは、自分が来たことで一気に辺りがざわついたのだと思った。

自分より遙かに年下のくせに、自分と同じ土俵に立って活躍しているミクレスに、よく思っていない連中は少なからずいる。彼らにとっては今こそ罵詈雑言を浴びせられる絶好の機会なのだろう。

「ミクレス！」

すぐ後ろで、ラミネの声がした。

「ああ・・・」ミクレスは微妙な返事をする。

たくさんの男女から冷たい視線を浴び、悪口を言われているミクレスを見て、

ラミネはすぐ耳元でささやいた。

「これ、どういうこと？」

「俺の早とちりだったみたいだ」

そのときだった。

「静まれ！！」

耳をつんざくような大声が、地下中にこだました。フォローガルだ。流れが急に逆流したかのように、あたりは一瞬にして静まり返った。フォローガルは城内前の扉に立っていて、その隣には

ラブレイズ第六天の五人（フォローガルを入れて六人）がいた。

彼ら六人は、胸に、剣をクロスさせたような紋章をつけた、白く滑らかで薄そうな服を着ていた。

第六天の中でも、フォローガルは最も背が低く、一番年老いている。

彼は、薄い白髪と刺すように鋭い目つきが特徴の、

ラブレイズを総統する七十歳の老人だ。

腰はまだ曲がっておらず、まだまだ現役のファイアーシル四天王の一人である。

フォローガルは、階段の上から数百人の剣士を見下ろしてこう言っ

た。

「その小僧は後でわしから直々に説教をしておこう」

その言葉を聞いたとたん、一部の剣士たちの間から歓声が起こった。フォローガルは一瞬微笑んだが、すぐに顔色を変えた。

「さて、本日君たちラブレイズに集まってもらったのは、

極秘事項を我ら第六天より直々に伝えるためである。

よって、これから話すことは一度しか言わぬからよく聞いておくことだ」

そういうとフォローガルは後ろに下がり、第六天の一人、シズと交代した。

「そこで、私からまず詳細を説明いたします。

無論、貴方たちがある程度既知しているということを前提で、

序論は省きます」

シズは、顔つき、ロンゲ、スタイル、口調、戦闘、その全てがハ滑らかで、ということが

特徴の若い青年だ。また、非常にマイペースである。

「我が王国軍は、まだ万全な態勢にありません。

言い換えれば穴だらけ、衝かれれば痛い急所が多い。

また、知つてのとおり、帝国軍には圧倒的な兵力、魔法国軍には魔法という

脅威的な武器があります。

それに対抗するには、現在ある未完成の部分を強化するとともに、万全な態勢を整えることが第一だと判断しました」

その後、シズの長々しい演説のような話が続いた。

やがて人々が飽き飽きしてきたころ、シズはリストという男に交代した。

「ある程度理解して頂けたかと思しますので、

今から貴方たちに、一つずつ任務を与えていきます。

一度しか言わないのでよく聞いていてください。

まず、ピクバネン、ジガル、ロロフザンの組」

リストは、人々に一つずつ任務を与えていった。彼はとても知的で、数百人の任務を全て記憶しているかのように、全く詰まることなく易々と伝えていった。

任務を与えられた者は、早速現地へ向かい、もうここでの用は済んだ。

「へたったこれだけのためにわざわざここまで呼んだのか!？」と文句を言う者も結構いる。

ミクレスたちは最後列からその様子を眺めており、だんだんと空いていく広間を、自分に任務が与えられるまでじっと待っていた。

「ねえ、どんな任務を与えられるのかな？」

ラミネは聞いた。

「わからねえ。ただ、もの凄く危険な任務を与えられるだろうよ」

とうとうミクレスたちの番まで回ってきたときには、

もう周りには誰もおらず、つまり、ミクレスたちが最後だった。

そのころには、中庭の中心にある噴水や、ベンチなどがよく見渡せた。

しかし、しばらくしてもリストはミクレスたちに任務を与える様子はない。

「おい、どうしたんだよ？」

ミクレスは首をひねって叫んだ。

そのとき、フォローガルは不機嫌そうな表情でつぶやいた。

「どうしたもこうしたもあるか、このたわけめ！」

我々を何日も待たせた上に、リンディア人の娘に本部の場所をバラしおって……」

「！！」

ミクレスはドキッとした。

彼らには完全に見透かされている！？

知恵と経験から、ラミネがリンディア人だと見極めたのだろうか。何にせよ、これはマズイ。なんとかして誤魔化さなければ。

「おいおい、ちょっと待てよ。」

確かにこいつはラブレイズじゃないけど、リンディア人なんて

「

」とぼけても無駄ですよ」

シズは微笑みながら言った。ダメだ。彼らを騙すなんて不可能だ。

ミクレスは手に汗を握った。

心臓が激しく鼓動する。そして、こういう言葉を思い出す。

「本部の秘密を他国に明かせば殺処分、及び、暗殺命令の発信」
ミクレスは、そのとき本気で死を覚悟した。

ラミネも息を吞んで第六天を見つめていた。なんとなく何が起こるか理解できる。

規則を破ったことで、罰を与えようというのだろう。それも、重い罰を。

ラミネは、まるで、かつてレフェードと対戦したときに覚えた恐怖がよみがえってくるようだった。

恐怖に顔が引きつる二人に、フォローガルは微笑んで言った。

「ハッハッハ、どうせおぬしのことだから

いつかこんなことをやらかすと思っていたよ」

「こいつは、俺の仲間なんだ。敵じゃねえよ！」

ミクレスは必死で叫んだ。

その様子を見るたびに、フォローガルはだんだんと笑みを増す。

「わかってる。元々、おぬしらを罰する気はこれっぽっちもない」
「は!？」

一瞬意味がわからなかった。
「今回だけは許してやろう」

フローガルは高らかに笑った。

そのたった一言で、急に楽になったような気がした。

「まったく、人が悪いんだよ……で、任務つてのは何なんだ？」

「君たちの任務は、セレディー大雪山^{だいせつざん}の
調査をすること、それだけだ」リストは答えた。

セレディー大雪山とは、アクスラ機関の近くにあるラフェルフォード最大の雪山である。

ちなみに、「大雪山」は、大雪が降る山ではなく、大きな雪山という意味である。

セレディー大雪山は、貴重な自然として国から直接保護されており、本格的な調査はまだ実行されていない。

「つまり、セレディーに何か異常がないか、確かめて来いということか？」

このように、セレディーと略されることもある。

「言い換えればそういうことだ。あそこはアクスラ機関の実力を最も発揮できる唯一の神山だからね」シズは滑らかに答える。

「なるほど、わかった。じゃさつさと終わらせよう。ラミネ」

「うん」ラミネは小さく返事をした。

早々と立ち去ろうとする二人に、フローガルは慌てて呼び止めた。

「まあ待て。……お前たちには王国軍から援軍が呼ばれておる。まずはその者たちのもとへ向かうのだ。」

ミクレスは立ち止まった。

「……わかった。で、そいつらはどこにいるんだ？」

「ラフェルフォード城下町だ」

ミクレスは不可解そうな表情を浮かべた。

「城下町って、セレディーに向かうなら

そいつらがこつちに来たほうが早いじゃねえか？」

「まあそういうな」

ラフェルフォード城下町は、王国の中心部にある。

そして、セレディー大雪山はラフェルフォード最北端の山だ。

つまり、ラブレイズ本部からラフェルフォード城下町に行き、

セレディー大雪山に向かうのはかなり遠回りになるというわけだ。

ミクレスはぶつきらばうに返事をした。

「ちっ、わかったよ。じゃ、もう行くぜ」

ミクレスは、少し納得がいかない、という表情をしながらラブレイズ本部を後にした。

誰もいない中庭に、第六天だけが突っ立っていた。

やがて、シズとフォローガル以外の第六天は城内へと戻っていった。

フォローガルは尋ねた。

「シズよ、帝国軍のリハイム大橋が落ち、さらにディンブルも崩壊したという

情報は聞いたか？」

「はい。帝国軍の中でも基本的に内密になっておりますが、

偵察者の連絡より、既に第六天には。」シズは答える。

フォローガルは不気味な笑みを浮かべた。

その笑みが、シズに嫌な心配を与えさせる。

「フォローガル様、あまり無茶はお考えにならないでください・・・」
「シズはつぶやく。しかし・・・。」

「思っても見なかった最大の好機だ。
奴らの前線部隊、ザッと見積もって五千人ほど葬っておこうではないか」

やはり聞いていなかった。

そして、そんな無茶苦茶な作戦にさえもシズは共に行かなければ成らない。

なぜなら、シズは総隊長直属護衛兵だからである。

「はあ・・・。言い出したら聞かない」

「そうと決まれば早速出発する。これは任務だ」

そして今、最上層部を含めた、それぞれの任務が始まるのであった。

CHAPTER 9：合流

ミクレスは、ラミネを引き連れてしゅしゅ城下町へと向かっていた。ランツの家から本部までは五日前後だったが、

今度は何日かかるだろうか？五日？七日？いや、十日？

そう考えるたびに、向こうから本部に来ればいいのに、と思う。

わざわざ自分たちが遠回りをして、非効率的なことをしている暇はあるのか？

そんなことを考えていながら、ただひたすらに続く平原を歩いているのだった。

あるときラミネはこんなことを言った。

「ラフェルフォードって、やっぱり必死なんだね」

何気ない言葉だった。ミクレスはあえて返事をしなかった。

それは、ラフェルフォードに限らず三国どの国にとっても同じことだから。

しかし、ラミネが本当に言いたいことは、そんなことではなかった。遠くを見つめながら、彼女は数週間前に起こった出来事を語り始めた。

それは、彼女が姫という立場で城に住んでいたころの話である。

レフェードと名乗る男に、突然城を襲われ、

たくさんの人を殺し、父さえも殺し、自身も殺されかけたこと、そして、男がラフェルフォードの紋章をつけていたことだ。

「その男は、ハウソと引き換えに、リンディア国の秘密を知ることができた。」

リンディア人をまんまと騙したんだ」と言っていた。
まるで勝ち誇ったように・・・」

その一部始終を話し終えたラミネは、背中越しに聞くミクレスに、
こう言った。

「でも、私はその男が本当にラフェルフォードの戦士だとは思わ
ないの。」

ラブレイズ本部のことを見てた限り、彼が言っていた言葉は全
ておかしい。

それに・・・ラフェルフォードの人々は、皆良い人だった」

ラミネは俯いた。その様子を、ミクレスは一瞬振り向いて見る。

ミクレスは手を服のポケットに突っ込んだ後、辛辣そうに言った。

「ラフェルフォード人が良い人かどうかはともかく、

そいつの発言は確かにおかしいな。」

・・・そうか、何故リンディアから関係を断ち切られたのか
ひそかな疑問だったが、そういうことだったのか」

もし、彼女の話が本当だとしたら、その騒動を起こしたのはおそ
らく帝国軍だろう。

二国の関係がぶち壊れて最終的に得をするのは帝国しかない。

それに・・・そんな卑劣なことを平気で行えるのは、
冷酷非道な帝王を持つ帝国軍以外有り得ないからだ。

ミクレスは拳を握り締めた。帝国軍が起こしたこの戦争で、

何人の仲間が死んでいったと思っっているんだ？

そして、尚もラフェルフォードを貶めて、どこまで俺らを苦しめた
ら気が済むんだ？

ミクレスは、このとき初めて厭戦ではなく厭世というものを強く感

じた。

・・・しかし、今はどういったところで仕方がなかった、やるべきことをやるしかないのだ。

「クソッ！」

低く、しかしとても感情が籠った声だった。

それからラフェルフォード城下町に着くまでの十日間、体調管理以外での会話は殆ど交わされることはなかった。ラフィーネから手紙を受け取ることもなかったし、特にこれといった事件もなかった。

そして十日後。

彼らの食料も尽き、ラフィーネの届けてくる小さなパンや木の実など

旅をしていたところだった。

丘を登ったすぐ先に、巨大な城壁が現れた。

「これがラフェルフォード城だ」

ミクレスはつぶやく。ラミネは、ラブレイズ本部のときよりカリアクシヨンも低く、

いたって普通の表情をしていた。

太陽と向かい側にある城壁の面には、二人の兵士に見張られた大きな門があり、

どうやら城下町へと続いているようだ。

ミクレスたちは、少し安心したようにそこへと向かった。

門を通り抜けようとする旅人に、二人の兵士は槍をクロスして行く手を塞いだ。

何か言うかと思えば、二人はそこを通さないだけで、ただひたすらと無言を続けていた。

「俺たち、ラブレイズ本部からセレディー調査隊員と合流するためやってきた者だよ。連絡はもらってるはずだろ？」と、ミクレス。

兵士たちは、互いに目で合図を取り合った。

何やら「若すぎるだろ」や「本当に通していいのか」と言った様な実にくだらないことを言い合っているような様子だ。

「ああ、じゃこれでいいだろ？」

そういうと、ミクレスは面倒くさそうに短剣を取り出し、そのつかを兵士たちに見せつけた。

「ホラ、ラフェルフォードの紋章だ」

そこには、確かにラフェルフォードの紋章が彫られていた。

それをしばらく見つめた兵士たちは、速やかに槍を退け、申し訳なさそうにこう言った。

「し、失礼いたしました。どうぞ、お通りください」

ミクレスは、フンと鼻を鳴らして短剣を直した。

ミクレスたちはまず、城下町に出た。

城下町は、絶えず人々で賑わっており、

剣士や住民たちが至るところで会話や買い物などを楽しんでいた。

すぐ右側には、「宿屋バツテル」と書かれた看板を掲げた宿屋があり、

昼間からぼんやりとランプに火を灯している。

正面には城へと続く大きな道があり、その右側には
武具屋・食堂・食料売り場などが賑わっていた。

左側には城下町を二等分するような水道が横切っており、
そこには小さな橋がかけられ、そのさらに向こうには教会や
キャリナーショップ（キャリナー用品を売る店）などがあった。

ミクレスたちは、セレディー調査隊員と合流する前に、まず食料を
補給することにした。

人が集まる食料売り場ではなく、行商人から購入したほうが効率が
よさそうだ。

巨大な荷物を背負った小太りの男に、ミクレスたちは歩み寄った。
「へいらっしやい！！！」

よく通った、うるさいくらいの声だ。

ミクレスはラミネと隣に並び、彼女に先に食料を買うように言った。
「日持ちの良いパンと果物、後、ボトル二杯分の水をください」

旅をするには十分な注文だった。

ミクレスは、彼女の言葉に付け足すように言った。

「パンは八個、果物は五個、後、酸性角砂糖を二十個付け足してく
れ」

「ほう、酸性角砂糖か。あんた、変わったもん注文してくるんだね
え！！」

「いいだろう！ 合わせて60テイルだ」

テイルとはこの世界の通貨。1テイル＝30円 よって60テイル
は1800円だ。

ちなみに、食料売り場の店員は、酸性角砂糖を普通の人には売らな
いだろう。

それをあえて踏まえての行商人だ。

行商人は「売ればいい」的な考えを持つ傾向が強いため、いちいち「自分のアティーチが食べる」などと説明しなくても簡単に手に入る。

ミクレスはバッグから60テイルを取り出し、男に手渡した。

「まいどー!」

行商人が商品を手にとっている間に、ミクレスはラミネに尋ねた。

「お前さ、キャリアナード持つてるの？」

これは、以前から不思議に思っていたことだ。

ここ数日、ラミネと共に旅をしてきたが、彼女のキャリアナーを見たことはない。

「ああ、安心して。あんまりなついていないけど、ちゃんというよ」
ラミネは答えた。そして、ニコッと微笑んだ。

そのときだった。妙に馴れ馴れしい口調で、背後から声をかけられたのは。

「君たちが、俺らと一緒にセレディーの調査に向かうヤツかい？」

二人は振り向く。

そこには、男と女の二人組みが微笑しながら立っていた。

おそらく、彼らが共にセレディーへと向かうメンバーだろう。

いったい、どんな人たちなのだろうか・・・？

CHAPTER 10：フルクと愉快的仲間たち

眼前には、男と女の二人組みが立っていた。

男のほうは、肩くらいまで伸びた金髪と、とても格好良い顔つきが特徴の、

十六歳くらいの少年だ。赤色のローブと、背中に背負う巨大な弓も印象的だ。

身長は百七十五センチ強で、ミクレスを少し見下ろすくらいである。一方、女のほうは、ラミネと同じくらいの身長、百五十五センチ強くらいで、

髪の色は黒。ポニーテールが特徴だ。

さらに、くりくりした目を持つ顔とは裏腹に、へそが見える騎士の鎧を装着していた。

男女の上から下までを見つめているとき、行商人が叫んだ。

「へい！ お待ち！」

ミクレスは慌てて振り向く。そして、彼が商品を受け取っていると、きであった。

金髪の少年が目を細くして、さらに格好の良い顔をしてラミネを見つめた。

「なんと美しい……。貴方のような綺麗な方と

共に調査をできるなんて、まるで夢のようです」

そして、ラミネのあごを優しくつかむ。

少年はラミネに顔を近づけ、優しく微笑んでから呟いた。

「やはり……。今日こうして出会えたことは、何かの……」

「あ、あの……。いきなりそれは……」

ラミネは後ずさりして、困ったような顔をした。

ようやく、ミクレスは商品を受け取り、売買を終えたところであった。

そして、困るラミネに妙に近づいて口説く少年を見て、こう呟いた。
「なんだ？ あいつ」

同じくその様子を見つめていた女が、呆れたように言う。

「フルクは大の女好きで……。ちよつと可愛い子見つけたらあんなふうにく説きはじめるのよね……」

ミクレスは手荷物をバッグに入れながら、独り言のように言った。

「ああ、いわゆる女誑たうしてヤツか」

そして、世も末だな、と思った。

その言葉をひそかに聞いていたフルクという男が、ミクレスに接近して語り始める。

「女誑とは人聞きが悪い。俺は女を誑しているのではなく、女を愛しているのだよ。女を愛することこそ、我々男どもの使命！ 恋をしたことある者にはわかるはず。この気持ち、この熱烈な感情！

ああ、可哀想な坊や、君は恋をしたことがないんだね……。フルクは大袈裟に、落胆したような仕草をした。

ミクレスは恋をしたことがなければ女に興味さえもなかったため、この男の言葉には理解に苦しんだ。

いや、恋をしたとしても理解に苦しむだろうと思った。

「どうでもいいけど、お前頭痛いだろ？」
咄嗟に出てきた言葉がコレだった。

ミクレスの中での結論。ふこいつは頭がおかしいだ。

フルクはやれやれといった仕草をし、また変なことを言い出す。

「愛することはそんなにおかしいことか？ それでは男として最悪

だぞ？」

頑固としても自分の意見を曲げないフルクに、
まるで子供をしつける親のような態度で女は呟いた。

「とにかく、いきなり女の子にあんなことをするのは失礼だわ、フルク」

「そうか、それは失礼」

本当に気障キザな物言いだった。

しかし、ラミネはニコッと笑って答えた。

「いえ、気にしてませんから」

女は一度頷いてから「じゃそろそろ本題へと入りましょうか」と言
った。

「ああ、それよりまず確認だ。お前らラブレイズから来た調査メン
バーのヤツらか？」

ん？ 待てよ。手紙には一人だと書いていたぞ」

さきほどの上品キザさを忘れさせるような口調で、フルクが言う。
ミクレスは咄嗟に答えた。

「こいつは今回の調査に特別に加わることになったんだよ」

「そうか」いぶかしげにフルクは言う。

しかし、次の瞬間、また気障な少年になって言った。

「ま、女だから許そう」

つたく、折角ラフェルフォード城下町まで遠回りして来てやったと
いうのに、

こんな変人と一緒になるなんて・・・。

ミクレスのため息をついた。自分がナメられているように感じられ
て仕方がなかった。

「さて、確認もとれたことだし、自己紹介といこうぜ。俺はフルク・
ライラフォルだ。

弓術の達人として世に聞こえている」

「いや、女誑しの達人ってことでよく知られているよ」
ミクレスは揚げ足を取るように言った。
「うーか普通、世に聞こえているなら自分を自慢するか？」

少年は首を横に振りながら呟いた。

「失礼な……。では君は何という名前なんだい？」

「俺はミクレス」

その瞬間、フルクは驚いたように目を見開いた。

「ミクレスって……。まさか、ラブレイズ本部所属の、あのミクレスか！？」

どのミクレスかは知らないが、そうだ。

ミクレスは、最少年ラブレイズ本部所属ということで、非常に有名である。

特に、同年代の戦士の中では知らないものはいないほどだ。

フルクはつまらなそうにフンと鼻を鳴らした。

フルクと一緒にいた女は、フルクに一瞬視線を送った後、名を名乗った。

「あたしはアレイラ。王国軍として剣士を志している」
続いてラミネ。

「私はラミネ。よろしく！」

こうして、四人は無事？自己紹介を済ますことができた。

四人は、行商人のそばから離れ、木の木陰に入った。
そして、そこに腰を下ろし、調査云々についての話を始めた。

「今回の任務はセレディー大雪山の調査だ。
聞くところによると、それほど危険でもなく、むしろ楽だと聞いた。

国王陛下から直々にな」

そういうとフルクは腕組みをする。

「あの辺りにはアクスラ機関が根を下ろしている。

おそらく、彼らも独自で調査を進めているだろう」と、ミクレス。

そんなこんなで、彼らの話は長時間へと続いた。

日が暮れ、そろそろ夜になるといころ、彼らはいったん解散することにした。

「では出発は明日にしよう。今日はその宿屋で休むといい。

安心しろ。俺が宿屋の店長に言っておいたから。タダでいける」

「誑しのくせに気が利くじゃないか」

「その呼び方はいい加減やめろ」

愉快。ただその一言である。

女誑しのフルクと、それをなだめるアレイラ。

なんだか今回の旅は賑やかになりそうだ・・・。

CHAPTER 11：死者が語るもの（前編）

早朝

まだ日の出前、空にも薄っすら星が浮かんでいるころだ。

ミクレスは眠たそうに目を擦りながら呟いた。

「なんか・・・身体に力が入らない」

全身に脱力感のような、ふんわりとした感覚が襲う。

「きつと、野宿に慣れていたからだよ」

既に起きていたラミネは言った。

原因はおそらくそれにあるう。

普段、草原の上の生活が日常となっているので、ベッドというものはどうも寝付きにくい。

ミクレスは重い身体を起こして、大きく伸びをした。

「こんなに朝早く出発するって、いくらなんでも」

「ほら、早く行くよ！」

文句を言い出そうとするミクレスに、ラミネは微笑みながら叫んだ。
「あいよ」

ラミネはこの数日間の付き合いを経て、

だんだんとミクレスのあしらい方が上手くなった。

ラミネが宿屋の店長に出発の挨拶を済ませている間に、

ミクレスは早朝の外の空気を吸っていた。

少しひんやりした朝霧が立ち込める街中は、どこことなく寂しげな雰

困気を醸し出している。

ミクレスは出口の門へと向かった。

そこには、霧の中にぼんやりと浮かぶ二つの影があった。

「おはよう」

アレイラは元気よく言った。ミクレスは「ああ」と呟いただけだった。

フルクは金髪の前髪を弾いて気障に言う。

「男を待たせるのはいいけど、アレイラをおんな待たせるのは男としてどうかと思うよ」

また始まった、とミクレスは思った。だから、あえて返事をしない。

そのころにはラミネもすぐ後ろまで来ていた。

「おまたせ」

ラミネはニコつと微笑んで言った。

「いえいえ、女性を待つことは男の使命ですから」

アレイラは両手を挙げてやれやれと言った感じに首を振った。

そして、苦笑しながら呟く。

「さあ、集まったことだし、出発しようか」

何故かそのとき、フルクが先頭を切って進行した。

その後にアレイラが続き、何だか不思議そうにミクレスとラミネが続く。

しかし、上手く格好をつけたものの、やはりフルクは相変わらずフルクのままであった。

「なあ・・・」

フルクは振り返る。そして、怪訝そうな顔をする。

「なんだろう？」と立ち止まる一向に対して言った言葉が、コレであった。

「北って、どっち？」

呆れて笑いも出なかった。一同はただ深いため息をつくだけであった。

結局、アレイラが先頭を切って進行することになった。最初からそうしておけばいいものを。

フルクとアレイラの位置を交代したことで、ミクレスとフルクはほぼ隣同士で歩いていた。

ミクレスはバカにするようにフンと鼻を鳴らした。

「お前さ、女口説くのもいいけど、その前に常識的なこと覚えろよな」

一瞬フルクはチラッと視線を送る。

「うるせえ」

フルクは想像以上に悔やんでいる様子だった。

やってしまった、と手で顔を覆い隠す。

その様子を見てミクレスは嬉々した。

さて、ここからセレディー大雪山までの道のりだが、

ザツと見積もって軽く十日はかかるだろう。

この方向フルク音痴と女がアレイララブレイズ本部まで来てくれていれば、

この往復約二十日間の約十日間を短縮できたかもしれないのに。

そんなことを考えているミクレスとは真逆に、ラミネはこの状況を

楽しんでいた。

ラミネにとつて、徒歩で行く旅は色々と発見があつて飽きることがない。

勿論、雨の日などは身体が冷え、野宿などに困ることもあるが、それはそれでまた趣き深い……。そんな自然の捉え方をしているのだ。

一方フルクは、まだ先ほどの恥を悔やんでいた。

彼にとつて、女性の前でちよつとしたミスをするだけでも人前で裸になるくらい恥ずかしいことなのだ。

自慢することでもないが、彼の女好きは世界一だろう。

そしてアレイラだが、おそらくこのメンバーの中で彼女が最もしっかりしている。

彼女は、いつなるとき誰かに襲われようとも対応できるように常に周りを警戒しているのだ。

他人のスタイルにいちいちケチをつけるつもりは全くないが

彼女自身、他の三人にはもう少し緊張感というものを持つてほしいと思つていた。

そんなこんなで、一日、また一日と日が過ぎていった。

三日目には、王国軍から生存確認を兼ねた食料がキャリナーより届けられた。

それはあまりにも多く、とても持つていけないほどだった。

「これまたご親切な国王陛下だな」

ミクレスは皮肉っぽく言う。

フルクは食料をバッグに詰め込みながら、笑つて言った。

「国王陛下は常に味方の安全を考えていらっしゃる」

「単に過保護なだけじゃないのか？」

彼らは先頭を変えながら目的地へと向かった。

特にフルクのときは、アレイラが指示をするという情けない光景が見ることができた。

草原を踏み、森を抜け、川を渡る。

移り変わる自然を感じ傷しながらも、ただひたすらと北に向かった。

旅のスタイルを変えられ、つまらないと言いたげに空を眺めるミクレスに、

ラミネは積極的に声をかける。しかし、ミクレスは殆ど曖昧な返事しかない。

七日が過ぎ、空気もだんだんと冷たくなっていった。

その日にはまた、王国軍から食料が届き、残りの数日を過ごす補給を行った。

そのころには既に、セレディーの山影が見えていた。

進行は以外と早かった。

この分だと、十日と見積もっていたものが、あと二日もあれば到着するだろう。

やがて、一日が過ぎ、ミクレスの予定より二日以上も早く目的地へと到着した。

目の前には頂上が角のように尖った大雪山が高く聳え立っている。

空気は非常に冷たく、そのせいで指がかじかんだ。

ミクレスはポケットに手をつ込んでふうつと息を吹いた。

「さすがにラフェルフォードの最北端ともなると、身に堪えるってヤツか」

四人は一列に並んで、遙かに続く大山の雄大さを実感していた。

「君たちが王国軍から送られてきた調査隊員かね」

喉で竦ったような声の男が、急に話しかけてきた。

四人はすぐに男に視線を移す。

「ああ」フルクは答えた。

男は毛皮のフードを被り、全身厚着。

顔は真面目一辺倒で、厳しい表情をしている。

初老を済ませたくらいで、全体的に話しかけづらい雰囲気を感じていた。

男は鋭い視線を四人に送り、疑わしげに呟いた。

「ほう、君たちがね・・・」

送られてきたのが子供、ということに呆れているのか、

それともたった四人で来たことに驚いているのかはわからなかったが、

とにかく挨拶をしなければ、と思ったアレイラはおどおどしながら言った。

「私たちは、その、大雪山の調査と確保を兼ねた捜査を行うためにやってきました」

「フン、まあよい。ついてきなさい」

四人は彼に従って、眼前にあつた洞窟の中へと入っていった。
先頭は男が行き、その後には彼らがついていく。
洞窟の中は蝋燭の火が灯されていて、とても明るい状態にあつた。

先頭を歩いていた男は、低い声で言った。

「ここはアクスラ機関の本拠地、そして私はガムラス。

アクスラ機関の実質的リーダーだ」

「ええ、貴方が!!」

アクスラ機関のリーダーと聞いて、フルクは過敏に反応した。

ガムラスは少し不機嫌そうに言った。

「何かおかしいかね？」

フルクは弓術の達人。そんな彼にとって、アクスラ機関とは一つの
憧れなのだ。

そしてリーダーともなると、弓術の天才ということになる（そうと
も限らないが）

少なくとも彼の中では、その方程式が成り立っていた。

フルクは目を輝かせて自己紹介をした。

「いえ、滅相もない！ あ、僕は王国軍で弓術を志している者でし
て・・・」

「ふむ、そうか。他の者は？」

ガムラスはフルクに大して気に掛けた様子もなかった。

「私はラミネといいます」

ラミネは相変わらずおっとりとした声で答えた。

ガムラスはさらに目を鋭くして、チラッと振り向いた。

「君はリンディア人だな」

ギロツとした強い視線がラミネを襲つた。

ラミネはビクツとして立ち止まった。

驚いたのはラミネだけではなかった。

おそらく、最も驚いたのはフルクとアレイラだろう。

「何言っているんですか。ラミネは……」

フルクたちも立ち止まった。

ミクレスはなんとか誤魔化そうとした。

とにかく、リンディア人がいると知れたらマズイと思ったのだ。

「あ、あの」

「その人の言うとおりです」

ラミネは俯いていた。そして、震えていた。

彼女にだってバレるとマズイことだとわかっていたはずだ。

しかし、何故自分から明かしたのだ？

ガムラスはまた歩き出して語り始めた。

「種族間の差別など恐れる必要などどこにもない。

元々は同じ人間、同じ種族なのだから。

そんな簡単なことさえもわからず、他民族を排斥しようとする輩は醜い。

そして……君のように排斥を恐れて震える輩も醜い」

顔も目つきも怖い、彼のこの言葉はただひたすらに真摯なものであった。

フルクもそれに共感した。

「だよな。別にリンディア人だとしても、お前はラミネだもんおんなな！」

「お前はあくまでも女かよ！」

ミクレスはツツコミを入れた。

その瞬間、一気に空気が変わったような気がした。

ガムラスのたった数秒の言葉で、あるものに対する価値観や考え方が変わったような気がした。

確かに、ただこの五人だけが共感しても意味がないかもしれない。しかし、今はそれで十分だ。

「ありがとう」

ラミネは呟いた。

少なくとも、彼女はきっと少しは楽になったのではないだろうか。

彼らはガムラスに続いて、一本道に続く長い洞窟をただひたすら進んでいった。

途中で上り坂になった。そして、だんだんと螺旋状になっていった。奥に進むにつれて寒くなる。しかし、彼らは少し清しい気分であった。

「着いたぞ」

ガムラスの言葉と同時に、円形状の大きな雪原へと出た。

天井はなく、上には大きな空が広がっている。

一面の雪景色がふもとまで広がっており、足を前に出すと、

そこに足跡が綺麗に残るようなところであった。

そしてところどころにテントが建てられていて、人がいるのか、火が灯っていた。

どうやらここが、アクスラ機関の基地らしい。

辺りの景色に感動していた、そのときであった。

「ガムラス様ー！」

まだ若い青年の声が聞こえてきた。

ガムラスは振り向く。

「何事だ？」

「はい！　それが、A部隊のウエドが、何者かに・・・」

ミクレスたちはいぶかしげに二人の会話を聞いていた。

どうやらウエドという人が何者かに襲われて大変なことになっている、という話らしい。

「それで、今ウエドはどうしている！？」

ガムラスは青年の肩を掴んで詰め寄るように叫んだ。

青年は悲しげな表情をして「はい、それが・・・」

それ以上は言わなくてもわかった。

ガムラスは青年から手を離し、拳を強く握り締めた。

「君たちは、ここで待っていないさい」

ガムラスからの指示であつた。

CHAPTER 11：死者が語るもの（前編）（後書き）

ちなみにアクスラ機関は弓術の名人ばかりを集める独立機関です。
ラフェルフォード王国にありながら、王国からの指示や干渉も受けないということが

特徴の機関です。ああ、ストーリー中にもありましたが、フルク様の憧れらしいです！（笑

CHAPTER 12：死者が語るもの（後編）

急な騒動で、ミクレスたちは入り口のすぐ前で待たされることになった。

「しっかし綺麗だな。一面雪景色ってのは」
フルクは足元の雪を踏みながら呟いた。

確かに、太陽に反射して光る雪の姿は絶景である。
キラキラと光の粒が輝き、まるで白い空に星が浮かんでいるような光景だった。

しかし、アレイラは気が気でしかなかったらしい。

「ガムラスさんたち、何があっただらう？」
心配そうに呟いた。

ミクレスは静かに言った。

「今はあのおっさんが言っていた通り、待つしかないよ。
考えたところで何もわからない」
その通りだった。

しばらくして、雪山に続く山道からガムラスが帰ってきた。
ミクレスたちは一斉にそこを見遣る。

ガムラスはミクレスたちに歩み寄り、怒りを堪えたような低い声で
申し訳なさそうに言った。

「待たせて悪かったね」

鋭く何事も見据えていた目も、虚ろとしている。

「実は、仲間が一人死んだんだ」

アレイラはガムラスに一步近づいた。

あまりに彼が青ざめているので、聞くのも躊躇いそうになったが、それでもという思いで尋ねた。

「あの・・・何があつたんですか？」

「わからない。私も、今さっき知らされたばかりだね。

ただ、何か鋭い爪のようなもので引つ搔かれたような痕があつたそうだ」

ガムラスはさらに落ち込んだ。

「彼は勇敢だった。弓術でも、アクスラ機関でトップを争うような・・・」

ミクレスたちは悲嘆するガムラスにはこれ以上何も言わないほうがいいと感じ、

彼が来た道、山道のほうへと向かつていった。

ラミネはうごめく感情を抑えきれなくなり、咄嗟に言い放った。

「ねえ、おかしくない？」

一向はの視線がラミネに送られた。

「だって、セレディー大雪山は凶暴な動物は生息していないはずでしょ？」

冷たい風が吹き抜ける。フルクはラミネをまじまじと見つめて言った。

「それは調査済みの区間での話だよ。セレディー全土ではもしかしたら人を襲う怪物だっているかもしれない」

ラミネは何も言い返さなかった。

一向は人の足跡がたくさん残った山道を登っていった。

右も左も雪の岩壁に覆われていて、とても硬そうな氷がこびり付い

ていた。

山道の先には古びた看板が立っており、ミクレスたちは、それに向かって歩いた。

看板にはこう書かれていた。

「ここより先、関係者以外立ち入り禁止」

赤い字だ。看板は今にも倒れそうな様子で立ち尽くしていた。

「これはアクスラ機関が立てたものだろう。その証拠に、ほら」

フルクは看板の先を指差した。

そこは先ほどのよりも少し小さな円形状の広場が広がっており、矢の練習をするときに使う的のような板が周辺部に立てられていた。その手前には大きな一軒家があり、屋根が雪で真っ白になっている。

アレイラは看板をじっと見つめた後、四人に視線を戻して

確認するように言った。

「あたしたち、関係者よね？」

そして、また看板を見つめなおす。

ミクレスは辺りをキョロキョロと見回した。

誰かアクスラ機関の人と一緒にでないと、ここは通れそうにない。もし誤って射殺されたらたまったもんじゃないからな。

そのとき、ミクレスの目はある一点に止まった。

「誰か来る」

三人は一斉にそこを見つめた。

見ると、一軒家のほうから黒いローブを着用している

男か女かわからないような顔つきの人がこちらに向かってきていた。

その者はミクレスたちの手前で立ち止まり、四人を交互に眺めながら聞いた。

「何者だ？ どうやってここまで来た？」

声からすると、どうやら女らしい。

それに気付いていたはずのフルクは、いつになく静かにしていた。

「ガムラスって人に案内されてここまで来ました」

アレイラは敵対するように答えた。

女は、眉をピクッと動かしてしつこく聞いた。

「ガムラス様に？」

「心配いらんよ、シャメリア」

ミクレスたちの背後から声が聞こえた。

四人はぱつと振り向く。ガムラスだ。

「その者たちは今回のセレディー調査に協力してくれる方々だ」

「こんな子供が！？」

女は殆どミクレスに向かって言った。

ミクレスは不機嫌そうに鼻を鳴らすと、ぶっきらぼうに言い返した。

「子供で悪かったな」

ガムラスは先ほどの青ざめた顔も晴れて、鋭い目つきの彼に戻っていた。

「今日はその宿で休みなさい。調査は明日からでも遅くはないだろう」

四人は頷いた。女は納得がいけない様子だったが、ガムラスに見つめられて仕方なく頷いた。

ミクレスたちはガムラスに連れられて、宿の二階へと上がった。フルクだけ一階に下りて、弓術の稽古を教わろうとしていた。

ミクレスたちは今にも底が抜けてしまいそうなガタガタで古い階段を上り、

二階の一番奥の部屋へと案内された。

その部屋の中には、ベッドが五つあること以外は何もなく、本当に宿のようなところであった。

ガムラスは去り際に呟く。

「この部屋は自由に使ってくれていい。ああ、あと、他の部屋には立ち入らないでくれ」
そして扉を閉めた。

フルクはアクスラ機関の練習場に乱入していた。

遙か先にある的を狙って、六人の男たちが矢を放っていた。
こういう神聖な場所を荒らすのは最悪の行為だということはわかっていたが、

フルクはどうしても彼らの腕前を見ておきたかったのだ。

一人の男が、微かに見える的に向かって一本の矢を放った。
矢は小さな弧を描きながら空を駆け抜け、的を打ち倒した。

「へえ、やるじゃん」

フルクは思わず声を出してしまった。

男は咄嗟に振り向く。鋭い視線をフルクに送った。

「な、なんだよ？」

フルクは後ずさりをする。そんな彼に、男は低く言った。

「私は少し休憩する。やりたいのならやりたまえ」

そいうと男は後ろに下がり、弓を壁に立てかけた。

フルクはニヤッと笑い、背負っていた弓を手を持った。

そして、矢を引いて、矢先に微かに指を触れ、

標的を見失ったかのように弓を天に向けて矢を放った。

矢は真っ直ぐ空へと突き飛んでいった。

やがて彼の視界から矢が消え、それを確認した後、フルクは弓を直した。

男はその一部始終を見つめて、諦めたように立ち去ろうとするフルクに一言声をかけた。

「なんだ、失敗か？」

どこことなく得意げな口調であった。

しかし、それを上回るかのような嫌味な口調でフルクは答える。

「いや、成功だ」

男は的があるほうを見つめた。

的は倒れていて、殆どその様子をうかがうことはできなかったが、次に起こった出来事を見て、啞然した。

「なっ！？ 当たった・・・。この状況で・・・？」

倒れた的は、地面と平行になって殆どよく見えない。

しかし、それと垂直に立ち上がる矢をはっきりと見た。

フルクは付け足して言う。

「動かない的に当たったくらいで驚いていちゃ、あんたもまだまだだよ」

フルクはミクレスたちのいる二階の部屋に入った。

「何やってたんだ？」

窓の外を眺めながらミクレスは聞く。

「ちと油売ってた」

ニヤニヤと笑いながらフルクは答えた。

「それよりさ、今日はなんで雪が降ってないの？」
フルクは無邪気に言った。

「普通さ、雪山なら雪降ってるでしょ」

「セレディーは大雪の日と晴れの日しかないのよ。
今日はたまたま晴れの日ってわけね」

アレイラが答えた。

ミクレスたちはその日一日、宿屋にお世話になることになった。
夜の雪山はとても冷え込み、薄着の彼らには相当堪えた。
寝るときもミクレスは掛け布団を被りながらガチガチ震えており、
寝るにも寝付ける状態ではなかった。

朝が来た。

窓からは暖かい朝日が差し込み、部屋がまばゆい光に包まれる。
日の出と同時に現れたガムラスは入ってくるなり大声で叫んだ。

「今日は晴天日和だ。さっそく出発するがいい」

ミクレスたちは病人みたくゆっくりと上半身を起こした。

「眠い・・・昨日全然寝れなかったよ」

「あたしも」

ミクレスのぼやきにアレイラは共感した。

大きなあくびをしたミクレスは、ぱつと調子を切り替えて立ち上がった。
「行くか！」

一階に出た、ミクレスたちは早々に立ち去ろうと急いで外に出た。
ここにいれば、またアクスラ機関の者にウダウダと言われそうでな
らなかったからだ。

この時間帯なら起きているものはそうそういない。
そして、ミクレスの予想も正しく、ミクレスたちを呼び止めるもの

は一人もいなかった。

こうして、彼らは易々と雪山に立ち入ることに成功した。

四人は上り坂の山道を登っていき、やがて一つの分岐点へとやってきた。

そこにもアクスラ機関の看板が立てられており、それは余程長く置かれていたのか、ボロボロであった。

アレイラは看板の文字に顔を近づけ、声に出して読み上げた。

「なになに、ハハは調査済み、か」

「つまり、こっちの道は行かなくてもいいってことだな」

フルクは右側の道を指差して言った。

他の三人も賛同する。そしてフルクを先頭にして左側の道を進んでいった。

二時間ほど歩いただろうか。道の左側は崖になり、右側は壁、ちょうど馬車が通れるくらいの道幅をひたすらと上っていった。

さきほど、二度くらい似たような自然の広場に出たが、

穏やかな動物が飛んだり跳ねたりしているだけで、特に異常といえるものはなかった。

どこまで行っても、雪は途切れることはない。

岩壁にも、岩にも、道にも、その全てが雪に覆われ、白い光を放っていた。

そして細道を抜けた後、また似たような円形状の広場に出た。

ここは、周りが雪の岩壁に囲まれていて、その外の様子は殆どかがうことができない。

「自然に出来たにしてはすげえな。さすが大雪山というだけあるな」

フルクはあちこちに視線を泳がせながら言った。

そのとき

「あ、あれは!!」

アレイラが何かを発見した。

三人は一斉にそこへ目をやる。

そこには、ミクレスの二倍もあるかと思われるような大柄の男が、うつ伏せにピクリとも動かず倒れていた。

四人は慌てて駆け寄った。

「大丈夫か！ おっさん！」

ミクレスは男の身体を揺すぶる。しかし、返事はない。

「助けを呼ぼう！」

「いや・・・その必要はなさそうだ」フルクは否定した。

そして男の身体を下から持ち上げ、仰向けにさせた。

男の状態を見て、一同は驚愕した。

男の胸には何者かに引つ搔かれたような大きな傷跡があり、その血は既に固まっていた。

吐き気がしそうになる無惨な死に方に、フルクは低く呟く。

「もう助からねえよ。それより・・・」

そして彼は、急に目つきを鋭くして辺りを見渡した。

「何かいるぜ・・・」

CHAPTER 13：最凶の魔物

フルクは弓を片手に、辺りを警戒した。

「何かって・・・？」

アレイラは焦った様子で聞く。しかし、フルクは返事をしない。

ミクレスも何かを察知したようだった。

何かが蠢くような、何かが這いずり回るような、そんな感覚にとらわれる。

姿は見えないが、何かがいる。とても近くに、自分たちを狙っている何かが。

次の瞬間、ミクレスのはつとして叫んだ。

「下だ！ 逃げろ！」

ミクレスはラミネの手をさっと引き、駆け出した。

アレイラとフルクも一瞬戸惑いを見せながらも、急いでその場を離れようとした、が

「うわああ！」

足元が急に膨らみあがったかと思うと、フルクとアレイラは吹っ飛ばされていた。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

ミクレスは振り返り、急いでフルクとアレイラに駆け寄ろうとした、しかし

「うそだろ・・・」

ミクレスは、彼らの背後にいる巨大な怪物を見て、思わず立ち止ま

ってしまった。

「なんだよ・・・こいつ」

それは、今までに見たことのないような醜い化け物であった。漆黒の全身は厚い毛に覆われていて、針のように尖っている。

背中には肋骨のような太く長い突起が六本生えていて、ビクンビクンと鼓動していた。

そしてこの世のものとは思えないほどに崩れ、歪んだ顔。

その口からは巨大な二本の牙が突き出ており、あれに噛まれると終わりだと思った。

腕と爪だけは極端に大きく、そして鋭く研ぎ澄まされているかのようだった。

フルクとアレイラは、自分たちを覆いつくす影に気がつき、倒れながら振り向いた。

「なっ・・・」

驚きと恐怖のあまり、叫び声さえも失ってしまった。

死

たった一文字、たった一言が頭の中をよぎった。

やばい、やばすぎる！　これをどうにかしようなんて、絶対に有り得ない！

魔獣は両手を大きく振り上げた。

フルクはうつ伏せの状態ながらも必死に叫ぶ。

「よける！　アレイラ！」

「！！！！！！」

それと同時に、魔獣の拳は地面に叩き付けられた。

二人は間一髪のところでのその攻撃を回避していた。
もし、あの下敷きになっていたと考えるとゾツとする。

ミクレスは剣を抜き、スキだらけの魔獣に飛び掛った。
だが……！

金属と金属がぶつかりあうような、キンという高い音と共に、
ミクレスの剣は弾き飛ばされてしまった。
想定外の出来事にミクレスは態勢を崩してしまい、そのまま地面へとぶち当たる。

ラミネはミクレスに駆け寄った。

「来るな！ ラミネ！」

ミクレスは叫んだ。しかし、もう遅かった。

魔獣は大きく右腕を広げ、同時に思い切り振り払った。

「きゃああ！」

ラミネは払い飛ばされてしまった。

ギリギリで崖で持ち堪える。が、今にも落ちてしまいそうな状況だった。

ラミネを助けているのは、たった二つの手だけだった。

身体は宙ぶらりんになって、手を離せば遥か下の氷の岩盤に叩きつけられてしまうだろう。

「う……く……」

「ラミネ……！」

ミクレスは急いで立ち上がり、ラミネのもとへ向かおうとする。
しかし、魔獣はそう簡単に行かせてくれそうにもなかった。

魔獣は続いて左腕を広げ、第二波を繰り出そうとしていた。しかし、フルクはそれを許さない。

「これでも食らえ！」

フルクは矢を構え、魔獣の目をめがけて放った。

彼の天才的な弓術のおかげで、見事魔獣の動きを中断させられると思った。しかし！

また、金属と金属がぶつかり合うような音が鳴り響いた。

「おいおい、冗談だろ！？」

矢は確かに魔獣の目に命中したはずだ。

しかし、矢は刺さるところか弾き返されてしまった。

だが、さすがに目を射たことで、少なからずダメージがあったみたいだ。

魔獣は低く唸ったかと思うと、上半身を起こして耳をつんざくような雄たけびを上げた。

しかし、それは逆にチャンスだった。ミクレスは今だ、と思い、一目散に駆け出した。

ラミネは既に限界を感じていた。

魔獣から受けた攻撃が、ジンジンと痛む。

ただでさえかじかんで動かない手に、さらに恐怖の震えが走る。

もう、ダメ・・・

ラミネはズルっと手が滑るのを感じた。

その瞬間、あるときレフェードから宙に投げ出されたことを思い出

した。

ああ、また、あのときと一緒に・・・

今度は簡単に死ねるような気がした。今度はたかだか城の四階とはわけが違うからだ。

王国一の大山の頂付近から、遙か下の雪山入り口付近まで落ちると考えていただければわかりやすいだろうか。

そのときだった。自分の身体が、遙かなる宙で止まったのは。

「頑張れ！ ラミネ！」

ラミネは泣き出しそうになった。

ミクレスが、落ちかけた自分の腕を、しっかりと掴んでくれていたのだ。

ラミネはズルズルと崖から引きずりあげられた。

そして、ミクレスの懐ふところに飛び込む。

そのとき彼女は、限りなく大きな感謝をミクレスにするのであった。

「安心しろ、もう大丈夫だ」

しかし、そんなことを言っている場合ではなかった。

フルクの攻撃のせいで、魔獣は怒り狂い、さらに勢いを増して攻撃を繰り返していた。

フルクは魔獣の大振りをかわしたかと思うと、魔獣はアレイラに向き直り、標的ターゲットを変えた。

フルクは喘ぎながら叫ぶ。

「逃げるアレイラ！ 早く！ アレイ・・・」

見ると、アレイラは恐怖にすみあがっていた。
フルクが必死に叫ぶが反応しない。

このとき、アレイラの頭の中には、恐怖と死という二つの言葉しかなかった。

この異常に強固な肉体。突然現れ、突然暴れ狂う恐怖の魔獣。

最凶の魔物

勝てるはずがない。勝てるはずがないんだ。
だから、逃げたい。でも、足が動かない。足が……。

「アレイラアアアアアアアアアア！！！」

フルクの叫び声が彼女に届いたときには、もう既に遅かった。

魔獣は自慢の鋭利な爪で、彼女の身体を貫通させていた。

そして彼女を仕留めたことを確認した後、乱暴にひょいと放り投げた。

フルクは無意識に駆け出していた。

アレイラのそばに駆け寄り、必死に声をかける。

「アレイラ！ 頼む！ 起きてくれ！！」

しかし、アレイラの身体はぐったりとしていた。

左横腹からは大量の血が流れ、今にも危険な状態にあった。

フルクは彼女を抱いて立ち上がった。

そして、ある一点に向かって駆け出した。

それは、暴れ狂う怪物の腹の下。さきほどヤツが自らあけた巨大な

穴だ。

今のフルクは驚異的な身体能力を覚醒させていた。何も考えなくても敵の動きが読める。次にどんな攻撃が飛んでくるかわかる。

それは、ただ真っ直ぐな、アレイラに対する友情から来るものであった。

フルクは見事魔獣の下に潜り込み、穴の中へと入っていった。

その後を、魔獣は爪で穴をほじくり起こそうとするが、無駄だった。

その一部始終をひそかに見つめていたミクレスは、まずその穴に入ることを第一に考えた。

「ラミネ、あそこに入るぞ！」

ミクレスはラミネの手を引く。

しかし、ラミネは恐怖に手が震え、とても行けそうな状態ではなかった。

魔獣は既にミクレスたちに向き直っていた。

一瞬威嚇したかと思うと、ただ高速でミクレスたちに襲い掛かった。

ミクレスはラミネを持ち上げる。そして、魔獣のなぎ払いを高く跳んでかわした。

続いて魔獣の腕をつたい、頭に上る。そしてそこから後ろへと飛び降り、

穴のすぐ前まで来た。その超人的な一連の動きを、たった数秒のうちに済ませてしまった。

「いくぞ！」

ミクレスは低く叫んだ。

次の瞬間、二人は真つ暗な穴の中へと落ちていった。

地面に着地したのを確認したミクレスは、ラミネを下ろし、ひざまずいて嘆くフルクのもとへと向かった。

「アレイラア！ 起きてくれよ・・・」

今にも泣き出しそうな声で言った。

ラミネは急いで駆け寄り、アレイラの首を起こした。

「急いで治療したほうがいいわ。戻りましょう！」

アレイラの血は全く止まる様子がなかった。

このままではマズイ。

「フルク・・・」

優しく弱い声が聞こえた。

アレイラだ。アレイラが最後の力を振り絞って叫んでいるのだ。

しかし、彼女はそれ以上何も言うことはできなかった。

本当に死んでしまったのではないかとも思った。

その弱々しく、消え入りそうな声を聞いて、フルクは静かに立ち上がった。

「1センチでもいい・・・」

怒りに震え、強い恨みが籠ったような力強い言葉だった。

「魔獣^{ヤツ}に傷をつける」

それは、ミクレスに対して言っている言葉なのだとすぐにわかった。

「どういことだよ？」

「魔獣^{ヤツ}を倒すぞ!!!」

フルク、激怒！

CHAPTER 14：死闘、そして悲鳴

「倒すって・・・お前正気か!？」

ミクレスは怒って叫んだ。

「それに、アレイラはどうするんだよ!？」

しかしその言葉は、あまりの怒りに我を忘れているフルクには届かない。

「ラミネ」

フルクは、まるで黒いオーラを放っているかのように見えた。

恐ろしく引きつった形相と、今にも逆立ちそうな金髪がそれをさらに引き出している。

そして、彼の放つとてつもない威圧感だ。女を口説いているときの彼とは明らかに違う。

それは、ミクレスを信頼させるには十分なほど、圧迫感のあるものであった。

「アレイラを頼む!」

その言葉には、単に他人任せなフルクの弱い気持ちではなく、何かグツと胸を押されるような力強い感情が籠っているように思えた。

フルクは出口へと駆け出した。

ミクレスも、ラミネに「安心して」という視線を送り、後に続く。

「ミクレス!」

ラミネはミクレスを呼び止めた。ミクレスは振り向きもしなかったが、

この思いは伝わったように感じた。

「死なないで」

彼らは雪の山道を駆け上がり、魔獣のいる広場へと向かった。

正直、あの魔物と対面するだけでゾツとする。

恐怖、絶望、死、数々の思いが頭の中で交錯する。

でも今はそんな気持ちはなかった。魔獣^{ヤツ}を倒す！ただそれだけだ！

魔獣は物足りないというように、広場の真ん中で甲高く吼えていた。それを前に、二人の男が堂々と現れる。

「この俺の前で、女性^{レディー}を傷つけたのは災難だったな」

フルクは完全に血が上っていた。顔の血管がビキッと浮き出る。

「覚悟しやがれ！！」

ミクレスは彼が言っていた言葉を思い出した。

1センチでいい ヤツに傷をつける

魔獣^{ヤツ}に1センチの傷を与えるには骨が折れそうだと。

さきほど斬りつけたときの感覚からすると、

例えるならば、魔獣^{こいつ}は全身ダイヤモンドだ。

しかし、この際つべこべ言ってもらえない。

倒さなければいけないんだ。

ラミネとアレイラのためにも、ラフェルフォードのためにも！

ミクレスはさきほど弾き飛ばされた際に落とした剣を拾い上げた。

その瞬間、魔獣が拳を引つ込めるのを片目で捉えた。

ミクレスは地面を強く蹴り、高く飛び上がった。

魔獣はただ目の前の敵を殺すことだけを考えて行動している。

ならば相手の攻撃を誘って、スキだらけの本体に反撃を仕掛けられ
いいだけのことだ。

ミクレスの予想も的中し、魔獣の拳はミクレスの真下を通り過ぎた。
ミクレスは身を小さくしてその拳の上に着地する。

次の瞬間、身体のパネを利用して高速で魔獣の眼前へと飛び込んだ。

その戦いぶりを見つめていたフルクは、毒矢をセットしながら呟く。

「さすが天才少年剣士だ。身体能力もまるで伊達じゃない」

フルクは、彼の持つ毒の中でも最も強力な「ボイズンエキス猛毒の液体」を
矢先に塗りつけ、万全を期していた。

ボイズンエキス猛毒の液体、トップクラス毒の中でも最上級の

破壊力を誇っており、たった一滴で通常の動物なら致死量に至ると
いわれている。

もちろんフルクだって触れると即死の超危険薬物である。

彼は気をつけながらドロドロの液を塗り、ミクレスが傷を与えてく
れるのを待った。

ミクレスは頭を真つ二つにしてしまつかというような勢いで剣を振
り下ろした。

しかし、やはり魔獣には通用しない。そして、金属の弾く音が耳に鳴り響いた。

問題は弾かれた後だ。反作用という強力な反動は、その後の体勢に大きく響く。

さっきは想定外だった。でも、次は違う。予め想定していたことだ。

ミクレスは受け身を取って飛び降りた。

クシャッと雪を踏む音がする。ミクレスは大きく後ろに跳び、体勢を立て直そうとした。

「うあああ!!」

急に目の前が真っ暗になったと思った瞬間、彼は魔獣の手のひらの中にしっかりと握り締められていた。

「ミクレス!!」

フルクは慌てて叫ぶ。しかし、どうしようもできない。

魔獣は嬉々したように高く吼え、腕の筋肉を通常の二倍にも膨らました後、

その腕を天高く振り上げた。

「やめろおおおお!!」

握力だけでぺしゃんこにされてしまいそうな苦しさに襲われた。身体が粉々に砕かれてしまいそうだった。

振りほどこうとしても、自分の何十倍もあるこの腕にとつては勝て

るはずがない。

叫ぼうとしても、息が詰まって声が出ない。強いめまいを感じる。

もう、どうしようもない

絶望、そして死。ミクレスを待ち受けるのはその二つの言葉しかなかった。

そりゃ、これだけ高く持ち上げられて、

その上身動きがとれないとなれば、諦めがつくというものだ。

フルクは弓を持ち上げ、矢先を魔獣の胸に向けた。

仮に弾かれたとしても、毒が染み込んでヤツを倒せるかもしれない。そうでなくとも、多少のダメージを与えられるかもしれない。

ミクレスをわしづかみにする腕は、現状魔獣が出せる中で最高の位置に挙げられた。

これを振り下ろし、地に叩きつければ、ミクレスは間違いなく死ぬ！まさに絶体絶命だ。

そして、次の瞬間

「あああああああああ！……！！！」

雪山中に一つの悲鳴が響き渡った

CHAPTER 15：放たれた一本の矢

身体を包んでいた分厚い手から離れ、

ミクレスはユラユラと沈むように落ちていった。

彼は、一瞬何が起こったのか理解できなかった。

岩壁以上の高さまで持ち上げられたかと思えば、

魔獣は急に力を緩め、ミクレスを手放してしまったのだ。

ミクレスは落ちていきながら魔獣のほうを見る。

魔獣の顔から、それを覆い尽くすほどの煙がわきあがり、
モクモクと空に向かって逃げていた。

怪我をしたのか、魔獣はよろめき痛みに苦しんでいた。

少し離れていたところからその様子を見つめていたフルクでさえ、
その一瞬の間に何が起こったのかわからなかった。

ただわかることといえば、もの凄い爆音とともに、小さな何かが目
にも留まらぬ速さで

魔獣の額めがけて飛んでいったこと。

そして、魔獣に直撃した瞬間、煙を上げて爆発したことだ。

悲鳴を上げたのはフルクでもなく、ミクレスでもなく、この醜い魔
獣であった。

しかし、彼にとつて驚いている暇などなかった。

爆発のおかげで抉れた額に毒矢を当てることができる。

それが魔獣を倒せる、絶好にして最後のチャンスなのだ。

そして魔獣にこの矢を当てることこそ

自分に課せられた最大の任務だと確信していた。

フルクは弓を構えた。

「あれだけ傷があれば余裕だぜ！」

彼の動きは、まさに迅速且つ正確な射撃であつた。

ガガと弦が強く引つ張られるような音と共に、

スパッと弾くような力強い音が雪山をつたつた。

矢が放たれた。矢の先端では、ドロドロで紫色の液体が風に激しく揺れている。

時々滴を落としながら、矢は魔獣の額へと直進していた。

ミクレスは地面に着地した。

そして、飛び散つた紫色の液体が、目の前で雪を溶かしていくのを見て驚く。

ミクレスは、フルクがとどめの矢を放つたのだと確信した。

決まつた

矢は魔獣の額にめり込んでいた。

そこから紫色の液が溢れ出し、ジューッと嫌な音を立てていた。

フルクはそれを見て心底ホッとし、弓を片付けた。

後は魔獣が毒に殺られるのを待てばいいだけなのだ。

ポイズンエキス
猛毒の液体の威力は半端じゃない。

即効性且つ強力で、あれだけの毒を体内に送り込めば、瞬く間に機能を停止させるだろう。

魔獣はピクピクと震えていた。毒が内臓を破壊しているのだ。

フルクは嬉々し、勝利に喜びながらミクレスにガッツポーズをした。

しかし、ミクレスは必死の形相でフルクを見つめていた。
そして、駆け寄りながら慌てて叫ぶ。

「フルク！ 危ない！！」

フルクは一瞬混乱した。何をしているのかわからなくなった。
そのたったコンマ数秒の遅れが、最悪の事態を招くことになる。

「なにっ！！？」

フルクの足元に大きな影が現れた。

次の瞬間彼は、研ぎ澄まされた大きな爪と太い指を揃える巨大な手の
下敷きになってしまった。

「フルク！！」

ミクレスは立ち止まり、剣を右手に魔獣に斬りかかろうとした、そ
のときだった。

漆黒の肉体から黒い炎のような煙のようなものが現れ、
まるで浄化していくかのように、次第に空へと消えていった。
それはだんだんと身体中に広がっていき、
やがて炎は魔獣の全てを空に奪い去ってしまった。

「なんだったんだ・・・？」

ミクレスは目を丸くして呟いた。

剣を右手に握ったまま、ただ呆然と立ち尽くす。

フルクは次こそ本当に終わったのだ、とため息をつき、

微笑みながら言った。

「俺らは勝ったんだよ・・・。なんかよくわかんないけどな」
思えば不思議でいっぱいだった。

剣さえも弾き返してしまう鋼の肉体、矢をも通さぬ頑丈な目、途中で起こった謎の爆発、致死量一滴とも言われる猛毒をあれだけ浴びてもまだ動く能力ちから何もかもが異常で、二人が今までに経験したことのないことばかりであった。

しかし、自分たちはそれに打ち勝つことができた。自信を持って誇れよう。自信を持ってこう言えよう。

「ミッシェンコンプリート
任務完了!!」

CHAPTER 15：放たれた一本の矢（後書き）

ミクレスとフルク、お疲れ様です。

いやー、とうとうやつちやいましたね。

あの「ミッションコンプリート」の部分が大好きです（笑）この作品を書こうと思ったときから入れようと思ってました
章の題名にしようか迷ったんですが、それだと題名見るだけで「勝ったんだな」とわかってしまうんで、あえて直接的な表現は避けました。

CHAPTER 16：謎の組織ログタント

二人は急に肩が軽くなったような気がした。
凄まじき死闘、攻防、そして、勝利。

何度死ぬかと思ったか、数えても数え切れないほどだ。

フルクは鼻を手の甲で擦りながら呟いた。

「何が安全で楽なんだよ？ 帰ったら陛下に話つけてやる」

それはどこことなく嬉しそうな様子だった。

ミクレスも剣を直しながら言う。

「俺も。さすがにコレは有り得ないよな！」

勝利に喜びの笑顔を見せるミクレスたちのそばで、闇が刻一刻と迫っていた。

岩壁の先、山道のほうから何者かが近づいているということに、彼らは知る由もなかった。

そして、静かに闇は牙をむいた。

ミクレスたちは無邪気に笑っていた。

そのとき、パヒュンと何かが跳ねる音がしたと思ったら、

フルクは頭が吹っ飛んでしまいそうな勢いで吹っ飛ばされていた。

「フルクー！！」

ミクレスは咄嗟にフルクに駆け寄り、そしてぱつと振り向いた。

「はじめまして。ミクレス君」

そこには、炎を模したような赤いコートを着た、嫌味な表情をした男が立っていた。

髪はトゲのように尖っていて、スマートな体格をしている。身長はミクレスをちょうど見下ろすくらいで、

フルクと同じくらい、いや、もう少し高いか、といったところだった。

「貴様、フルクに何を!?」

ミクレスは男に一歩近づいた。

「安心してくれよ。ちよつと気絶してもらっただけだからさ」

鋭い視線で見つめるミクレスに、男は楽しそうに嘲笑した。

ミクレスは剣を抜き、さつと構えた。こいつは一体何を考えている? それに・・・どこから現れた?

「貴様は一体何者だ!？」

ミクレスは強く警戒した。

この者の只ならぬ威圧感。ヘラヘラと笑う裏に隠された、強大なる力。

雰囲気だけでわかる。明らかに一般人とは違う。

「俺はレフェード・・・君の闘い、全部見させてもらったよ。

ちよつと途中で妙な現象が起こったけど、

そうそう悪くない闘いっぷりだったよ、フラグメント相手にね」

ミクレスは、レフェードという名前に聞き覚えがあった。

そう、旅の途中で悲しそうにラミネが話していた、同盟破棄の元凶。確か、赤いコートを着ていて、常に不気味な笑みを浮かべる男だと言っていたな。

そうか、こいつがそうか。

ミクレスは眉をひそめて睨みながら言った。

「フラグメント？　どうということだ？」

「ククク、これのことだよ」

レフェードは黒い光を放つ何かの欠片のようなものを取り出した。欠片自体も真つ黒で、見るからに嫌な気配を漂わせている。

ミクレスは、奇怪生物を見つめるような眼差しでその欠片を見た。
「なんだそれは・・・？」

その質問に、レフェードはとんでもない答えを返した。

「これはダークネスフラグメントと言つてね。」

驚異的な魔力を秘めたクリスタルの欠片なんだよ。

これを食べさせれば絶大な能力ちからを持った「魔物」をつくる事が出来る。

眼前の敵を殺すことしか興味のない魔物がね。

さつき君たちに戦ってもらったサルも、これを食べた魔物だよ」

「あの化け物が・・・サル！？」

ミクレスは絶叫した。

「まさか・・・そんな、サルの原型すら失つ・・・」

ミクレスは途中で気がつき、言葉を詰まらせた。

そして、あの欠片がとてつもなく危険なものだということがわかった。

「そう、これを食べれば絶大な能力を持つとともに、
身体を異常な生物へと突然変異させる。」

まあ単に、この強大な魔力に身体が耐え切れなくなってしまうのだ

けだろうけどね」

ミクレスは、すぐさつきまでは敵だと認識していた魔獣も、もとは人を襲うこともない普通の動物だったと聞いたとき、激しい怒りが込み上げてくるのを感じた。

また、彼には別の怒りもあった。

同盟破棄の元凶。その言葉が頭の中でこだまする。

少なくとも、ラミネの大事な親族を殺し、彼女を悲しませたということは

とても許しがたいことであつた。

「貴様ら帝国軍は、どこまで人を貶めれば気が済むんだ!!」

ミクレスは怒鳴った。平気で酷いことをする彼らが許せない。そんな面持ちだった。

「帝国軍？ 勘違いしないでくれ」レフェードは言う。

「俺たちはあんな強者ぶった弱者たちとは違う」

「だったらいい」

「俺たちはログタント」レフェードはミクレスの言葉を遮って言った。

「秘密組織といったところか」

ログタント？ 秘密組織？ 確かに聞いたことはないが、そんな組織が本当に存在するのか？

「ログタント・・・貴様らはいつたい・・・」

「君もいずれ知ることになるう。なぜなら、君は我々の仲間なのだから」

そしてまたクククと笑う。

「どういうことだ・・・？」

ミクレスは聞いたが、レフェードは嘲笑しただけだった。

「答える！」そして駆け出した。

しかし、レフェードのほうが一瞬反応が速かった。

レフェードは手に握り締めた何かを親指で弾き、

さきほどのパヒュンという音と共に小さな鉄球をミクレスに飛ばしてきた。

「っー！」

ミクレスはそれをかわすのがやっとだった。

あとコンマ数秒反応が遅れていれば、鉄球は額を貫いていただろうか？

レフェードはミクレスを前に高く飛び上がり、

それを待っていたかのように通りかかったラフェグリフが

彼の片手をしっかりと掴んだ。

そしてレフェードは、微笑みながらこう叫ぶ。

「良い反応だ。さすが指導者^{あいつ}が気にしているだけあるな！」

最後に嫌な笑い声を上げた後、

ラフェグリフの背中に乗りなおして遙か彼方へと去っていった。

ちょうどそのとき、フルクは目を覚ました。

「いつてー・・・。いったい何が起こったんだよ」

ほとんど突然の出来事だったために、彼は何が起こったのか覚えていないらしい。

おそらく彼は、あの高速の鉄球に額を直撃したのだろう。

その証拠に、彼の額にはくつきりと弾の跡が残っていた。

（今は、あえてレフェードのことは言わないでおこう）

「ラミネたちのいるところへ行こう」

ぶつぶつと文句を言うフルクを横に、ミクレスは広場を去ろうとした。

フルクは額をおさえながら、ミクレスの姿を目で追う。

「おい待てよ」

そして立ち上がり、ミクレスの後に続いた。

謎の組織ログタント・・・彼らはいったい何者なのか？

そして、彼らの目的とはいったい・・・

当時のミクレスたちには、これから起こる最悪の事態を知るすべもなかった。

CHAPTER 16：謎の組織ロゲタント（後書き）

フラグメント？なにそれ？おいしいの？

自重

CHAPTER 17：不安の先は

ミクレスたちは山道を下り、まずは穴のもとへと向かった。

ミクレスの予想では、彼女たちはそこにはいない。

既に下山し、アクスラ機関の宿屋で治療を受けているはずだ。

フルクも同様のことを考えていた。

ただ、ラミネがアクスラ機関の基地までアレイラを連れて行けるかが心配だった。

案の定、穴の中には誰もいなかった。

フルクは、あの怪物がここで自分たちを待ち構えていたのだと思うと身震いをした。

逆にミクレスは、魔獣誕生の秘話をかじる程度だが知っているため、苦しみながら敵を狙っていたのか、と思うと少し哀しい顔をした。

「やっぱり、もうここにはいないな」

フルクは呟いた。ミクレスはフルクの顔を覗き込む。

フルクは、とても心配そうな顔をしていた。

穴の中心あたりに、人の血痕らしきものがこびりついていたり、ちようど、ミクレスたちが逃げ込むときに使った穴の真下にあたるところだ。

そこからは光が漏れ出していたため、血痕がよく見えたのだ。

「帰ろうか」

ミクレスはフルクに視線を移してから言った。

「ああ」

二人はさらに山道を下っていった。

ミクレスたちの足跡はくつきりと残っており、それが帰り道への目印となって非常に助かった。

ラミネも同じことを考えていたのか、他の何者かが山道を下ったような足跡があった。

しかし、何故か不思議なことにそこには血の跡が残っていなかった。あれだけ血を流していたアレイラを、仮に背負って歩いたとしても、一滴の血痕を残さずに山を下ることが出来るだろうか。

そんな不可解なことを幾つも発見しながらも、二人は会話を交わすことなく山道を下っていった。

やがて分岐点の看板が見えた。
もうすぐだ、と心の中で呟いた二人は休むことなくひたすら歩き続けた。

そしてアクスラ機関の宿屋が見え始めたころ、それとほぼ同時にミクレスたちを待つガムラスの姿が見えた。

「おーい!!!」

二人は駆け出した。

フルクはガムラスに近づくになり、急に焦ったように問い掛けた。
「ラミネたちがここに来なかったか!？」

「ああ、今宿屋の二階にいるよ」

ひどく落ち着いた様子だった。

しかし、どことなく哀しげな表情をしていた。

その表情が、フルクをさらに不安にさせる。

「アレイラは、アレイラは無事なのか!？」

フルクはガムラスの肩を掴んで、詰め寄るように聞いた。

ガムラスは質問に答えることもなければ、首を縦に振ることも横に振ることもなかった。

ただ一言、小さくこう呟いた。

「自分の目で確かめて来なさい」

フルクとミクレスは急いで二階へと向かった。

ギーギーという階段の音が耳に障る。

こういう状況に置かれると、人は物事を悪い方向へ想像してしまう。

フルクは今、へ死んでしまっていたらと考えていた。

そして、このときの何いえぬ緊迫感というのは想像以上に辛い。

フルクは二階の奥の部屋を乱暴に開け、すぐさま叫んだ。

「アレイラ!」

「フルク・・・!」

何の心配もいらなかった。アレイラはベッドに上半身を起こして座り、

そのそばにはラミネが腰掛けていた。

そしてアレイラの容態だが、ローブを着用しており、もう治ってしまったかのようにやわらかな微笑みを浮かべていた。

フルクはその様子を見てホツとし、近くの椅子に力無しに座り込んだ。

「ふう・・・それで、傷のほうはどうなんだ？」

ため息をついた後、彼女たちに尋ねる。

「傷はもう完治したわ。実は、今さっき気がついたばかりなの」
ラミネはすぐに答えた。

フルクは不可解な返答に、耳を疑った。

「完治？」

そう聞き返したとほぼ同時に、ミクレスも部屋に入ってきた。

「あれ・・・意外と元気そうじゃないか」

そついうと、彼は近くのベッドに座った。

「神泉の水を使ったのよ」

実は、ラミネはあるとき、アレイラを背負ってアクスラ機関に向かうとした。

しかしそれでは間に合わないだろうと思った彼女は、

かつて自分の重傷を数日で完治させた、女神の神泉の水を所持していたことに気づき、

さっそく取り出しそれをアレイラに飲ませたのだという。

その効果はやはり絶大で、みるみるうちに傷は癒えていった。

しかしアレイラは気を失ったままだったので、

ラミネが背負ってここまで連れてきたらしい。

ミクレスとフルクはあつと声を漏らした。
なるほど！だから山道には血の跡がなかったのか。

「ありがとうな、ラミネ」

フルクは優しく微笑んで言った。

アレイラは感謝いっぱい笑顔でささやくように言った。

「貴方は命の恩人よ」

ラミネはチラッとアレイラに視線を送ったあと、すぐに視線を戻して聞いた。

「それより、二人は大丈夫なの？」

優しさに溢れた表情だった。

その顔を見て、フルクはまた気障になって答えた。

「勿論さ。僕の巧みな快進撃のおかげで見事魔獣^{ヤッ}を打ち倒すことが出来たよ」

そして、前髪をスッと払った。

ラミネは返事に困ったような顔をした。

その様子を見つめていたアレイラは苦笑して言う。

「また調子に乗って・・・」

そして一同は幸せそうに笑った。

アレイラは生きていた。

それがどれだけ、フルクにとって嬉しかったことか。

フルクは心の中でもう一度呟いた。ありがとうと。

CHAPTER 17 : 不安の先は（後書き）

CHAPTER 18：別れ際の言葉

ミクレスたちはガムラスに、雪山の魔物を退治し、見事任務を全うしたことを報告した。

ある意味彼の敵討ちという形になったため、彼はとても感心したように誉め讃えてくれた。

アレイラの王国軍服は血に染まっていたため、ガムラスはローブを彼女に与えることにした。

そして、何から何までお世話になった彼に、ミクレスたちは深く礼をした。

また、アクスラ機関に在ると、アクスラ機関に属している弓兵たちに睨まれたり

警戒されたりするため、翌日の朝、すぐに出発することに決まった。

ちょうどそのとき王国軍から大量の食料が届いたところだった。

彼らは持てるだけ食料を確保した後、

任務完了の言葉を綴ってキャリナーに運ばせることにした。

「いやー、一段落済ませると気持ちがいいな」

フルクが何気なく言った言葉だった。それには三人も同感だった。

任務の内容が内容だけに、終わったときの達成感はこの上ない。

そして出発のときがきた。

彼らはガムラスに別れを告げた後、朝早々にセレディーを後にするのであった。

たった数日しか経っていなかったが、彼らにはアクスラ機関への洞窟は

とても懐かしいものに感じられた。

というのは、この数日に起こったことがあまりにも長く感じられたことに他ならない。

彼らはこの任務^{たひ}を通して、セレディー大雪山の偉大さを痛感したとともに、

人間としての尊さや、仲間の大切さを強く学んだのであった。

洞窟を抜けた。来たときはひんやりと冷たかった空気が、今ではそうでもない。

前方には遙かなる草原が広がり、果てしなく続いていた。

そのとき、空の上から青い影が急降下してくるのを捉えた。

「ラフィーネ！」

ミクレスは叫んだ。ラフィーネはミクレスの肩に止まり、ピピッと嬉しそうに鳴いた。

リュット系の鳥は寒さが苦手だ。そのため今回の任務には殆ど参加することはなかったが、

今こうして久々に戻ってきてくれたのだ。

ミクレスは小さな頭を撫ででから、酸性角砂糖を食べさせてやった。

その様子を見つめながら、フルクは言った。

「それ、リュットか？」

「ああ」

「へえ、リュットをキャリナーにするヤツは初めて見たよ」
フルクは感心した。

そして、ミクレスの肩をつつくラフィーネを見て思わず笑顔を見せた。

「俺たちは城へと戻るが、お前たちはどうするんだ？」

フルクはラミネとミクレスを交互に見て聞いた。

「俺は本部に帰還して、総隊長に今回の件のことを直接報告するよ」と、ミクレス。

「そうか。ラミネは？」

「私はスホウさんっていう人のところで修行をさせてもらおうと思ってるの」

それは、フルクではなくミクレスに対して言っている言葉であった。

ミクレスは咄嗟に叫んだ。

「スホウ！？ やめとけ。 あいつは頭痛いから、何言われるかわからないぞ。」

それに、お前は剣士志願じゃないだろ？」

「そうだけど、私は行く」

ラミネはしっかりとした目でミクレスを見つめた。

ミクレスはその目をじっと見つめた後、認めたように二度頷いた。

「じゃ、俺らはここでお別れだな」

フルクは呟いた。

ラミネとアレイラは少し寂しげに頷いた。

「でも、きつとまた会えるよ」

アレイラは明るく微笑んで言った。

「ああ、どうせまたいつか、一緒になることはあるだろうな」

フルクも別れ際の寂しそうな表情を浮かべて言う。

「俺はもう二度とごめんだけどな」

ミクレスはわざとらしく呆れたように言った。

「また会おう！ 約束ね！」

ラミネはいつぱいの笑顔を見せて言った。

四人は別れの挨拶を済ませ、それぞれの道へと歩みだした。

CHAPTER 18：別れ際の言葉（後書き）

ふあふあ。

CHAPTER 19：一対の神威

これは、ミクレスたちが魔獣を倒したときの夜の話である。

無数の転がる死体の中に、二つの黒い影が見えた。

「やれやれ、帝国軍の前線部隊といっても、所詮この程度か」

・・・フォローガルだ。

「弱肉強食の社会といっても、あながち強い者ばかりではないということですね」

そして、シズ。

二人は、胸にラブレイズの紋章が着いた同じ黒服を着ていた。

フォローガルのほうは左右の腰に白く光る剣を掛け、

いっぽうシズは特異な形状の黒い剣を背中に掛けている。

その剣は彼らの愛用しているもので、さらにフォルムに特徴のあることから

剣豪たちから注目を浴びている無二の剣なのだ。

彼ら二人は、ラブレイズで第六天とともに指示を与えた翌日、

帝国軍へと進出し、前線部隊を殲滅するという奇襲をかけていた。

といっても前線部隊の殲滅だけではあまりに早く終わってしまい、もう数部隊潰しておこうという話をしているところだった。

「ここはもう誰もいないでしょう。次の拠点に向かいましょう」

シズは滑らかな口調で言う。

フォローガルは、相変わらずの鋭い目つきで答えた。

「ならば二手に分かれよう。同行するだけ無駄が多い」

「ええ」

シズは遠くを見るように呟いた。

「まずはそこにいる敵を片付けてから」

シズとフォローガルは、物陰に隠れる何者かに気付いていた。

二人はそちらを見遣る。それでも出てこないの、フォローガルは辛辣そうに叫んだ。

「そこにいるのはわかっておる。隠れていないで出て来い」

「……」

何者かは正体を現した。

ひょこひょこ現れたその者は、ボロボロの服を着る痩せこけた子供であつた。

子供は現れるなりガタガタと震えながら棍棒を持って構え、歯を食いしばりながら叫んだ。

「お、お前ら、こんなことして、どうなるかわかてるのか!?!?」
ところどころでつかえながら言い切った。

それを見た二人は、互いに顔を合わせてから子供に戻す。

「どうやら奴隷みたいですね。相手にするだけ無駄です。放っておきましょう」

シズは滑らかに呟いた。フォローガルも賛同する。

二人は子供に相手をするともなく、振り向き立ち去ろうとした。

「ま、待てよ! 話を聞け!」

放っておくと言っているのに、あくまでも呼び止めようとする子供に、

フロローガルは刺すように鋭い視線を浴びせて言った。

「わしらは奴隷に用はない。しかし小僧、事情が変わればおぬしの首なぞ今すぐにも刎ねて やってよいのだぞ？」

子供はその場で凍りついたように固まった。

それを見た二人は、何事もなかったかのように立ち去った。

「では二手に分かれますか」と、シズ。

「よし、ではわしは向こうを担当しよう。シズはこちらを頼む」

そして、二人は左右に分かれ、それぞれの戦いへと向かうのであった。

フロローガルは辺りを警戒しながら、前方に見える第二前線部隊の拠点に向かった。

ファイアーシル島の夜は基本的に明るいため、火がなくとも大丈夫だった。

フロローガルは拠点の門を開けた。

彼の十倍ものある、巨大な木の門である。

周りも同じような高さの木の柵で囲まれており、

外からは中の様子を窺えない仕組みになっていた。

門は意外と重かった。ゴゴゴという大地を引きずる音がする。

そしてフロローガルは、門の先に待ち構えていた予想外の敵に啞然した。

「待つてたぜ。きつと来てくれると信じていたよ」

「・・・まさかおぬしがここにいるとはな・・・まったく考えても見なかった」

フォローガルと向かい合う巨体の正体は、
帝国軍最強の剣士、ルルカ・シャトルークであった。

ルルカはいつもと同じく白く厚い鎧に身を包み、
その巨体さえも凌駕する、ファイール最大級の大剣を右腕に持っていた。

ルルカは百キロもあるかと思われる大剣を片手で、しかも高速で振り回すことや、

人を殺すときに何の躊躇いもなくむしる笑いながら殺す冷酷さから、
生涯無敵の大剣豪として恐れられてきた。

しかしあるとき、ラフェルフォードの最強の剣士、フォローガルと
対峙することになった。

そして、激しい闘いの末、ついに彼は負けてしまった。

それは彼をさらなる強さへと追いやる要因となった。

ただ振り回すだけでは超えられない壁があるということを感じ知ら
された。

そして今、彼は再びフォローガルの前へと立ちはだかった。
ヤツを倒し、再び最強の座を取り戻すために。

「俺は生まれて初めて負けを知った。最強の剣士の座を手にしてか
らな。

それがどれだけ屈辱的だったか、貴様にはわかるまい」

ルルカは剣をブン、ブンと二回振ると、その剣先をフォローガルへと向けた。

「最強の剣士の座か。わしに負けたということは、はなっから貴様は最強ではなかったという

ことではないのか？」

フォローガルはたしなめるように言った。

ルルカの顔に血管が浮き出る。

「調子に乗るなよクソジイー！」

そして前傾姿勢になり、駆け出した。

「性懲りもないひよっこめ！」

フォローガルも駆け出す。そして二つの剣を抜いた。

邂逅、そして、ぶつかり合った二人の意志。
伝説の再戦、果たして勝利の行方は

THE FINAL：破滅の兆候

ミクレスたちは解散し、それぞれの目的地へと向かった。

ラミネはミクレスと、ラブレイズ本部あたりまで同行することになった。

彼女にとっては少しばかり遠回りであったが、それでも仲間と一緒にいれるほうがよかった。

二人はセレディー大雪山沿いをひたすら西へと歩き続けた。

アクスラ機関とラブレイズ本部はそう遠くはないため、

一日もあれば到着するだろうと予測された。

旅の途中、ミクレスは歩きながら呟いた。

「ランツばあさんの家に行くといい。スホウはよくばあさんの家を訪れているからな」

「わかった」ラミネは答える。

もしスホウのもとで修行をすることが決まれば、当分の間は会えなくなるだろう。

そうなれば、ラミネはきつと寂しくなるだろうと思い、

ミクレスは時々彼女に連絡を入れることを約束した。

二人はそれからラブレイズ本部に着くまでの間、会話を交わすこと

はなかった。

というよりも、何を話していいのかわからなかったのだ。

そんなことをしているうちに、やがて二人はラブレイズ本部入り口の巨木まで来てしまっていた。

ミクレスは木の入り口を押し開け、ラミネは隣からそれを見つめていた。

「ラミネ」

ミクレスは振り向いた。ラミネはミクレスと目を合わす。

「頑張れよ。スハウの修行はきついぞ」

そういつて、ニツと笑顔を見せた。

そして、ミクレスは本部の入り口へと入り込もうとした。

そのときラミネは待つてと叫んだ。

もう片足を木の中に突っ込んでいたミクレスは、首だけをラミネに向ける。

「どうした？」

ラミネは黙っていた。しばらく待っていたミクレスが、何もないのかと思い、また中へと入ろうとしたときだった。

ラミネは小さな声でこう呟いた。

「ありがとう」

消えそうなほど小さな、でも、優しさに満ちた言葉だった。

「え？」

ミクレスは突然だったため、何に對してありがとうなのかよく理解できなかった。

「私が崖から落ちそうになったとき、助けてくれたじゃない」

「ああ、あれのことか。・・・まあ別に気にしてないけどな」

ミクレスは照れくさそうに曖昧な返事をした。

彼は思わず目を逸らし、遠くを見つめながら呟いた。

「じゃあな」

二人の髪が風に揺れる。ラミネは少し微笑みを浮かべた。

「うん、またね」

ミクレスは真つ暗な階段を、手で壁を追いながら下りていった。

ラミネとも別れ、また一人の旅が始まる。

結果を報告すれば、また次の任務が自身を待ち受けている。

しかし、何故か彼は今、清々しい気分でいっぱいだった。

やがて、階段も中間くらいまでやってきた。

そのとき彼は何か不思議な煙たさを感じ、咄嗟に鼻を手で覆った。

（なんだこれは・・・）

その煙は地下都市から流れてきたものだと思わされた。
奥にいくほど生ぬるい空気が肌に触れる。

やがて小さな光が見え、出口が見えた。

そのとき彼は、まるで浸透していくかのようなじんまりとした不安に駆られた。

（まさか・・・）

ミクレスは咄嗟に階段を駆け下りた。

階段を抜けたとき、いつもは強い光を浴びて思わず目を瞑るのだが、今回ばかりはそんな暢気なことができる状況ではなかった。

「なんだよ、これ・・・」

立ち込める煙の中、そこでミクレスが目にしたものとは・・・

本部、崩壊。

THE FINAL：破滅の兆候（後書き）

読み終えた方は、「MESSAGE 作者より」をお読みください。

MESSAGE：作者より

ご愛読ありがとうございます。

グダグダな文章ながらも、なんとかIを終わらせることが出来ました。

もちろん続きますよ！ええ、ここで終わったら「は？」ですよ（笑
なんというか、まだまだ謎が多く、終わりっていうより、始まり！？
ダークネスフラグメントとか、クリスタル（ダーククリスタル）と
かは特にですね。

ちなみに、ラミネのキャラ付けはとても迷いました。

最初は「心を閉ざした女の子」という形で進めようとしていたんですが、

それではなんかあゝと思ひまして、

「やわらかな雰囲気の子」に変えました。すると見事に微妙な
キャラに……。

でも個人的には好きな登場人物の一人です。

また、途中に入れた「忍び寄る魔の手」ですが、

これも、実は「リンディア」を舞台にしようか非常に迷いました。
でも、やっぱり帝国軍の冷酷さ・残酷さを知ってもらいたかったので
あえてリンディアは切り捨て、カイレトランを舞台に書かせていた
できました。

えー、600字以上じゃないと投稿できないということで、
余談を多く含ませていただきましたが、よければ評価・感想等よ
ろしく願います。

*

*

*

IIについて

一応、「THE FINAL 破滅の兆候」をCHAPTER20
と考えて、

IIの一話目はCHAPTER21より開始という形になります。

最後まで頑張っていくつもりなので、応援よろしく願います。

MESSAGE：作者より（後書き）

IIについてですが、「CHAPTER 21：セトウルメント」より
お楽しみください。

CHAPTER 21：セトウルメント（前書き）

ミクレスは本部に。フルクとアレイラはラフェルフォード城へ。ラ
ミネはスホウのもとへ。

また、フォローガルとシズは帝国軍へと侵略を開始しました。

ちらつくログタントの影。迫り来る三国大戦争。果たして勝利の行
方は……？

事態は思わぬ方向へと進行する！

CHAPTER 21：セトウルメント

二人の剣が今、交わり合った。

彼らの視線の先に、無数の火花が飛び散る。

フォローガルの左手にしっかりと握っていたはずの剣が、空高く弾き飛ばされてしまった。

（やはり、力だけでいけばヤツのほうがやや上……か）

「相変わらずの馬鹿力だな！」

フォローガルは静かに言った。威厳のある低く唸るような声だ。

ルルカはニヤッと笑い、大剣を大きく引いて、まるで剣の五月雨が起こっているかのような高速の突きを繰り出した。

「むっ！」

フォローガルは唸った。反撃のチャンスがつかげえない！

これはルルカの対フォローガル用の作戦であった。得意の大剣のリーチの長さをフル活用し、相手を接近させないことでフォローガルの二刀流を封じる。速さに重点を置いているフォローガルの剣は、細く短い形状になっているため、敵に近付けないと反撃することが出来ないのだ。

以前のルルカはもつと豪快で単発的な攻撃が主だった。それが自分のとりえだと思っていたし、その闘い方に誇りを持っていた。しかし、それだけでは超えられない壁があると知った彼は、力だけで

はなく速さにもこだわり始め、とうとう両方を併せ持つ無敵の剣士へと成長したのだ。

（あの剣で速攻は不可能だと思っていたが……。さすが四天王と呼ばれるだけあるということか）

フォローガルはそんなことを考えながら、チラッと片目を空にやった。さきほど弾きあげられた剣が、もうすぐそこまで落ちてきている。

彼はルルカの攻撃をしゃがんでかわし、落下地点に到達しそうな剣を、片手をスッと差し伸べてつかまえた。

（む……あの体勢で剣をつかまえたか……。さすが、ジジイになっても四天王ってわけか）

ルルカは攻撃をやめなかった。二刀流になったところで、この状況で反撃など不可能だ。何も恐れることは無い。

しかし、フォローガルは攻撃をかわしながら、どこか自信気な表情を浮かべていた。

「おいおい、二刀流のわし相手にそれは悪手だろ……」

フォローガルは身をかめ、次の瞬間脚のバネをフルに使って地を滑るように跳んだ。そして片方の剣でブレーキをかけ、ルルカの真下からほぼ九十度向きに剣を投げつけた。

「っ！」

ルルカは間一髪のところ顔で顔を逸らし、直撃はまぬがれた。しかし、頬に掠り傷を負う。

一瞬止まったルルカのスキを、フォローガルは見逃すことは無か

った。剣を軸に、ルルカの側面にもぐりこみ、剣を横腹に突き刺した。

「ぬう！ ああ！」

ルルカは低く唸った。大量のつばを吐き出す。

フォローガルはその巨体の横をすり抜け、投げつけた剣の落下地点に入った。もともと相手の注意を引くために軽く投げただけだったため、剣はもう落下地点間際に来ていた。

しかし、フォローガルの視線は剣には向いていなかった。ルルカの不断な精神力は、たとえ怪我を負おうとお構いなし。案の定ルルカは、剣を横になぎ払った。フォローガルはしゃがんでかわす。

（くっ……危ないところだった）

気付いたときにはもう、フォローガルの手には二本の剣が収まっていた。

「剣が二つとなれば、攻撃の範囲も手段も大幅に広がる。接近させなければ安心だと油断していたのが裏目に出たな」

ルルカの間合いから離れたフォローガルは、半ば挑発気味に言う。

「以前はあえて何も言わなかったが、おぬしがわしに勝てない最大の理由を教えてやろう」

威風堂々とした口調、恐れも躊躇いもない淡々とした物言い。

そして、フォローガルの鋭い目がルルカを睨んだ。

「バカだから」

「……」

ルル力は黙って聞いていた。しかし、怒りに震えている様子がよくわかる。

フォローガルはさらに刺激するかのように、続けて罵った。

「わしは経験不足の浅知恵小僧に負けはせん」

ルル力はそれを聞いて笑っていた。不敵で、不気味な笑い。

「クハハハハハ！ 言ってくれるねえ！」

そして、顔の血管がはちきれそうなほど浮き上がる。

「では経験不足の浅知恵小僧に負けてもらおうかあ！」

ルル力は飛び出した。両手で剣を振り上げ、着地寸前で振り下ろす。フォローガルは速やかに回避したが、そこにあった地面が大きく陥没してしまった。

（この期に及んでまだ威力があがるというのか……）

地面の陥没したところから、回避したフォローガルの足元まで大きな亀裂が走っていた。

フォローガルの額に汗が流れる。

人は感情によって自分でも気付かないほどの潜在能力を引き出す

ことが出来る。

感情とは、激昂を中心とした、嫉妬・屈辱・憎悪・悲嘆・哀傷など、多種多様であるが、これらの感情を心底思ふことで、通常では考えられない能力を発揮することが出来るのだ。

しかしここまで超人的な能力が発動されると愕然としてしまうものである。剣で地を割るなどといった神技は、七十年間さまざまな剣豪と戦ってきたが今だ皆無だ。

（しかし残念。冷静を失うと周りが見えなくなる）

フォローガルはニヤリと笑った。そして、矢倉（城壁や城門の高楼）の近くに避難し、ルル力を誘導させた。

「ちょこまかちょこまかと逃げ回りやがって！」

反撃のスキならいくらでもある。だが、あえて反撃はしない。

フォローガルは、矢倉のそばに来て、矢倉を支える主な四本の柱の一本を傷つけた。相手に見つからないように。

次の一撃、大剣はフォローガルの頭上を通過していった。そして、傷つけた柱の部分に直撃し、その部分を吹っ飛ばしてしまった。

メキメキという音が鳴る。

どうやらルルカもそれに気付いたようだった。

「……そういう」……！！」

フォローガルは思い切り剣を顔面に投げつけた。ルル力に対応しきれず、直撃はまぬがれたものの、転ばされてしまった。

次にフォローガルはもう一方の柱を滅多切りにした。ルル力も何が起こるかわかったようだ。次の瞬間、矢倉はゴゴゴという音を立ててルル力のほうに倒壊していった。

「ぬっ！」

ルル力は逃げようとした。しかし、それもフォローガルの想定範囲内。フォローガルは回避しようとするルル力のひざに剣をなげつけた。

「ぬああー！」

ルル力は悲鳴をあげた。脚がカクンとして動かない。もうすぐ頭上には矢倉が……。

矢倉はルル力を下敷きにして倒壊した。辺りにほこりが巻き起さる。

砂煙の中、フォローガルは一発目に投げた剣を拾いに行った。

（おぬしの敗因は、バカだから）

フォローガルは城壁を見上げた。その中間くらいに剣が綺麗に突き刺さっている。

「ふむ……あれじゃ、ちと取れんな……」

どうしようか、困ったものだった。とてもじゃないが、何か引っ掛けるものがなければ登れそうにも無い。フォローガルはしばらく上を眺めていたとき、城壁の上に現れた何者かに目をやった。

「こちらは二隊ほど消しておきましたよ」

シズだ。滑らかな口調、滑らかな体格、滑らかな顔立ち。下からでもよくわかる。あれはシズだ。

シズはフォローガルから目を移し、砂煙が舞う倒壊した矢倉のほうに目をやった。

「これまた派手にやったみたいですね。どんな打ち上げをなされていたんですか？」

半ば呆れた様子で言う。

フォローガルは返答しなかった。

「シズよ。お前の下に剣が刺さっておろう。それを取ってくれんか？」

「下……ですか？ ……ああ、ありました。アレですね」

シズは下を見つめ、城壁にめり込むように突き刺さる剣を発見した。

「あの、一つ質問いいですか？ どんなことをすれば、こんなところに剣が刺さるのです？」

「ちとルルカと対戦してな。そのとき投げた剣がそこに突き刺さったのだ。まあ少し取りにくいかもしれんが、取ってくれ」

シズは了解した、と頷いて城壁を下りはじめた。

別に慎重でもなく、やはり滑らかに下りていった。

やがて剣の位置に到達した。シズは剣を抜き、その後はそこから飛び降りた。

シズはフォローガルに剣を手渡した。フォローガルは黙って受け取る。

「さて次はあの巨体に刺さった剣を抜きに行かねばな……」

「……まったく、帝国軍最強のルル力を倒してしまうなんて……」

シズも気付いたようだった。『氷の白影』の討伐。以前は思わぬアクシデントのため、フォローガルは彼を見逃してしまったみたいだったが、今度こそは、完全に仕留めたのだ。

「フン、所詮は帝国軍最強だ」

CHAPTER 21：セトウルメント（後書き）

大変お待たせいたしました！ 待望？の第二部更新開始！ より物語が深くなると思いますので、三国の名前とミクレス・ラミネ・フルクのことを思い出して置いてください！ 生意気ですみません；
・自重。

では、第二部、お楽しみください！

CHAPTER 22：接触

本部、崩壊。

ミクレスは階段を駆け下りた。煙がいつそう濃くなり、息が苦しくなる。ミクレスは鼻を手で覆い、煙を吸い込まないようにした。

（どうなっただよ……いや、それより、フォローガル^{じこがへ}たちは何やってんだよ？）

針のように尖る屋根が特徴だった家も、石造りで天井に突き刺さるほどの高さを持つ城も、窓も、庭も、道も、崩壊し粉碎しもうとにかく荒れ放題であった。砕けた岩や家の壁が道に散らばっている。ミクレスはそれ避けながら進んだ。

ミクレスはまず、ラブレイズ第六天の拠点である城の頂上を目指した。フォローガルがもし生きていれば、何故こんなことになったのか知っているはずだ。

ミクレスは大通りを歩いた。そして、悲惨な光景を見渡しながらぼそつと呟く。

「これはひどい……本部の面影すら感じられないな……」

ミクレスはひたすら歩いた。どこまで行っても煙が立ち込め、建造物は破壊されている。

そのときだ。ミクレスの目に、何者かが留まった。

「おやおや、やっとお目当ての坊やが現れたよ。ラッキーラッキー

！
」

陽気な声と同時に、煙が一斉に吹き飛ばされた。風術系魔法だ。

ミクレスの眼前に、白衣の男と青い毛皮を羽織った男、黒いスカートの女の三人が現れた。

白衣の男は、少し丸に近い顔立ちと黒髪のアールバックが特徴で、眉間には常に皺が寄っており、とても冷酷そうな顔をしていた。背丈は百七十五センチ程度で、他の二人よりも高い。体格は丸くもなく細くもなく、どこにでもいそうな普通の身体だった。もうお気づきの方もいるかと思われるが、彼の名はカリドールである。

次に向かつて右隣の女。髪はサラッと腰まで長い茶髪で、もみ上げは肩あたりまで伸びている。目は細く、可愛いというより美しいといった表現のほうが正しいだろう。全身は黒服で、滑らかなスカートが特徴である。スタイルがよく、ウエストのくびれがよく目立っていた。

そして左隣の男。彼は三人の中で最も身長が低く、ミクレスよりも低い。目は大きくくりくりしていて、まだ十歳くらいの顔つきだった。服は青い毛皮を全身に羽織り、なんとも豪快な服装であった。

ミクレスは剣のつかに手を触れた。もう聞かなくてもわかる。こいつらがこの事態の発端であろう。

警戒し、剣を抜く構えをするミクレスに、カリドールは言う。

「手荒なマネはしたくない。言うことを聞いてくれれば、痛い目を見なくても済むよ」

「お前らラブレイズを皆殺しにするつもりなんだろ？　ここで待ち伏せして」

ミクレスは辛辣そうに言う。そしてとうとう剣を抜いた。

カリドールはやれやれとため息をつく。

隣にいた女は、一步ミクレスに近づくとなだめるように言った。

「私たちは貴方に用があつてここへ来たの。決して、こんなに暴れるつもりは無かつたわ」

口調も美しく、さらに表情の演技も上手かった。

「そういえば、雪山でレフェードから事情は聞かなかつた？」

「レフェード？」

ミクレスは顔をしかめる。

「ああ、あの赤服の男か……」

「やはり会っていたのか。ならば話が早い」

カリドールの低く唸るような声。

「俺はレフェードっていう男がログタントとかいう組織に所属してるってことしか聞いてないぞ」

ミクレスは邪険に言う。

「そうか、お前らあの男の仲間か」

ならば話が早い。こいつらは全員敵だ。

「私たちの指導者^{リーダー}が君に会いたがっているんだよ。十四歳にして天才と呼ばれた君にね」

「そのリーダーさんは会いたがっていても、俺はそいつに会いたくない」

第一、こんな得体の知れないやつらと接触したくないのだが。

「次期世界の王者となるお方の命令だ。君に拒否権などない」

そしてカリドールはクククと笑った。

ミクレスは剣を構え、剣先をカリドールに向けた。あくまでも従う気はない。そんな表情かおをしている。

カリドールは同時に笑い出す。

「ならば仕方あるまい。少しの間眠ってもらおうか。キラ」

キラ、どうやらこの女の名前らしい。女は呼びかけに反応し、ミクレスにゆつくりと近づいた。

ミクレスはその女一人に注意した。ただならぬ威圧を感じる。明らかに場慣れしてる！

「どうしたの。こんなに近付けちゃってもいいの？」

女　キラは微笑みながら言う。ミクレスは高速で剣をついた。

確かに手ごたえはあった。肌に剣が突き刺さったような感触が確かにあった。しかし何故だ。何故剣先に誰もいない？

「君はシノビより速く動けるのかな？」

耳元でその女の声がした。美しく、でも恐ろしい声。

シノビとは、今で言う忍者のことだ。この時代にはあまり公にな

つておらず、修行も活動も殆ど隠密に行っている（隠密だからこそ忍者なのだが）。とにかく身体能力が人並み外れており、影分身や壁抜けなどといった神業もこなすことができるのだ。もちろん普通の人間がとうてい勝てる相手でもなく、シノビからすればミクレスの動きなど止まって見えるだろう。

「ざーんねん。じゃ、おとなしくおねんねしててね」

首に何かが突き刺さったような、脳を強く刺激する攻撃が当たった。とたんに目の前が真っ暗になり、意識が遠のいていく。やがて、ミクレスは気絶してしまった。

「さっすがキラ！ 生け捕り上手！ ぼくなら間違いなく殺してたね！」

青い毛皮の男のはしゃぐような声。でも、口に出している言葉は恐ろしい。

「さあ、もう用は済んだよ。帰ろう」
キラはミクレスを肩に乗せて言う。

カリドールと青い毛皮の男は頷いた。しかし、そのときだった。

「ま……待て……」

「ん？」

三人の背後から、腹から血を流したボロボロの男がやってきた。

「ただでは帰さん！」

よくもまあ、そんな身体で怒鳴り声を上げれるもんだと感心させられた。

「ねえねえ、こいつは殺つていいよね？　ね！？」

青い毛皮の男はニツと笑う。そして、カリドールから了承を得た瞬間、剣を取り出して男に襲いかかった。

謎の組織ログタント。彼らはミクレスをどこにつれていこうというのだろうか？

そして、ラフェルフォードの運命は……？

CHAPTER 22：接触（後書き）

ミクレスが誘拐された！？ ラフェルフォードも大変ですね……ちなみにカリドールは「CHAPTER 1 陰謀なる襲撃」で登場しています。キラはその最後あたりで名前の紹介程度で。。青い毛皮の男は初登場なうえに名前すら明らかになっていません（笑）

CHAPTER 23：さらわれたミクレス

「……………うーん」

ミクレスは暗い部屋で目を覚ました。身体が痛い。

「どこだ……………？　ここは」

上半身を起こし、辺りを見渡す。暗い。真っ暗というほどでもないが、これでは無闇に動けない。

「……………」

ミクレスはまず地面を指で擦った。

「……………石？　いや、レンガか……………？」

はつきりとはわからないが、おそらくそのような類のものだろう。ひんやりと冷たく、少し滑りやすかった。

空気は寒いくらいに冷たかった。しかし、なんだか乾燥している。のどが痛い。

ミクレスは頭上に警戒して、その場に立ち上がった。大丈夫、高さはそこそこあるようだ。しかし、肝心の周りが見えないため、それ以上動くことが出来なかった。

数十分もそこにいると、だんだんと目が慣れてきた。ぼんやりとその場所の状態をうかがえる。

「牢屋か……………」

ミクレスはポツリと呟いた。すぐそばに、波線を描いた鉄格子があった。

ミクレスはそのとき、どういいうきさつでこうなったのかを理解した。そうか、自分はあるとき変な三人組に殴られ、気絶させられ

てしまったんだ。そしてここはやつらの基地か何かだろう。自分はやつらに連れられ、逃げられないようにこんな頑丈な部屋に閉じ込めたというわけだ。

「なるほどな……」

ミクレスはため息をついた。だとすれば、ミクレスの所持品は全て奪い取られているだろう。剣はもちろん、お金や地図まで。ならば、脱出するには自力で鉄格子を突き破るしかない、か。

鉄格子を破るくらいは大して苦ではない。ヤツラにすれば失態なことに、ミクレスの手足を括り付けていなかったのだ。ならば力でぶっ飛ばすのみ。

「っ!!」

ミクレスはさっそく蹴り始めた。鉄格子はガンガンと悲鳴を上げる。手ごたえでわかったが、大した細工もされていないようだ。

しかしそのときであった。ミクレスは、鉄格子の向こうに何者かが現れたため、蹴りをやめた。

「アツヒヤツヒヤ、そんなに焦らなくても安心しろよ。今すぐ出してやるから!」

この声は、雪山で聞いたあの不気味な笑い声をする、レフェードだ。

（そうか、確かこいつもやつらの仲間だったな。ログタントとかいっただか……?）

レフェードは鉄格子の鍵を開け、扉を開いた。そして警戒するミクレスに、レフェードはなだめるように言った。

「そう邪険にすんなよ。君が反抗しなければ何もしない。いい加減わかってくれよ」

「……」

敵に従うのは本心じゃなかったが、ミクレスは黙ってレフェードについていくことにした。この者たちの強さは、身をもって痛感している。

確かシノビとかいったか、あの女、動きも攻撃も技術も半端ない。正直、相手の動きについていくことができなかった。だとすればこの男たちはそれ以上に強いかもしれない。無謀に反抗すればいつ殺されるかわかったもんじゃない。

レフェードは扉を開け、さらに廊下を歩き、また扉を開け、そんな一連の動作を何度も繰り返した。その途中でわかったことなのだが、ここは地下だ。セレディー大雪山で見掛けた、あの洞窟のような通路がここにもある。とても暗く、ところどころで補強が施された洞窟。だが、明らかにセレディー大雪山の洞窟とは違うっているようだ。

「さあ、ついたよ」

レフェードは急に振り向いて言った。レフェードの先を見ると、そこはただの壁。なんだ、行き止まりについたのか、とミクレスは思った。

「何も無いじゃないか」

声を荒くして言う。もともと、こいつには普通に接するつもりは無い。

ミクレスの言葉に、レフェードはクククと笑った。

「まあ見てなよ。凄く上手くできた仕掛けだよ」

嫌味な口調。そして、レフェードは壁にゆっくりと手を触れ、何か

をなぞり始めた。

「ああ、ここだここ。目が慣れてもやっぱり触ってみなくちゃわかりにくいね」

そして、^へここ^をを強く押した。壁がズボつと沈む。

そのとたん、ゴゴゴという音を立てて、壁が二つに分かれ始めた。実に不思議な光景で、分かれた壁の間に、新たに道が出来る。その先は、ミクレスがさっきいたような石造りでしかも特大の部屋があった。

ミクレスは啞然とした。目を丸くしてその様子を見つめる。

「まあ君たち凡人にはあんまり見慣れない光景かもしれないけどね」
レフェードは言う。そして、またケラケラと笑った。

二人は中に入った。広く、そして必要以上に高い部屋。上にはパイプが絡み合っており、プスプスと蒸気を噴出している。5Mほどの高台が左右にあり、その上には白衣の男、そしてトゲトゲの生えた奇妙な法衣を纏う女が立っており、その下には青い毛皮の男、そしてシノビの女が立っていた。レフェードとミクレスはその視線が集まる中心に立ち、四人を見渡した。

「つれてきたぜ」

レフェードは言う。それと同時に、白衣の男と法衣の女が飛び降りた。

「やっと目が覚めたのね。やれやれ、そんなに強くやったつもりはないのに、脆弱な子」

シノビの女　キラは呆れたように言う。ミクレスはそれを無視した。

四人は円状に集まった。皆そり立つ壁のような雰囲気醸し出していて恐ろしい。ミクレスは、今は黙ってこの者たちに従うようにした。

「事情を説明しておこう」

白衣の男　カリドールは言う。彼の声はとても低く、そして冷酷だ。

「君も何故ここに連れてこられたか、知りたいだろうか？」

鋭くギロつとした目が怖い。ミクレスは、警戒しながら首を縦に振った。

「うむ。ではその前に、まずは我々の目的から知ってもらいたい」

「目的だと……？」

カリドールは鋭い目をさらに鋭くして答えた。

「我々の目的は、世界を支配すること」

真剣な発言だった。まるで無理な言葉を、本気で言うことに少し笑える。

カリドールはミクレスの表情をうかがった。どうやら、信じていないようだ。

「君もダークネスフラグメントのことは既に知っているだろう？ 大いなる魔力を秘めた、最強の力。生物を突然変異させ、無敵の戦士へと覚醒させる」

ダークネスフラグメント。レフェードが以前、雪山で口に使っていた

言葉。たしかアレは、とてつもない変化をさせる危険なモノだった。

ミクレスの表情が一変した。

「……おいお前らまさか……！」

何が起こるかが安易に予想できる。

「フフフ、まあそう慌てないでくれ。この話には続きがある」

カリドールは微笑んで言う。彼はその笑みさえも冷酷だった。

「ダークネスフラグメントとは、もともと人の心に潜む闇を具現化させたもの。したがって、材料は人だ」

さりげなく言う言葉に、とんでもない意味が込められていた。

「……なんだと!？」

ミクレスは低く唸った。

そして、何かを言おうとしたとき、カリドールにそれを遮られた。

「人の話は最後まで聞くものだ」

ミクレスは歯を食いしばる。

人の心に潜む闇を具現化させたもの。つまり、ダークネスフラグメントは人の魂を吸収しているということだ。材料は人。つまり、魂を吸収された人たちはもうその場で廃人と化すという意味だろうか。

「人の心に潜む闇とは、誰しものが必ず持つ怒りや憎しみ、悲しみや恨み、まあこのあたりが代表的だろう。それは人一人あたりの割合が常に等しく、たとえば、今まさに憎しみに駆られている人と、穏やかで幸せな生活を送っている人の心を同時に具現化した場合、どちらの人間からもダークネスフラグメントは同じだけの闇を吸収す

るということだ。この意味がわかるかね？」

「ああ。つまり、誰から闇を吸収しても結果的に完成するフラグメントは全て同じだということだろ？」

ミクレスはできるだけ怒りを抑えて、低く言った。

カリドールはうんと頷く。そして、説明を続けた。

「そして、具現化の仕方だが、それはいたって簡単だ。人が死んだときに発する魂を特殊な引力によって引き寄せ、ダーククリスタルに吸収させる。ダークネスフラグメントは、ダーククリスタルの一部を削ったものといってよいだろう」

カリドールはそのとき、うつむいて微笑んだ。

ミクレスに頬に汗が流れた。

「……なるほどな。だんだん解ってきた」

人が死んだときに発する魂を吸収させる。ということは、ダークネスフラグメントを量産するには大勢の人が死ねば効率がよいということ。つまりだ……。

「そうか、お前ら、今回の三国戦争に乗じて……」

戦争ならば大量の人が死ぬ。もちろん、魂も湧くほどに吸収させられる。この者たちにとっては願っても無い絶好の機会というわけか。

「その通り。死者が増えればダーククリスタルの勢力も格段に向上するからね」

「くっ！」

（俺たちは、こいつらの手のひらの上で踊らされていたというわけか……）

「さて本題だが、我々は正直、君のような虫けらには用は無いだ。だが、何故か我々の指導者が君に目をかけられた」

カリドールは白衣に手を突っ込む。

「よって、君はしばらくの間はここで待機してもらいたい」

ミクレスはしかめっ面をした。

「生憎のこと、俺はお前らに協力するつもりはさらさらないんだ」

生意気な口調。淡々として、吐き捨てるような言葉。

そのとき、シノビの女が一瞬視界から消える。

「っ！」

首に刃物が突きつけられた。目の前にはキラが現れ、不気味な微笑みを浮かべていた。

「君に選択の余地はない。君がもし反抗するということならば、そうだな……あのラミネとかいう女を……」

カリドールは低く言う。

「……！」

全て読まれていた。いや、行動を監視されていたのだろうか。そうもなければ仲間を人質に捕ることはできない。ミクレスは残念そうにうつむいた。

「素直な子ね。貴方みたいな可愛い坊やはとてもやりやすいわ」

キラも愉快そうに呟く。そして、静かに刃物を直した。

今は従うしかなかった。さもなくばこの者たちは本当にラミネを殺してしまうだろう。そしてその後はフルク、続いてアレイラ……。自分が命令に背けば大切な仲間が死ぬ。自分のせいで仲間を失いたくは無い。

しかしどうしてだ？ 別に、ミクレスじゃなくても他にもっと強いやつはいるだろう。やはりそれは、この者たちの指導者というやつに關係しているのだろうか。

考えても仕方が無い。今はただ、この者たちに従うほかは無いのだ。

さらわれたミクレス。そして、人質を理由に絶対服従を暗示させられた。

世界の支配。始まる大戦争。全てはログタントの思う壺だった……

CHAPTER 23・さらわれたミクレス（後書き）

ログタントにとって、三国の戦争は好都合！？

次回、いったんリンディアの情勢に戻ります！

PROFILE：プロフィール（臨時）（前書き）

これはストーリーの進行には関係ございません。

続きを読みたい方は、そのまま「CHAPTER 24」へどうぞ。

PROFILE：プロフィール（臨時）

登場人物が多く、何かと覚えることが多いと思われるので、ここでいったん確認を含めた紹介・まとめを書きたいと思います。なお、ここに書かれていることは現時点での登場人物・説明なので今後の物語のネタバレを含むことはございません。

また、別に読まなくても大丈夫って方はこの章は飛ばしてください。あくまでここは「CHAPTER 23」までの整理・まとめですので、

読まなくてもストーリー自体には何ら支障はありません。

（むしろ、イメージが変わってしまう恐れがあるので、逆に見ないほうがいいかも？）

注意書き

・これは「CHAPTER 23」までの整理です。ただ、特徴などが詳しく書かれています。

・「CHAPTER 24」以降の登場予定のキャラ紹介はしていません。

・今後のストーリーのネタバレはございません。

・言葉を忘れかけたときや、よくわからないという時はここをご覧ください。

・キャラクターのイメージが変わってしまう恐れがあるので、読む必要があるかどうかは各々の判断でお願いします。ご了承ください。

* * * * *

*

~~~~~主人公たち~~~~~

~~~~~

ミクレス・ファルレイ

年齢：14歳

体重：46kg

身長：165センチ程度

髪：耳が半分隠れるくらいの茶髪。ふんわりと小さな丸みがある。

顔：凛々しい顔。目が少し細い。

体格：この年齢相応の身体。しかし、身体能力は桁外れ。

性格：淡々としていて、くだらないことに興味が無い。厭世。厄介ことが嫌い。

服装：青い麻の服（旅人が愛用している旅人服）その上から青いマントを羽織っている。

装飾品：小型のウエストポーチ。ルクシリアの剣（両刃。革の鞘に最適）。懐剣。短剣。

知名度：最年少ラブレイズ本部所属。また、天才少年剣士として王国で有名。

戦闘：力よりも速さ重視の戦い方。

ラミネ・ソリフェイト

年齢：13歳

体重：39kg

身長：155センチ程度

髪：赤色の滑らかな短髪。あごのラインに沿って生えている。桜の花櫛が特徴

顔：ほんのりと丸い。薄紅色の頬。可愛い。目が優しい。

体格：細い。胸も膨らみを見せ始めた程度。

性格：優しく、おとなしい。怒っていても、暖かい心は失わない。

服装：滑らかな白色の洋服。王族が着る高価なもの。
装飾品：バッグ。

知名度：リンディアでは有名（王族なので）。

戦闘：頭を使った闘い方。絶対的強者にも冷静に立ち向かう。

フルク・ライラフォル

年齢：15歳

体重：56kg

身長：175センチ程度

髪：肩くらいまで伸びた金髪。

顔：イケメン。格好良い。目が綺麗。

体格：スマート。でも、しっかりと締まっている。

性格：女好き（女たらし）。でも本当は心優しい。

服装：赤色のローブが基本

装飾品：巨大な弓。

知名度：弓術の達人ということでも有名。

戦闘：弓に麻痺薬や毒薬を付着させて相手に状態異常を引き起こす戦法。

~~~~~ラブレイズの主な人たち~~~~~  
~~~~~

フォローガル・ネクロフェイス

年齢：73歳たぶん

身長：160センチ

髪：薄い白髪。

顔：威厳のある怖い顔。鋭い目をしている。

体格：普通。腰は曲がっていない。

性格：挑発が好き。無茶が好き。

服装：一般的に、ラブレイズの紋章のついた黒服。

装飾品：ホワイツインズ（二つの白く輝く剣）

知名度：ファイアール島規模で有名。ファイアール四天王。ラブレイズ第六天

戦闘：速さも力も抜群。二刀流による様々な戦闘をする。

シズ・ルーツ

年齢：22歳^{たぶん}

身長：179センチ

髪：滑らかなロング。

顔：滑らかにシュツとした顔つき。

体格：滑らかでスマート。

性格：滑らか（はっ!?!）

服装：一般的に、ラブレイズの紋章のついた滑らかな黒服。

装飾品：ジブラック（根元がくびれた、特異な形状の剣）

知名度：王国内で有名。ラブレイズ第六天。

戦闘：滑らかな戦い方。

リスト・ピース

年齢：32歳

身長：170センチ

性格：ひたすら真面目。

服装：一般的に、ラブレイズの紋章がつけられた白衣。

知名度：ラブレイズ第六天

コーリス・オボロモン

年齢：48歳

身長：177センチ。

性格：責任感が強い。

服装：赤茶色のローブ

知名度：ラブレイズ西支部長

ミクレスはラブレイズ本部所属。

~~~~~ラフェルフォード王国軍~~~~~

アレイラ・イズフィール

年齢：14歳

体重：41kg

身長：159センチ

髪：黒でポニーテール。肩を過ぎるくらいの長さ。

顔：くりくりとした可愛い目。

体格：全体的にシュッとした感じ。胸は小さい。

性格：強気？でも優しい。格好も良く、礼儀正しい。

服装：へそが見える赤い騎士の鎧。

装飾品：ランフォードの剣（一般的に広まっている剣。重くもなく軽くも無い）

知名度：なし

戦闘：基礎を中心とした協調性のある戦い方。

フルクも王国軍。

~~~~~カイレトラン帝国軍~~~~~


キヤリオル・クラウザー

年齢：23歳

体重：61kg

身長：186センチ

髪：金髪と茶髪の間。

顔：冷酷。一見格好良い。

体格：引き締まった肉体。太くもなく細くもない。

性格：独裁的な政治。冷酷非道。雑魚には興味が無い。争いごとが好き。

服装：赤い高貴なマント。普段はジャケット。

装飾品：アルカイアの剣（帝国最高の鍛冶屋が作った帝国一鋭い剣）

知名度：その冷酷非道さと、独裁的なやり方で島中に聞こえている帝王。

戦闘：繊細で綺麗な戦い方。一流剣士。

ルルカ・シャトルーク

年齢：19歳^{たぶん}

体重：89kg

身長：195センチ

髪：尖った濃い茶髪。短くもなく長くもない。

顔：冷酷。でも、イケメン。たまに凄い形相をする。

体格：筋肉により、全体的に大きい（太くは無い）脱ぐとマッチョ。

性格：冷酷非道。雑魚は消す。自分より強い者は許さない

服装：白く厚い鎧。

装飾品：マデージブレイド（超巨大な黒い剣。刃には丸い穴がある）

知名度：帝国軍最強の剣士。フィアーシル島四天王。

戦闘：豪快且つ単発的な攻撃。フォローガル戦のときは速く鋭い攻撃。

~~~~~ ログタント ~~~~~

## レフェード・ドラムナー

年齢：20代くらい

体重：不明

身長：175センチ程度

髪：トゲのように尖った赤に近い茶髪。

顔：イケメンだけど、どこか不気味。普通にしていれば凛々しい。

体格：スマートで、細く見える。

性格：大雑把。不気味。

服装：炎が燃えるように赤いコート。

装飾品：デッドメーター（円形に刃がついた、ブーメランのような軌道を描く飛び道具）

また、指で弾く用の鉄球。

知名度：ログタントは基本的に謎。

戦闘：親指で弾き、高速の鉄球を打つ。その他不明。

## カリドール・ノーフォエル

年齢：43歳

身長：177センチ。

髪：黒髪のオールバック。

顔：少し丸に近い。眉間には常にしわが寄り、厳か。

体格：細くもなく太くもない。

性格：淡々としていて、くだらないことには興味が無い。

服装：白衣が基本。

装飾品：謎。

知名度：ログタントは基本的に謎。

キラ・キララ

年齢：18歳

身長：168センチ

髪：サラつと腰まで長い茶髪。

顔：目が細く、可愛いというより綺麗。目が綺麗。

体格：スタイルがよく、ウエストのくびれが目立つ。

性格：そっけないが、愛想がよいときも。つまり気まぐれ。

服装：黒服。滑らかな黒いスカート。

装飾品：センリツ（刃が異常に大きい、変な形状のクナイ）

知名度：ログタントは基本的に謎

戦闘：忍者。シノビ。敵を困惑させたり幻覚を見せたり。時には真つ向から。

青い毛皮の男・トゲの生えた法衣の女・ログタントの実質的指導者、などは

こういう状態の登場しかしていないのであえて説明は省きます。

~~~~~それ以外~~~~~

スホウ

年齢：26歳

体重：80kg

身長：200センチ

髪：ハリガネのように硬く、真っ直ぐ伸びた髪。

顔：大人の優しいお父さん系の顔。いつも笑っている。

体格：厚く引き締まった肉体。背が高く、それもまた威風堂々としている。

性格：優しい。暖かい。笑みが大事。

服装：紫色の道着。黒色の腰巻。

装飾品：謎。

知名度：フィアーシル島四天王。隠居。

戦闘：謎。

ランツばあさん

年齢：93歳

身長50センチくらい。

髪：白髪。

顔：優しさに溢れた皺の多い顔。

体格：腰が曲がっている。

性格：優しい。

服装：ジンベを羽織っている。

ガムラス・ユフラ

年齢：47歳

身長：179センチくらい。

髪：白髪まじりの黒髪

顔：威厳がある。怖い。

性格：怖いがかっこいいことを言う。信念を貫いている。

知名度：アクスラ機関の長。

また、途中で会話の中だけで出てきた「ファールック」など、

ラフェグリフ……グリフ系で最も凶暴な種類。ハービラ荒野に生息
ブラッドグリフ……頭が悪いが強暴な種類。帝国軍の主戦力の一つ。
パードラグリフ……グリフ系で最も優しい種類。ラミネを助けた鳥。
リュット……人になつきにくい賢い鳥。全四種（多分）

地名

ハービラ荒野……帝国の最南端に位置する険しい荒野。
セレディー大雪山……帝国と王国の国境。ラフェルフォードの最北
端。

クラフェータ大草原……ラフェルフォード最大の草原。西一帯に広
がっている。

リハイム大橋……帝国の中央部と北西部を繋ぐ唯一の連絡橋。
ロラッタ地方……ラミネの王、ハオルが治めていた地方。リンディ
ア南東の海岸線沿い。

桜の森……咲き時期と枯れ時期を三年おきに交互に繰り替えす桜の
森。

称号

ファイアーシル島四天王……ファイアーシル島で最強クラスの四人のこ
と。

ラブレイズ第六天……ラブレイズ最高司令官の六人。ラブレイズの
基礎を築いた人たち。

言葉

ラブレイズ……一般的に「自治組織」を指すが、場合によって、その組織の所属剣士を

指したりすることもある。

リンディア……リンディア族・リンディア国・魔法国軍・魔法国
ラフェルフォード……ラフェルフォード族・ラフェルフォード国・
王国軍・王国

カイレトラン……カイレトラン族・カイレトラン帝国・帝国軍・帝国
キャリナーバード……主に伝書の役割をする鳥のこと。俗称キャリ
ナー

アティーチ……キャリナーでも、野生の鳥をなつかせ、訓練させた
キャリナーのこと。

アビラブル……キャリナーでも、市販で買ったキャリナーのこと。

セレディー……セレディー大雪山の略称。

PROFILE：プロフィール（臨時）（後書き）

一応、現時点ではこのくらいですかね。
とりあえず中間ということで、確認程度に（笑

CHAPTER 24：魔法国軍の進撃

「明日にはラフェルフォードに進撃を開始しよう」
フィアーシル四天王で、リンディア最高司令官のヴィランティアが言った。

ここはミクレスがちょうどログタントに気絶させられたときのリンディア。そして、リンディアの最高階級の「七賢者」による会議が行われていた。七人は皆、紺色のローブを着、辛辣そうな面持ちで円状に座っていた。

「異議あるものはいるか？」

ヴィランティアの険しい口調。どうやら他の六人も賛成らしく、異議を述べるものは一人もいなかった。

「よし、そうと決まれば早速出発の準備をしよう」

ヴィランティアが言うのと、七賢者の一人、クラフィスが

「私は各地方に極秘礼状を書いて届けます」と言った。

続いて一人、また一人と自分の役割を述べていった。ヴィランティアは黙って聞き、その都度頷く。そして最後の一人が役割を言い終えた後、自分に残された役を自分に言い聞かせるように言った。
「ならば私は魔法使い育成機関の者どもを収集しておこう。彼らは第一線を担う大事な戦士たちだからな」

ヴィランティアは立ち上がった。そして、立ち去りざまにこういう。

「会議は終了だ。各々は持ち場についてくれ」

セラファイフオースター
ここは魔法使い育成機関。そこでは、いつもと変わらず厳しい修行が行われていた。セラファイフオースターに所属する魔法使いたちは超エリートたちで、過去の経歴を辿っていてもここから国を動かす為政者が生まれることも少なくない。実際、ファイアーシル四天王のヴィランティアもここを卒業している。

セラファイフオースターはまるで学校のようなところで、毎日十限目まで授業があり、朝の早くから夜の遅くまでずっと自らの魔法を磨いている。もちろん、風術系魔法なら風術系魔法の、炎術系魔法なら炎術系魔法のコースがあり、それぞれの意思に応じて自由に選択できるようになっているのだ。

また、各コースにもランクがあり、たとえば炎術系魔法コースならC→SSクラスまでなど。それぞれの力量に見合ったランクが設定され、確実に力を付けられるように国は提供している。

ちなみにここは破壊系魔法SSクラス。険しい表情で真剣に授業に取り組む生徒の姿があった。

「ハアアアアアア！」

SSクラスの生徒でさえも、破壊系魔法の修行にはかなりの体力を使う。精神を統一し、気持ちを集中させ、そして魔法弾を放つ。たったこの一連の動作だけでも、想像以上に疲労がたまるのだ。

部屋は道場のようなところで、しかしとても広い空間である。他人の放った魔法弾が当たらないように広い造りになっているのだ。

人々が集中して練習をする中、ただ一人クククと笑って立っている男がいた。身長は百八十センチくらいで、髪はふにゃふにゃだが

一つに固められている。顔は白く、口紅をつけメイクをし、気障な目と尖がった鼻が特徴だ。全体的に身体が柔らかいサーカス団のピエロのイメージがあり、肌が真っ白で不気味な笑みを浮かべていた。

「おいこのオカマ野郎！ 気が散るんだよ！ やる気ないなら家帰って寝てろ！」

ある大柄の男が、クククと笑う男に近づいて怒鳴る。笑う男は大柄の男を横目で見た。

「ああ、コラコラ……ケンカはやめてください！ ……ラウクさんも、真面目に練習に参加してくださいよ……」

先生がやってきて言った。ラウクとは、クククと笑い、オカマと呼ばれた男のことである。ラウクはいつも不気味に微笑んで、つまらなさそうに練習を見つめていることから、先生たちを困らせている生徒の一人だ。

ラウクは先生と、大柄の男の腹部に手を当てた。そして、ニヤリと不気味な笑みを見せた後、こう唱える。

「プラットライン」

その瞬間、ラウクの手から大きな白い光が現れた。次の瞬間、白い魔法弾となって先生と大柄の男を吹っ飛ばしていった。

「ウフフ、あたしに齒向かう者はどうなるか、思い知ったかしら？」男なのに「あたし」だなんてなんだか気色悪い。だが、その実力は並ではなかった。

先生と大柄の男は、壁を突き破って向こうの部屋へと出て行ってしまった。それほどまでに、強力で危険な力、プラットラインのこ

とを説明しよう。

プラットラインとは、破壊系魔術最強の技。その力はあらゆるものを粉碎し、破壊するといわれている。破壊対象は、主に物体（人体を含む）で、これにやられたものは再生までに通常の数倍の時間がかかるらしい。もちろん、その威力に見合った体力を発動時に奪われる。それを容易く発動させることのできるラウクは、やはりただものではないということがわかりただけだろう。

部屋中の生徒や先生たちが凍りついてしまったかのように動きが止まった。そして、震えながら吹っ飛んだ二人の行方を捜す。二人は悲鳴さえも上げず、ただじつと壁の向こうで倒れていた。

ラウクはまたクククと笑い、近くで呆然と立ち尽くす生徒の一人を呼んだ。

「ねえそのナイスガイ」

生徒は目を見開いてラウクを見つめた。

「え、は、私ですか……？」

とてもおどおどしている。それもそうだ。たとえ破壊系魔術を使いこなすことができるにしても、それを人に、ましてや同じクラスの生徒に使うなどとは思ってもいなかっただろう。そんなことさえも平気でやってのける彼には、逆らってはいけないと直感した。

「早く助けてあげたら？ ほっとけば後数分で死んじやうよ？」
生徒は震えながら何度も頷いた。そして、ラウクに背を向け、二人のもとへと駆けていった。

「なあラウク、もう少し軽い魔法使ってもよかったんじゃないか？」

ラウクといつも一緒にいる男、クルックが言った。ラウクは苦笑し

ながら答える。

「ヤダわあ。クルックまでそんなこと言うの？ あたしちゃんと急所を外してあげたのよ？」

「……いや、そういう問題じゃ……」

急所を外したからといって、一般人でしかも敵じゃない人たちにプラットラインを使うのはさすがにどうだろう……。まあ、本当に殺さなかっただけマシか。

「さてと、あたしはそろそろ休憩するわ。面倒くさくなっちゃった」
ラウクはつまらなさそうに言い、クルックと振り向く。クルックはやれやれとため息をついた。

そのときだった。

部屋を出ようとするラウクの前に、頑固なしわが刻まれた男が現れた。

「あら、ヴィランティア様じゃなくて？」

ラウクは微笑んで聞く。ヴィランティアはラウクの顔の前に手を出した。

「プラットライン」

「っ……!!」

ラウクは咄嗟に両手で顔面をガードしたが、吹っ飛ばされしまった。しかし、何故か空中でバック転をし、見事綺麗に着地することができた。

「酷いわね。……もしあたしがマジックバリアーを使つてなきゃ、顔ごと吹っ飛んでたところよ」

ラウクは怒ったように言う。ラウクの腕の服は破かれ、中の皮膚も赤くただれていた。

周りの生徒たちは、そんな反抗的な態度をとるラウクに驚いた。また、最高司令官たる男の攻撃を難なく防御したことにも驚愕していた。

そして、ヴィランティアが入ってくると、ラウク以外の全員がひざまずき、地を向いた。

「風紀を乱す愚か者には制裁を下さなければならない、と、言いたいところだが、君は大事な戦力だ。今ここで首をとってやってもいいのだが、実に惜しい」

ヴィランティアは歩きながら言う。ラウクはフンと鼻を鳴らして言い返した。

「惜しいですって？ たった今殺そうとしていたくせに」

ヴィランティアはそれを軽く無視して、会議の結果を報告した。「さきほど七賢者による今後の予定に関する会議が行われた。そこで、明日、ラフェルフォードへと進撃を開始することが決議された。したがって、今日の訓練は中断し、明日の進撃に備えてゆっくり休んでくれたまえ」

生徒たちは驚いて顔を上げた。互いに顔を見合わせ、部屋中にとよめきが走る。その微妙な空気を打ち破ったのが、ラウクだった。

「それってさ、たくさん人殺していいってことよね」

あたりは静まり返った。

「まあ、言い換えればそういうことだ。ただし、敵をな」

ヴィランティアの返答に、ラウクはこの上ないほどの不気味な笑みを浮かべた。

「そりゃ面白い。血が騒ぐわ……」

CHAPTER 24：魔法国軍の進撃（後書き）

破壊術系魔法最強のプラットラインの「ライン」には「壊す・破壊する」という意味があります！ちなみに思いつきなのでプラットは大した意味はありません。

さてさて魔法国軍も進撃を開始しました！ ラブレイズ本部も崩壊し、フォローガルやシズも帰国途中。ほぼ無防備なラフェルフォードの、運命はいかに！？

CHAPTER 25：攻防と脱出

「ククク、人質って便利なものだよな！ アッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！」

レフェードはミクレスのそばで大笑いをする。ミクレスは怒っていたが、ものも言えなかった。

「……っ！」

レフェードはミクレスの肩をパンパンと叩いてから、その隣を通り過ぎていった。それと同時にカリドールら四人も振り向き、部屋の奥へと歩いていった。

ミクレスはそこで悔しそうに立ち尽くしていた。拳を握り締め、歯を食いしばる。込み上げてくる遺憾を押さえ、さぞ無念そうな面持ちだ。

そんなミクレスを放っておいて、カリドールたちは五人で集まり、極秘事項に関しての会話を始めた。おそらくミクレスに聞かれてはまずいことがあるため、あえて離れたのだろう。

「ダーククリスタルが完成するまでには後どのくらいの魔力が必要なのだ？」

カリドールは眉間のしわをさらに寄せて問う。キラは得意げに答えた。

「ザッと八万人ほどが死んでくれれば、まず問題ないと思われます」「ふむ、そうか」

無愛想な返事。そして、カリドールは手を頭に当てて考えた。

しばらく考え込むカリドールに、レフェードは言った。

「なーに、ある程度死者が出れば機を見て闇の軍隊を放出させればいいさ。もともと、ファイアーシル島の住人が全滅したって問題ないからな」

軽率な発言だった。カリドールは少し顔を上げて、それを否定した。「現在のファイアーシル島に在住する総人口は約六百万人。たった八万人を消すくらい、ダークフォースなど無用」

「それを決めるのはあの方。貴方の意見はもつともだけど、残念ながら貴方はこの組織の指導者^{リーダー}ではない」

法衣の女は話の腰を折った。

「へえー、なるほどね……」

パイプの上、一人の女性が眼下の様子を眺めていた。

女性は、赤いボトムの下から白い太腿^{ふともも}を見せ、脚は革のブーツを履いていた。上半身は白い絹製の滑らかな洋服で、首には蝶のネックレスをつけている。顔は目が大きくて可愛く、頬は柔らかくほんのりと丸みを帯びている。髪の毛は金髪に近い茶髪で、あごのラインに沿って生えている。全体的にとても上品で華麗なイメージがあり、20代女性でもかなりのナイススタイルと言われるだろうと思う。そして、背中には細長いバッグを背負っており、さらに左右の腰には何やら短剣を入れているような小さな革の鞘がつけてあった。

そんな彼女は、パイプの上で敵に見つからないように身を潜め、

何やらぶつぶつと呟いていた。

「彼らは部下であり、リーダーと呼ばれる者と主従関係を結んでいる。おそらくリーダーはカビレッジの祖先にあたる者だろう……」

そう独り言を言うと、ふふつと微笑む。

「なるほどね、だんだん読めてきた」

そして立ち上がった。

（冷静に考える。ラミネは今スホウの近くにいる。フルクもアレイラム、王国軍の中にいる。そう考えればまずこいつらにやられることはないはずだ。それに、俺がこいつらにいいようにされていること自体がまずい。ならばどうする……逃げるか……？）

ミクレスはそこでただ一人考え込んでいた。今ならログタントの五人とも距離がある。逃げるのには好機だが、しかしキラの無茶苦茶なスピードから果たして逃げ切れるだろうか。

そんなことで頭を悩ませていたときだった。会議が終わったのか、五人はこちらへと歩み始めていた。

（くっ……今はこらえるしかないか……）

とりあえず今はリーダーに会うまでの間、おとなしくして時間を稼ごう。

ミクレスの中で、一つの決心がついた。おそらく今逃げようとしても、出口もわからないし第一逃げ切れる自信がない。今は素直に彼らに従うのだ。それが、現時点での賢明な判断だろう。

しかし、ミクレスの判断もことごとく崩されることになる。そのとき、ミクレスの身体に、ガツシリと鎖が巻きついただった。

「っ……！？」

ミクレスはその鎖を目で辿っていった。どうやら、鎖はパイプの上から伸びてきているらしい。でもしかし、何故そんなところから……？

そして殆ど考える暇もなく、ミクレスの身体は宙に浮き、パイプの上へと引き寄せられていった。ミクレスは驚いた様子で、でも鎖に身をまかせて鎖の先へと飛んでいった。

鎖は手繰り寄せているというよりは、縮んでいつているといった表現のほうが正しい。つまり、この鎖は伸縮自在の鎖なのだろう。何故それがわかったかという点、鎖はだらんと垂れた様子もなく、ピンと張ったまま伸びていたからだ。

ログタントのメンバーもその様子に気付いたみたいだった。

「なんだあれは……？」

カリドールは咄嗟に駆け出した。しかしすぐに立ち止まり、頭上を見上げる。

キラはその場に身を低くした。そして、遙か上にあるパイプを見つめる。次の瞬間、彼女は地面が陥没しそうなほどの強さで地を蹴

り、宙高く飛び上がった。

鎖の先には二十歳くらいの女性がいた。女性はミクレスを引き寄せた後、すぐに鎖をほどき、それを懷に直した。ミクレスは半ば混乱状態で問い掛ける。

「あんた誰だよ……？」

しかしそのときだ。ミクレスたちの隣からキラが現れたのは。

女性は微笑みを浮かべて言う。

「今はそれどころじゃないでしょ！」

そしてミクレスの手を引き、駆け出した。

「逃がしはしない」

キラの目が大きく開かれた。次にあの超人的な身体から何が繰り出されるのかと考えると恐ろしい。しかし、女性は二つと笑い、腰から短剣 いや、何か引き金がついた武器のようなものを取り出した。

その先端部分をキラに向ける。そして次の瞬間、パンという爆音とともに何か高速の弾丸のようなものが発射された。

しかしそれはキラに当たらない。キラはもう被弾位置からは消えており、遙か二人の上を浮遊していた。女性はわざとらしく驚きながら呟く。

「うつそー！ 銃弾かわすなんてあいつ人間？」

そんなことを言いながらも何故笑っていられるのかがミクレスには理解できなかった。そしてそのとたん、ミクレスはその女性から手を離された。

「そのまま壁に向かって走りなさい！」

女性はその場に立ち止まった。そして、先ほどの引き金のついた武器を二つ取り出す。

「おい！ あんたはどうするんだよ！？」

ミクレスは慌てて問う。いくらなんでも心配だ。

「決まってるでしょ！ あいつを止めるのよ！」

女性は頭上を駆けるキラに武器の先端を合わせながら、その引き金を引いた。

また、バンバンという音が鳴る。しかし次の瞬間、キラは視界から姿を消した。

「っ！」

後ろだ。女性は咄嗟に身をかめ、キラの攻撃をかわす。そして振り向いたと思うと、また武器の先端をキラに向け、バンバンという音とともに何かを発射した。

ミクレスはひたすらパイプの上を走り続けていた。少し先に壁が見える。しかし、壁に向かって走ったところでどうしろと言っただけ……。

だいたいあの女はいつたい何者なのだ？ 突然現れ、しかもあのキラと互角に対峙している。何やら見たことも無い飛び道具を使って戦うし、ますます謎であった。

（こりやさすがに相手が悪いわね……）

女性の頬に冷や汗が流れた。さっきまで余裕を見せていた彼女も、キラの超人的な身体能力に焦らされてきているのだ。

「悪いけど、逃げさせてもらいますわ」

女性は苦笑いを浮かべながらそう言い、キラの足元のパイプを四発撃った。

「……！？」

ガタンと言う音とともに、その部分のパイプが深く沈んだ。キラはバランスを崩してよろめく。

女性はそのスキに、人が二人くらい乗れそうな白いボードを取り出した。

先に説明しておくが、これはスカイボードといい、空中を滑ることができる超便利な乗り物である。

「じゃあねっ！」

女性はボードを空中に捨てるかのような勢いで投げた。そしてそのまま落ちていってしまうのかと思えば、ボードは見事に空中で浮いた。

女性は急いでそれに乗る。次の瞬間、ボードは炎をボウボウと噴き出して高速で前進した。

だいぶ先にミクレスが走っていた。しかしそんなこともお構い無しに、すぐに追いつく。女性は片手で乱暴にミクレスを引き寄せ、もう片方の手で巨大な望遠鏡のようなものを取り出した。

その望遠鏡のようなものは前方に聳え立つ壁を対象に向けられた。ある程度近づくと、彼女は秒読みを開始する。そしてその数字が「0」になった瞬間、望遠鏡のようなものの先端からミサイルが発射された。

鈍い爆音とともに、炎と煙が巻き起こった。これは、どこかで見たことのある光景だった。

女性は煙の中へと直進した。ミクレスは壁に激突するのかと思いき、思わず目を瞑っていた。

「これはオマケよ！」

そう言うと、女性は丸いタマゴ型の何かを取り出し、そこについてある糸をびつと引いた。そして、さきほど爆発したところに投げ捨てた。

「くっ………待て！」

キラは煙の向こうに消えたミクレスたちを追って、煙の中へと突入した。しかし、そのときだった。

「ぬっ……！」

二発目の大爆発。敵の武器の特徴さえも知らないキラにとって、この爆発は予想外のものだった。

キラは、咄嗟に顔面を腕で覆った。その部分はなんとか助かったが、砕けた石の破片が群れとなってキラを襲う。キラは全身傷だらけになった。

そして、爆風とともに大きく吹っ飛ばされてしまった。あまりに突然のことだったので、受け身もとれるはずもなく、そのまま地表へと落下していった。

しかし、キラは別に焦った様子も無かった。むしろ、落下中にこんなことを考えていた。

（あの女……あの武器……一体何者なのだ……）

CHAPTER 25：攻防と脱出（後書き）

引き金があり、銃弾といえば……？

望遠鏡のような形で、ミサイルのようなものを発射するものといえ
ば……？

糸を引くと、数秒後に爆発するタマゴ型の爆弾といえば……？

ある程度、どんな名前でどんな武器なのか理解できるんじゃないで
すか？笑

ちなみにスカイボードはエンジンで動いています。何故浮くの？と
いう質問はナシの方向で。

CHAPTER 26 : F・I

背後で二発目の大爆発が巻き起こった。爆風の影響で、スカイボードはさらに加速する。

ミクレスは女性に襟を掴まれているだけで、殆ど宙に浮いている状態だった。

眼下には荒野が広がり、すぐ上には白い雲がある。それだけでかなりの上空を飛んでいるのだということが分かったし、それに高所のせいで恐怖を覚えた。

女性は爆心地からある程度離れた後、スカイボードを空中で止めた。

「なんとか逃げ切れたわね……対人戦で久々に焦らされたわ」

そついうと、ミクレスをボードの後尾に乗せる。ミクレスはふうつと息をついた。

「あの女はシノビとかいうものらしい。俺も正直ビックリしたよ、あんな女がいるなんてな」

女性は何かを押したのか、ボードは急に超低速で前進し始めた。

女性はボードに腰を下ろし、ミクレスの隣に座った。

「シノビか……いわゆる忍者ってやつね。……まあそりゃ勝てませんわ」

ミクレスは女性にチラつと視線を移した。

「そついえばさ、見たことも無い武器使ってたけど、あんた何者？」

見たことも無い武器。主に飛び道具で、バンバンと音が鳴るもの

や、望遠鏡のようなもの、タマゴ型の爆弾など、どれもこれもこの時代には存在しないものばかりだ。しかも、あれほどの高威力なら気になるのも仕方ない。

「私はF・I。^{エフアイ}ちなみに、この武器は拳銃って言って、引き金を

引くと弾丸を発射する、この時代で言う飛び道具の最上級ってところかしら。んで、こっちはバズーカ砲。そこらへんの物体なら一瞬でオシヤカよ。あと、この球形の玉は手榴弾といって、糸を引いた数秒後に爆発する仕組みになってる時限爆弾みたいなものよ」

女性は武器を見せながら説明をした。やっぱり、どれもこれも見たことが無い。

「そんなもんどどこから持ってきたんだよ？ 少なくとも、今まで見たこと無いぞ？」

ミクレスは女性から拳銃と呼ばれるものを受け取り、興味深そうに見つめた。

「そんなの当たり前じゃない」

女性は言う。ミクレスは引き金に指を当て、カチッと押した。

バンと音が鳴り、びっくりして拳銃を落としそうになった。咄嗟に掴み、すぐに女性に返す。

「どうということだよ？」

ミクレスは話を戻した。

「まあ後で教えてあげる」

女性はウインクをした。そして、気をつけながら立ち上がる。

「ちよつとそのへんの高台に降りましょう」

そして女性はミクレスに手を差し伸べた。ミクレスはそれを掴み、引き起こされた。

「しっかりつかまってなさい」

そう言っと、女性はそこに堂々と立った。しかし、ミクレスは遠慮がちに肩をつかむ。

「何やってるのよ？ 下手すれば荒野に真っ逆さまよ？ しがみついたときなさいよ」

そうは言われても、女にしがみつくななんて簡単にできることじゃない。というか、初対面の女性に身体を寄せるなんてこと自体ミクレスにとっては有り得ないことだった。

「あー、もしかして……」

女性はニターッと笑って振り向く。そして、ミクレスの目を変な目で見つめて呟いた。

「いやらしいこと考えてるんじゃないの？」

ミクレスは赤くなる。

「バツバカヤロ！ いやらしいことにならないように遠慮してんだよ！」

そして舌打ちをした。女性はご機嫌で前を向いてこう言った。

「大丈夫大丈夫！ 男に触られる訓練ならちゃんとして受けてるよ！」

どんなことを言われても、ミクレスはしがみつくつもりはない。

そんな頑固なミクレスに、女性は荒業をとることにした。

「もうっ！ほんとシャイな子ね」

女性は超低速で前進するボードを止め、その一瞬、高速でバックさせた。

「うわああ！」

ミクレスの身体は前に吹っ飛んだ。そして、女性の身体にぶち当た

る。女性は視線をミクレスにやってこう言った。

「ふふ、慣性つてこんなとき便利よね！」

そして、女性はボードの前進スイッチを踏んだ。次の瞬間、ボードは高速で前へ進む。次に下降スイッチを押し、ボードは下降前進状態になった。

「さあ！ 降りるわよ！」

ミクレスは女性から離れ、合図とともにその場に飛び降りた。ボードもそのすぐ前で停止する。

そこは、荒野の高台に出来た大きな円形状の広場だった。高台は円柱で、荒野から垂直に立っている。それが見渡す限り広がっており、とても険しい様子だった。実はミクレスも、こんな荒野にやってきたのは初めてで、自然によってこんなに巨大な石の塔ができるのかと思うと驚かされた。

「どこだよ……ここ」

ミクレスは高台の下を見下ろして呟いた。女性は背後から答える。

〈フンスキヤニオン〉

「ここは天なる峡谷。この時代では、ラズナ荒野と呼ばれているわ」

「え……？ この時代って？」

ミクレスは、彼女が何を言ったのか理解できなかった。

ミクレスは振り向き、女性を見つめる。

「どういうことだよ？」

低く少し怖さを感じさせる声だ。

「あーごめんごめん。さっきも言おうとしたんだけど……」

女性は苦笑いを浮かべて頭をかいた。

「あたしね、未来からこの時代にやってきたの」

「……？」

「あはは、やっぱりわかんないか。じゃ、一から説明するね」

CHAPTER 26 : F・I (後書き)

さあーてまた謎がやってまいりました！
次回はF・Iの真実に迫ります。

CHAPTER 27：災厄の覚醒

「人の世には過去と未来が存在する。たとえば、貴方に何か嬉しい思い出があったとするでしょ。でもそれは貴方にとって、過ぎてしまった時のこと。そのことを一般的に『過去』というわ」

女性 F・Iは円形状の広場の周辺に沿って歩いた。

「未来とはその逆。たとえば、これから三国による大戦争が起こるかもしれないわ。でも、それはまだ起こってもいない先の時のこと。そのことを一般的に『未来』という」

そしてミクレスと少し離れたところで立ち止まり、遙か広がる荒野を見渡した。

「なるほど…… ってことは、未来から来たっていうあんたの発言は矛盾していることになるんじゃないか？」

ミクレスはいぶかしげに聞く。

未来から来た、ということとは、彼女からすれば過去に戻った、ということになる。でもそう考えると、いくつもの矛盾が発生する。しかもそれ以前に、過去に後戻りすることなんてできないじゃないか。

「ええ、そうよ。でもね、人の世にはもう一つ、時の流れに関係するものがあるのよ」

F・Iは得意げに答える。

「それは、過去・現在・未来を繋ぐ、『時空』よ」
「……時空？」

また何かよくわからないような言葉が飛び交ってきた、とミクレスは思った。

「そう。時空は、どの時代にもどの世界にも存在する、人間世界とは全く別の異空間のこと。そしてそれは人間世界と密接な関係にあり、強大なエネルギーの凝縮によって両方の空間をこじ開けることができる。さっきも言ったように、時空は過去・現在・未来を繋いでいる空間だから、時空を移動する装置を使えば過去や未来を自由に移動することが出来るのよ」

理解しがたい内容で、でもなんとなく理解することが出来た。

簡単に言うと、時空は過去・現在・未来を自由に行き来できる空間だということ。なんだ、そんな難しい言葉並べなくても一言でまとめられることじゃないか。

「ふーん、それであんたは、時空を移動する装置を使って、この時代に来たと？ いったい何のために……？」

ミクレスはF・Iを見つめた。彼女はミクレスに目もやらず、ただひたすら遠くを眺めていた。

「物事には必ず起源というものがある。たとえば、そうね、貴方が作物を育てようと思ったとき、成長過程において一番最初に当たる部分はなんだと思う？」

そのときF・Iはやっとミクレスに目を向けた。

ミクレスは眉をひそめてから呟く。

「……種を植える？」

「正解よ。種を植えなければ、作物はできない。つまり、種を植える行為自体が、その作物の起源なのよ」

F・Iはミクレスに近づいた。

「つまりね、あたしはこの時代に未来を変えに来たの」

冷たい風が吹き抜ける。

「どういう意味？」

ミクレスは聞いた。F・Iはミクレスの前で立ち止まった。

その質問をすると、F・Iの目が急に悲しくなったような気がした。なんだか無理に微笑みをつくっているような、そんな感じ。

「あたしの住んでいる、つまり、未来の世界はね。ログタントがさつき言っていた、ダーククリスタルが大量に存在しているの」

ついにF・Iの顔から笑みが消えた。

「そのおかげで、あたしたちは皆奴隷。齒向かう者は皆殺され、あたしたちは反対運動を起こす気力も失ったわ。なぜなら、人が死ぬことでダーククリスタルの魔力も増幅してさらに敵の勢力が拡大したからよ」

ミクレスはその話を黙って聞いていた。F・Iはとても悔しそうだった。

「そして、奴隷制度をつくり、各地にダーククリスタルを設け、世界の王として君臨しているのが、カビレッジ・カリアハイムという男」

「……え？」

ミクレスは目を大きく見開いた。

「カリアハイム……って……」

ミクレスは驚愕した。カリアハイムって、かつての親友、ファールック・カリアハイムと同じ名前じゃないか。

いや、でもまだあいつだとは決まったわけじゃない。同名の人物なんていくらでもあるだろう。ミクレスは息を吹いた。

「カビレッジの起源をたどっていくと、この時代に行き着いたわ。そしてちょうどこの時代、初めてダーククリスタルというものが生成されたということもわかった。あたしの直感は外れていなかった。おそらく、あのログタントとかいう組織のリーダーがカビレッジ・カリアハイムの直系。そいつを倒せば、未来は作り直され、あたしたちは奴隷から解放されるわ」

「なるほどな……」

「もう既に、敵の位置は把握できている。ログタントのリーダーがいるところは、このフィアーシル島の中心、^ハ秘境^マと呼ばれているところよ」

もうミクレスは、殆どのが理解できていた。F・Iは奴隷解放のため、この時代にいるカリアハイムの血を絶ち、歴史自体を変えてしまおうというのだろう。なんとも大胆で、危険な行為だろうか。でも、それなら何故、危険を冒してまでミクレスを助けようとしたのか。それだけは疑問だ。

「だいたいわかったよ。でもさ、それが目的なら何故俺を助けたんだ？ もし下手をすれば、あるときあなたは死んでいたんだぞ？」ミクレスは聞いてみることにした。しかし、明瞭な答えは返ってこなかった。

「さあ……なんだか、助けなくちゃいけないような気がして」

そして、F・Iはそこにしゃがみこんだ。相変わらず遠くにある何かを見つめている。

そのとき、ミクレスはあることに気がついた。
「あ、そうだ……スハウたちに伝えておかないと」

ラミネ、フルク、アレイラは少なくとも人質になっている。このことを知っているか否かだけでもだいぶ違うだろう。でも、ラミネにはこのことを伝えるのはあまり気が進まない。ラミネにはちよつとした手紙を送って、人質のことはスホウに伝えることにしよう。

ミクレスは紙を取り出し、地面に紙を置いてその内容諸々を書き始めた。

F・Iは不思議そうに視線を紙に落とす。

「何かいてるの？」

次は身体もこつちに向けた。ミクレスはぶっきらぼうに答える。

「仲間への手紙。さすがに現状を伝えておかないと、マズイだろ？」

「なるほどね……」

F・Iは三角座りでその様子を見つめていた。ミクレスは目をそらして呟く。

「あのさ……その体勢やめてくれないかな……」

少し困ったような声だった。

正直、相手がボトムなだけに目のやり場がない。どうやらF・Iも気付いたようだった。

「ああ、まあ慣れてるからいいよ」

かなり予想外の返答だった。ミクレスは怒りを抑えたように言い返す。

「そついう問題じゃないつーの！……」

やがてミクレスは、スホウ・ラミネ・フルク・アレイラ・そしてフォローガル宛ての手紙を書き終えた。続いてこれを届ける役目だ

が……。

「ラフィーネ!!」

空に向かって叫ぶ。すると、地平線の向こうから黒い影がこちらに向かつて飛んできた。

ミクレスは腕を前に出した。そしてその上に、青い羽毛の鳥が乗る。ミクレスはさっそく手紙を脚に付けた。

「ラフィーネ、これはスホウに、これはラミネに」

と言った感じで指示を与え、最後に頼んだぞと叫ぶと、大空にラフィーネを放ってやった。

「へえ……あんな鳥がいるんだ……」

F・Iは感心していた。やはり、未来の世界はもっと違う伝書の仕方をしているのだろうか。

「この時代ならアレが普通さ」

ミクレスは答える。

ミクレスとF・Iは空の向こうを眺め、ラフィーネが地平線に見えるのを見届けていた。ラフィーネの影はだんだんと黒くなり、やがて点になって地平線の彼方に消えてしまった。ミクレスはふうつと息をつく。しかし、そのときだった。

「クツクツク、良いムードなところ、大変失礼」

この声は、カリドールだ!

二人は咄嗟に振り向き、立ち上がった。

カリドールは片手にガリガリの人間を抱え、冷たい笑みを浮かべていた。

「……どうやってここに……」

ミクレスは呟いた。しかし、聞かなくてもその答えがすぐにわかった。

頭上にはラフェグリフが旋回していた。おそらく、あれにつかまつてここまで来たのだろう。

「なるほどな……」

ミクレスは空を見上げて呟いた。

「いったい何の用？ たった一人じゃ、何もできないんじゃない？」
半ば挑発的にF・Iは言う。

しかしカリドールは、さぞ得意げな表情を浮かべていた。

「一人だと？ それは見当違いじゃないのか？」
逆に挑発的に問い返す。ミクレスは首をかしげた。

F・Iの言ったように、戦えそうな者はカリドール一人。ヤツが抱えているガリガリの男だって、ぐったりしていてもはや相手にもならないはず。まさかラフェグリフを？ いや、そうでもなさそうだ。

カリドールは抱えていた男を落とし、クククと笑った。

「こいつが君たちの対戦相手だ」

カリドールは確かにガリガリの男を指差していた。そして次の瞬間、最悪の事態が起ころうとしていた。

ミクレスはその瞬間、何が起こるのか察知した。

「なっ！ 貴様、やめろ！！」

咄嗟に叫ぶ。しかし、もう遅かった。

カリドールは男の口に、紫色に光る何かを運び、それを食べさせた。

「……くっ！」

「なっなに？ 何が起こるっていつの？」

F・Iはカリドールとミクレスを交互に見て、慌てたように聞いた。

ミクレスは低く唸るような声で呟く。

「逃げる準備をしたほうがいいぞ……」

CHAPTER 27：災厄の覚醒（後書き）

ちなみにF・Iは17歳です！
スタイル抜群です！（笑

CHAPTER 28：ラインズマジック

こちらはラミネ。ミクレスがさらわれてから三日後の話である。

ラミネはスホウに出会い、さっそく修行にはげんでいるところだった。

ここはクラフェータ大草原のど真ん中。ユラユラと若草色の草原がゆれている。

「魔法とは、精神力と念を混合し、それを具現化したものである。よって、魔法弾を創り出すときにはより強く物体を想像することが大切だ」

スホウは剣士ながらも、魔法使いの先生のような教え方で修行を進めていた。

「君も既知しているだろうが、魔法を使用したときは大きな負担が身体にかかる。ならば、どうすれば効率よく戦闘を優位に立てられるのかというと……」

スホウは以前見せた優しい表情はなく、とても真剣で険しい様子だった。

「無駄を無くすこと。これに限る」

ラミネはスホウと向かい合い、スホウの話を真面目に聞いていた。風がヒューヒューと吹きぬけ、髪の毛を揺らす。

天候はくもりで、今にも雨が降り出しそうな状態だった。

「口だけではわかりにくいだろうから、実際にやってみよう」
ラミネはこくと頷いた。

しばらくラミネは指示されるのを待っていたが、スホウは何もする気配がなかった。ある程度待っていると、スホウは「なるほど」と呟き、鋭い目でラミネを見つめた。

「今俺は何回手を挙げた？」

突然の質問に、ラミネはきょとんとした。

「え、挙げてないんじゃないんですか……？」

すぐに答える。だって、彼は一度も動いていなかったし。

スホウは腕組みをして言った。

「今俺は十二回手を挙げた」

「……！？」

ラミネは思わずえっと声を漏らした。言っている事が理解できなかったからだ。

「この速さなら、君は反応することさえ出来ない。つまり言っと、この速さの敵が現れたとき、君は何も出来ないままに殺られてしまうというわけだ」

スホウは目を閉じた。そして、フンと鼻を鳴らした。

「では君は、このときどうする？」

この速さの敵。ラミネは、目にも留まらぬ速さで自分を半殺しにしたレフェードの姿を思い浮かべた。あのときは怒りのあまり、無闇やたらに魔法弾を放ってしまったが、もしも今の冷静さを取り戻していたとしたら、どうする？

答えは一つしかない。こちらが相手に合わせるのではなく、相手

をこちらに合わせさせるのだ。つまり、相手の動きを遅くする魔法をかける。これしかない。

「相手の動きを遅くします」

ラミネは堂々と答えた。スホウは小さく頷く。

「では、時術系魔法を使って、俺が十秒間に何度手を挙げたか数えてみる」

ラミネは言われたとおり、スホウに灰色の魔法弾を放った。スホウはそれを直に受け、よろしいと言う。ラミネは目を凝らしてスホウの動きに注目した。

「……」

十秒間、それはあっという間だ。しかし、その瞬間がとても長く感じられたのは、ラミネだけではない。

「終了だ。では聞く。俺は何度手を挙げた」

「……見えませんでした」

ラミネは残念そうに呟いた。正直、魔法を使ってさえも見えなかったのだ。

「そうか……ちなみに今のは五回だ」

「はい……」

ラミネは許してもらえと思った。そんな自分が甘かった。スホウは、まるでムチを打つかのように怒鳴り声を上げ、怖い顔をして言った。

「全然なっていない！ 無駄が多すぎるのだ！ もう一度やれ！」
以前に話したときと全然違って、ラミネはびっくりした。

ラミネはすぐみあがって動けなくなってしまった。それを見て、スホウは不機嫌そうに近づく。そして、ラミネの前に巨体のごとく聳え立つと、次の瞬間、パチンという音と共にラミネは吹っ飛ばされてしまった。

「きゃあ！」

頬がジンジンと痛む。ラミネは息を呑んだ。

イメージとは全く違う人柄であった。とても厳しく、時には暴力を振るい、できるまで修行をさせる。なるほど、道理でミクレスがあんなに強いわけだ。

ラミネは立ち上がった。優しい修行なんて、もはや修行なんかじゃない。修行というなれば、やはりこれくらいの厳しさがなければ意味が無い。

そしてまた、スホウと向かい合うのであった。

一日が過ぎた。ラミネは、昨日夜の遅くまで修行をして、もう身体はボロボロであった。でもその甲斐あって、スホウの動きを見極められるようになっていた。

スホウは朝日が登ったと同時にラミネを起こし、本日の修行を開始した。

「そうだな……今日は破壊系魔法の修行をしようか」

ここはラフェルフォード西海岸。ラミネに向かって左側には、キラキラと光り輝く大きな海があった。すぐ右にはクラフェータ大草原が広がっており、現在いる地点は砂浜の上だ。

破壊系魔法とは、以前説明したことがある、物体を破壊する魔法のことだ。魔法の中でも一番体力を消費し、中堅クラスの魔法使いでさえ使いこなすことが難しいといわれる魔法だ。

「下級魔法など覚えても仕方ない。できれば提唱による上級魔法を覚えよう。もちろん、習得には多大な時間がかかるし、疲労も半端じゃないはずだ」

「はい！」

ラミネは力強く返事をした。スホウは微笑みながら頷く。

「では、その岩を破壊することを強く想像し、**「クライアライン」**と唱えるんだ」

「そこ」の岩は、スホウと同じくらいの背丈がある、とても硬く頑丈そうな岩だった。表面には塩がこびりついていて、満潮時にはここまで海水が上がるということがわかった。

ラミネは両手を前に出し、岩が砕ける場面を強く想像した。そして次の瞬間、クライアラインという叫び声とともに白い光がラミネの手を包み込んだ。しかし、それは魔法弾に変化することなくポッ

と小さな爆発音を立てて消えていつてしまった。

ラミネはスホウにまた怒鳴られるのかと思った。が、スホウは逆に驚いていた。

「ほー、初めてにしては上出来だな。後もう少しで成功していたぞ？ うんうん」

スホウは腕組みをし、感心したように首を縦に振った。

「はい、頑張ります！」

そんなこんなで、破壊術系魔法の修行は丸一日にも渡った。もうラミネの身体は限界に達していることも知っていながら、スホウはあえてやめさせようとはしなかった。

やがて空は暗く沈み、高々と月が昇った。そのころになると、ラミネは地に身体を伏せて眠ってしまっていた。

「こんな様子を見ると、あいつを思い出してしまうわ……」
眠るラミネの隣で、空を見上げてスホウは呟いた。

「よく怒鳴り蹴りしたもんだよなあミクレスよ」
空に問い掛けるように言った。毎日毎日ミクレスの苦しむ姿を見てきて、だんだんと強くなってくるミクレスの姿を見た。このラミネも、どこか彼に似ている。むしろミクレスよりも、この女のほうが才能があるかもしれない。

スホウは空を見て微笑んでいた。海は青暗く光っており、とても綺麗。また、水平線のギリギリまで続く無数の星一つ一つが燦然と

輝いていた。

スホウは前日と同じく、朝日が昇ったのを確認したときにラミネを起こした。ラミネは目を擦りながら身体を起こす。スホウは立ち上がり、さっそく修行場に向かった。

「さあ今日こそは、この岩を砕いてみせようぞ！」

スホウは高らかに言う。ラミネはピシッと気持ちを切り替えて修行モードになった。

ラミネは目を閉じ、岩が粉碎する場面を完全に頭に描いた。もう頭の中では一つの世界が広がってるかと思うくらい、細かくリアルな想像であった。

そして手を前に出し、全神経を腕に集中した。身体の中で何かが駆け巡る。昨日の疲労もすっかりとれ、何だかいけるような気がしてきた。

手のひらに白い光が集まってきた。だがしかし、ラミネは提唱しない。彼女はどのタイミングで提唱すれば最も効果的か、何度も行ううちにつかんでいたのだ。

「おっ？」

スホウは空を見上げた。その声で気が散ったのか、ラミネの手のひらから光が消えた。ラミネは全身の力が抜けたかのようにその場に座り込む。

「あのバカ弟子の青毛じゃんか」

スホウは微笑んで言う。ラミネも空を見つめた。

すぐ上に、たくさんの手紙を脚に括り付けた鳥が浮遊していた。
ラフィーネだ。ようやく、ミクレスから連絡が届いたのだ。

ラミネは嬉しそうに微笑んだ。ラフィーネはスホウの前で静止し、手紙を外されるのを待った。スホウは急いで紐をほどく。

「一通はラミネ宛てみたいだ。ホレ！」

スホウは手紙を器用にも投げた。それは綺麗にラミネの足元に落ちる。ラミネはそれを拾った。

さっそく中身を開き、内容を読んだ。

「ふうラミネ。元気にしてたか？ ちょっと色々あって、連絡遅くなっただよ、

約束どおりちゃんと届けたからな！

それよりさ、お前修行できてるか？ スホウの修行は厳しいだろ？

まあ死なない程度に頑張れよ。あと、スホウに殴られたら怒鳴り返せよ！ じゃあな」

字はガタガタで、おそらく地面の上で書いたのだと思われる。

ラミネはそれを大事にしまった。ご機嫌そうにふふつと微笑む。しかし、スホウは何やら険しい表情で視線を手紙に落としていた。

「なんだと……？ どういうことだ！」

と、独り言。

何があったのだろうか、ラミネは近づいたが、スホウは辛辣そうにこう言った。

「少し用事ができたようだ。悪いが、ランツの家に行ってくれないか。すぐに行かなければならない」

「あ……はい」

ラミネはポツリと呟いた。スホウはラミネの頭を撫で、二つと笑って言った。

「短い間だったけど、ありがとな！　じゃ、ちょっといつてくるわ」

ラミネはそこで、ただ一人突っ立っていた。

何があったんだろうと不思議に思いながらも、岩に向かって手を伸ばした。

「クライアライン！」

そのとたん、ラミネの手に溢れんばかりの強烈な光が纏わり、次の瞬間、それは魔法弾となって発射されていった。

CHAPTER 28：ラインズマジック（後書き）

もうすぐ三十章です！ いやあ自分でもよくここまで続いたなあと思います。あ、でも、まだまだ続きますよ！ かなりの長編になりそうなので、暖かく見守ってあげてください^^

CHAPTER 29：討伐の独自任務

ミクレスたちの目の前で、信じられないことが起ころうとしていた。

カリドールは、ダークネスフラグメントを飲まされた男から離れた。

男は何かに苦しみ喘ぐ。ウガウガと悲鳴を上げているのもつかの間、男の肉体は真っ青になり、突然変異を始めていた。

「なによ……あれ……」

どうやらF・Iも、ダークネスフラグメントの効力を知るのが始めてだったらしい。見るにも耐えない酷い光景に、二の句がつけない状態に陥った。

ミクレスは背筋が凍りつきそうになった。額に汗が吹き出る。やばい。やばすぎる。かつて雪山で出会ったときに感じた恐怖より、さらに大きな恐怖に駆られた感じだった。

男は、もはや人間の原型さえも失い、二メートル以上の醜い怪物へと変化した。あばら骨が胸から飛び出ており、その中は真っ暗になっている。髪は全て脱毛し、血管のようなものが浮き出た頭だけになってしまった。腕や脚は、さきほどの男の六・七倍は太くなっており、今にもはちきれてしまいそうなほどの筋肉へと膨れ上がっていた。背中からはヌルヌルしてそうな触手が何本も蠢いており、とても見るに耐えない。顔は、瞳が消えた目と、大きな牙、浮き出た血管が特徴だ。その全てがもはやこの世のものとは思えないほどの異常さで、一言で言えば、**「魔人」**だった。

「ククク、フハハハハハハハ！！　どうだ！　見たか、これこそダークネスフラグメントの力だ！」

カリドールは高らかに笑う。今の彼は、正真正銘の悪魔だった。

ミクレスは剣を抜こうと腰に手を触れた。しかし

「ちっ、あいつらに奪われたままだったぜ……」

そう、捕まった際にログタントから奪われたままで、取り返すのを忘れていたのだ。もちろん、短剣や懐剣なども根こそぎ奪われており、もう戦えるものなど何も無かった。

「逃げるぞ！　F・I！」

ミクレスは慌てて叫んだ。F・Iははっと気がついて、「ええ」と小さく言った。

F・Iはスカイボードを取り出し、崖の外に投げようとした。しかし

「えっ！？」

何かがボードにぶつかり、ガンという音と共に、F・Iはスカイボードを落としてしまった。

スカイボードはひっくり返り、そのまま荒野へと落下していつてしまった。どうやら、反対向きだと浮かないようだ。F・Iは悔しそうに振り向き、カリドールを睨んだ。

「フフフ、逃がしはしないよ。特にその女、私たちの秘密を知

ってただで帰れると思っっているのかね？」

低く冷たい声。その言葉には、殺すという意味が暗示されていた。

F・Iは拳銃を抜いた。まずはカリドール。ヤツを倒さねば、後々厄介である。

カリドールはわざとらしく大笑いした。

「ハハハハハハハハ！ そんな子供だまし、私には通用しな

」

そのとき、カリドールの皮肉っぽい言葉が留まった。

次の瞬間、カリドールの脆弱な肉体は、変化した魔人の腕の下敷きになっていた。

「……………！？」

ミクレスとF・Iは息を呑んだ。どうやらこの魔人は、敵と味方の区別がつかないらしい。

カリドールを下敷きにしたその腕の下にある地面は、大きくへこみ、そして亀裂が走っていた。さすがダークネスフラグメントの力だ。たかが岩盤くらい、ただの脆い塊なのだ。

「おいおい、どうするんだよ……………さすがにあんなの倒せそうにねえぞ？」

ミクレスは焦って呟く。F・Iも恐怖に震えていた。

カリドールは起き上がることはなかった。この戦いでの第一の戦死者はカリドールだった。

F・Iは咄嗟にバズーカ砲を取り出した。そして魔人に狙いを定め、耳をつんざく爆音とともに、ミサイルを発射した。

天に昇るのではないか、と思わされるくらいの煙が舞い上がった。ミクレスはこの光景に見覚えがあった。

「あ……セレディーの……あれ、あんただったのか？」

セレディーで、ミクレスが魔獣に殺されかけたときも、似たような爆発のおかげで無事助かることが出来た。あのときも同じように、もの凄く黒く、火を伴った煙が舞い上がっていたような記憶がある。

「セレディー？……ああ！ あときは、ナイス援護射撃だったでしょう？」

意気揚々と呟く。しかし、安心していられる暇もなかった。

大煙の中から、魔人の影が現れた。どうやら全く効いていないらしい。

「でも、あのときもあんなふうに、化け物には通用しなかったわよね……」

今度の敵は、傷一つついていなかった。首をボキボキ鳴らし、ピンピンした様子で近づいてくる。

「こりゃ倒せませんわ……どうする？ 諦めて殺されちゃう？」

「バカを言っな！ なんとかして逃げるに決まってるだろ」

ミクレスは広場の周辺部を駆け出した。どこか降りれそうな岩棚があれば、そこから抜け出すことができる。崖下ばかりに注意を払っていた、そのときだった。

「なっ！！」

ミクレスの眼前に、青白い巨体が現れた。

「やつ！ ちっ！」

ミクレスは後ろへ跳んで攻撃をかわした。

巨体は黒色の爪をピンと立てた。腕には血管がビキビキと浮き出、次の瞬間、その搾取に見舞われることになった。

「わわっ！」

巨体は爪による高速の攻撃を繰り返してきた。それは、全てが突き。そしてその全てが地面に突き刺さり、地面は粉々に砕かれていった。

ミクレスはかわすのがやっとだった。服が爪によってボロボロに破られ、ところどころに傷を負う。

「マズイわ……あのままじゃ、あの子……」

そのとき、F・Iはついにアレを使うことを決心した。

背負っていたバッグの中から、折りたたみ式の変な銃を取り出した。それは、バズーカに勝るとも劣らずの大きさの銃で、先端になるほど銃口が大きくなっていくという形状になっている。F・Iはすばやく弾を詰め込み、暴れる怪物に視点を合わせた。

「ミクレス！ 離れて！」

F・Iの叫び声が聞こえた。ミクレスは凄まじい連打の中、なんとかスキをつくって敵の股下にもぐりこみ、そのまま魔人の背後へと抜けた。

「今だ！ やれ！」

ミクレスは叫んだ。そして、できるだけ被害を抑えようと魔人から離れた。

次の瞬間、ボンという音と共に高速のミサイルが魔人へと直撃した。

爆発はバズーカより凄まじいものであった。魔人の身体は宙に浮き、それに追い討ちをかけるかのように二度目の爆発をする。さらに地面に着地した後、三度目の爆発を起こした。

これはさすがに効いただろう！ ミクレスは急いでF・Iのもとへと近づいた。

「何をやった？」

「特注品の拡散型榴弾銃よ。たった一つの弾丸で五発は爆発するわ」ミクレスの質問に答えながらも、F・Iは次の攻撃の準備をしていた。また銃に弾を詰め込み、標的を捉える。

魔人はよろよると立ち上がった。

「ウガアアアアアアアア！」

耳をつんざくような雄たけび。しかし、F・Iの攻撃によって遮ら

れてしまった。

「あんなクズ野郎、倒してやるわ！ ミクレス、あんたも手伝いなさい！」

「お、おう！」

向こうでは何度も爆発が起こっている。魔人には、確実にダメージを与えていた。

ミクレスは大きなバズーカを手渡された。というか、使い方もわからないのにどうしろというのだ。

「おい、これどうやって使うんだ？」

「それは五発くらい連続で打てるから！ そのまま引き金を引けば発射するよ！」

そしてF・Iの三度目の攻撃。また爆発が拡散する。

ミクレスは言われたとおり、起き上がる魔人に視点を合わせ、思い切り引き金を引いた。

ボンという音と共に、バズーカから何かが発射されたのを感じた。反動で吹っ飛びそうになる。

「よし、もう少ししょ！」

F・Iの言うとおり、魔人はもう立ち上がるだけで精一杯のようだった。足が震え、よろけふためいている。F・Iはとどめの一発といわんばかりに、最後の弾丸を発射した。

弾丸は魔人に向かって直進していった。そして、当たったかと思うものの凄い爆風と煙を引き起こして爆発する。大きな爆発とともに、魔人は宙に浮き、またその途中で爆発した。最後に地面についたあと、今までで最高かと思われるような爆発を引き起こした。

高台の表面はボコボコであった。ところどころで穴があき、地表が陥没したり砕けたりしている。そんな中、F・Iはハッと笑った。

「ふう……なんとか片付いたわね」

F・Iはため息をつく、拡散銃をバッグへと直し始めた。

「ほんとにやったのか……？」

煙が上がっていてよく見えない。でも、F・Iが言うのなら本当なのだろう。

ミクレスは安心したようにその場に座り込んだ。

「まったく、もう死ぬかと思ったよ」

死闘の末に、決まって口にするこの言葉。でも、本当に死ぬかと思っただ。

F・Iも疲れたように腰を下ろした。

「ほんとに……こんなにヒヤヒヤしたのは何年ぶりかしら」

F・Iはまた三角座りをしていた。ミクレスは目をそらして注意す

る。

「どうしてもいけど、その体勢やめろって!」

「はっ!？なんであんなとこばっかり見てんの?」

「……っ」

なんであんなとこばっかり見てんの?そんなことを言いながらにやけているF・Iに、呆れてものも言っ気になれなかった。

CHAPTER 29：討伐の独自任務（後書き）

何はともあれ、討伐できたんだからいいんじゃないですか

それにしてもバズーカなんて大胆なモノ使いますよねえ……しかも
バズーカが効かなかったなんて、どんだけえー^^；

次回、いよいよ三国の戦争が始まります……

CHAPTER 30：開幕の時

「とりあえず……どうやってここから降りるかだよ……」
ミクレスは崖下を覗き込んだ。あまりの高さにめまいがしそうになる。

「それならコレを使えば良いんじゃない？」

F・Iが陽気な声で言う。ミクレスは、F・Iがしっかりと握る鎖に目をやった。

F・Iはミクレスの隣に並び、鎖を思い切り振り下ろした。ジジジという鎖が擦れ合う音と共に、鎖は勢いよく直進し、やがて地面に突き刺さる。F・Iは鎖を持ちながらミクレスに言った。

「あんた先に行きなさいよ」

何故か命令形。ミクレスは変な顔をして首をかしげた。

「ん、なんで？」

ミクレスが問い返すと、F・Iはからかうような笑みを浮かべて言った。

「だって、あんたが下なら、上にいるあたしの」

途中までも、何が言いたいのかわからなかった。

「死ね」

くだらないと言いたげに流す。

（まったく、この女、俺をどこかの女たらしさんと勘違いしてるんじゃないか？）

「もっと素直になったほうがいいんじゃないの？」

（ていうかコイツがたらしだな。男たらし。女たらしと男たらしな
ら気が合うかな……）

「今度お前に相性よさそうな男紹介してやるよ」

ミクレスは苦笑して言った。

「それはどうも」

次は真面目だ。

「つーか、降りるんじゃないかって下に落としたスカイボード拾った
ほうが早いんじゃない？」

そしてF・Iの目を見つめる。F・Iも、なるほど、と納得して鎖
を引き寄せ始めた。

こんなとき彼女は、余計な言葉を付け加える。

「でもさ、あんたにとっては、降りたほうが嬉しかったよね」

「嬉しかった」という表現が逆に腹が立つ。ミクレスは返事もせず
鎖を見つめていた。

鎖は、手繰り寄せているのではなく、縮んでいつているので、す
ぐにF・Iの手元に収まった。

次にスカイボードをつかまえるのだが……ここからだスカイボ
ードがどこに落ちているのかよく見えない。

「確か……このへんで落としたよね……」

ミクレスは崖下を見下ろして呟く。

「そうね……でも、ここからじゃよく見えないわ」

考え込むミクレスを横に、F・Iは無邪気な子供のような声で言

った。

「そんなときにコレの出番よ！ ジャジャーン！ 双眼鏡！」

しかし、ミクレスにとっては初めて見るもの。

「ん？なにそれ？」

不思議そうに聞く。しかし、F・Iは舌を出してベーっと言った。

「いちいち説明するの面倒くさいわ」

ミクレスはむっとする。

「同感。俺も説明聞くの面倒くさい」

ミクレスは淡々とした口調で呟いた。F・Iは気にせず双眼鏡に目を通した。

「ふーん、あそこか……」

F・Iはスカイボードを見つけ、次に双眼鏡と肉眼とでその位置を見比べた。そして、なんとなく位置を把握した後、双眼鏡を直し、思い切り鎖を振り下ろした。

「さすが未来の道具だな」

「いえ、こんなものくらいなら数十年後に開発されるはずよ」

（数十年経ってもこんな腐ったものしか開発されないなんて、俺が生きてる間は期待できないな）

ミクレスははあっとため息をついた。

「ん……どうやらヒットしたみたいよ」

F・Iは微笑みながら言う。

「後はこれを引けば……」

鎖は勢いよく縮んでいった。ミクレスも軽く引つ張り挙げる鎖、スカイボードくらい何ら苦でもないだろう。

やがてスカイボードは引き上げられた。

「へえー。この高さから落ちても傷一つつかないんだな」

ミクレスが感心したように言う。

スカイボードは壊れている様子もなく、むしろ傷の一つさえもついていない状態だった。しかし、F・Iはそれを見て困ったように言う。

「あーあ、サブエンジンがぶっ壊れちゃってるわ。こりゃ長く飛べそうに無いわね」

見た目は大丈夫でも、中身は壊れている。当然、そんなことミクレスにわかるはずもなかった。

「どこが悪いのか？」

心配そうにミクレスは聞く。もし飛べないとなると、歩いて帰らなければならぬじゃないか。

「うーん、メインエンジンは大丈夫みたいだから、多分問題ないと思うけど……」

「長く飛べそうもないのに問題ないのか？」

「ええ。とりあえず、時空移動装置のあるところまでいければ……」

ミクレスは相槌を打った。とりあえず、未来の機械のことを言われてもわからない。

ミクレスはなんとなく崖下に視線を落とす。そのとき、ミクレスの顔が歪んだ。

「何だ……あれ？」

「ん？」

F・Iも同様に崖下を見つめた。

「なんだろうね……ここからじゃよく見えないわ」

崖下には、さっきはなかった黒い物体が群れを成してうじゃうじ

やっていた。しかし、やはりこの高さからではそれが何なのかわからない。二人は不思議そうにそれを見つめた。

と、そのときF・Iは双眼鏡と呼ばれるものに目を当て、その様子を眺めた。

「へえゝなるほどね！」

何故か微笑んでいた。

「何が見える？」

ミクレスは一瞬F・Iに視線を移して聞いた。

「アレは魔法国軍だね。あーあ、もうすぐフィアーシル史上最悪の大戦争が始まるわ」

F・Iはなんだか愉快そうに答える。続いてミクレスは呆れたように言った。

「あれが魔法国軍？ まるでアリの群れだな」

ミクレスはフンと鼻を鳴らした。

「冗談言っている場合じゃなさそうだ。早く行こう」

「ええ、わかったわ」

二人は視線を合わせてから、スカイボードに乗った。

一方、帝国軍では。

「キャ、キャリオル様ー！ ようやく、北西部との連絡がとれましたー！」

下級兵士の叫び声。キャリオルはニヤッと笑った。

「フフフ、フハハハハハハハハハハハハ！ ついにこのときが来たか！」

冷たい表情。怖い声。

「ガメイン、北西部に出撃命令の書状を送れ！ ロッド、今すぐホワイトホースの用意をしろ！ 豚野郎、ブラッドグリフ部隊の準備だ！」

「はっ……しかし、キャリオル様……」

下級兵士は恐る恐る顔を上げる。しかし、キャリオルの冷たい目が兵士を襲った。

「何だ？」

兵士はすくみあがった。

「いえ……何も……」

キャリオルはフンと鼻を鳴らし、したり顔で剣を抜いた。

「歯向かう者は全員ぶっ殺せ！ 帝国軍の真の恐ろしさを思い知らせてやるのだ！！」

フハハハハハ アツハハハハハハハハハハハハハハハハ

」

こちらはラブレイズ第六天の二人。

「ようやくリンディアも、次いではカイレトランも進撃を開始したようだぞ」

フォローガルは苦笑いを浮かべ、二刀の剣を抜いた。

「意外と早かったですね。私たちの初期配置が大きく狂わされました」

「なーに、心配はいらん。このまま帝国軍に直行すればいいのだから」

地平線の先には、何十万ともいえる大群の姿が見えた。フォローガルたちはたった二人でそれに向かって進行していた。

シズは冷や汗を流しながら呟く。

「やれやれ、アレをどうにかしようなんて、少し頭を冷やしたほうがいいですよ」

フォローガルも今回は焦っていた。

「そうだな……死ぬ気でいかねば……な」

こちらはセレディー大雪山。

「ガムラス様！ 矢雨やぐめの準備は整っております」

「ふむ、そうか。……敵はどのあたりまで来ている？」

ここは、セレディーの山頂部。以前ミクレスたちが倒した、あの魔獣が塞いでいた山の奥にあたるところである。

弓兵は敬礼をしながら答えた。

「はい、カイレトランはもう姿が見えてきております。リンディアのほうは、ちょうどラズナ荒野の峡谷を使って静かに進行している模様です」

「ふむ……そうか……」

ガムラスは厳かな顔を、よりいっそう険しくしてささやいた。

「とうとう伝説邂逅というわけか」

そして、大きく息を吸ってから、雪山全土に響き渡るような大声で指示を与えた。

「ものども配置につけー！ ラフェルフォードを援護するのだー！
」

こちらはログタント。

傷だらけのキラは、嘲笑して言った。

「カリドールが死んだよ。ほんと無様な死に方だった！　アハハハ！」

「えー、カリドール死んじゃったのー？　アンラッキーアンラッキー」

青い毛皮の男が無邪気に騒ぐ。キラはざまーみろと言いたげに呟いた。

「調子に乗ってるから死んだのよ！　むしろベリーラッキー！」

それを聞いていたレフェードは、目を閉じながら得意げに言う。

「俺もそろそろ行かなくちゃな……なんか楽しいことになってきた

」　ゾクゾク」

レフェードはケラケラと笑う。

そんなとき、手紙を見つめていた法衣の女が、頷いて言った。

「ねえ、みんな。我がリーダーから直々の命令があったよ」

そこで法衣の女は顔を上げる。そして、かつてないほどの冷笑を見せてこう叫んだ。

「闇の軍隊を始動せよ！　と！」

CHAPTER 30：開幕の時（後書き）

三国の大戦争、ついに開戦！

果たしてログタントの言うダークフォースとはいったい何なのでしょうか？

人類の運命をかけた、最終決戦！

CHAPTER 31：伝説の大戦争

「リンディアが見えたぞー！ ものども！ つづけー！ー！ー！」
ラフェルフォード王国軍兵士長を戦闘にして、群れを成すリンディア魔法国軍に特攻していった。

「ウリヤアアアアアアアアアア！ー！」

リンディアが動揺している瞬間に、兵士たちは敵を切り裂く。
「うわあああああああ！」

悲鳴、血しぶき、死体

そのとき、リンディアの中から一筋の閃光が放射状に広がり、ラフェルフォード王国軍を一掃した。

「ウフフフフ！ あんまり調子に乗らないことね！」

ラウクは嘲笑した。

「っ！ー！」

そのとき、頭上から無数の矢の雨が降ってきた。

「うわああああ！」

「ぎゃあああ！」

「ぐがはあ！」

次々に魔法使いが倒れていく。ラウクはそれを紙一重でかわした。

「くっ！ 袋のねずみというわけか……」

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

すぐ目の前に敵の大群が見える。全員が大声を上げて進行していた。

「さて、血祭りの始まりだ！」

フォローガルの剣が太陽の光を反射したと思えば、敵軍第一線の一角が乱れた。

「うわああああああああああ！」

兵士たちは驚いて後ずさる。シズはそのスキを逃さなかった。

「この戦争を通して、恐怖というものを痛感しなさい」

「ぐあああああ！」

「あああああああああ！」

「シズよ。さすがに援護なしではこれはきついぞ……」

「ええ、いくらなんでも数が多すぎます」

二人の額に汗が吹き出た。しかし、そのときだった。

「うわあ！」

「あああっ！」

「ぐはあ！」

敵兵の胸に、数本の矢が刺さった。二人は咄嗟に振り向く。

空を見ると、何千、いや、何万もの矢の雨がこちらに向かって飛

んできていた。

フォローガルは微笑みを浮かべ、セレディーに向かって大声で叫んだ。

「アクスラ機関よ、感謝するぞ！」

「おいおい、なんだあの軍隊は？ ……おわつと」

フルクはブラッドグリフに乗る弓兵の攻撃をかわした。

「クソッ、雑魚だと思ってナメやがって！」

そして、フルクは一本の鋭い矢を放った。

「大命中ー！」

思わずご機嫌でそういうが、空を埋め尽くすほどの敵の多さに、彼は笑みを失ってしまった。

「なんだよコレよ……打っても打ってもヘラねえんじゃねえのか？」

「相手が弓ならこちらは魔法だ。さあ、デッドソーサラーたちよ、今こそ君たちの力を見せるときぞ」

ヴィランティアは微笑んで言う。デッドソーサラーたちはラズナ荒野の手前から空に向かって手を挙げた。

「プラットライン」

「プラットライン」

「プラットライン」

デッドソーサラーたちは口々にいい、次々に白い魔法弾が荒野を越えていった。

「おーい！　なんか飛んできたぞー！」

「た、隊長！　危ない！」

「あああああああああああ！！！」

しかし、もう遅かった。白い魔法弾は隊長の身体を貫通し、地面さえも粉々に破壊していた。

兵士たちの間にどよめきが走り、後ずさってしまった。

先頭に立っていた下級兵士が勇気を振り絞って叫ぶ。

「おーい！ あの白い光には注意しろー！ー！！」

「マズイな……やはり数だけはいか……」
斬っても斬っても一向に減る様子も無い敵軍に、フォローガルは苦しそうな表情を浮かべた。

そして、近づいてきた兵士を切り裂く。

「ああああ！」
兵士の悲鳴。

「というか、いつの間にか囲まれていますね……」
シズは息を切らしながら言った。

敵を切ることに集中して、あまり気にも留めていなかったが、二人は帝国敵軍の軍勢に囲まれていた。
フォローガルはため息をついて言う。

「へっ……そろそろ年貢の納め時というやつか？」

「バカなことば言わないでください。私はまだ死にたくないですよ」

ラフェルフォード城には、もう既にブラッドグリフ部隊が着陸し、敵部隊が進入を始めていた。

「クソ鳥部隊だけでも敵数が多すぎるな」

もう城の中は敵だらけ。城下町も荒れたい放題であった。至るところで死体が見つかり、至るところから悲鳴が聞こえる。その一つが耳に障った。

次から次へとやってくるブラッドグリフ部隊に、フルクとアレイラは焦りを見せ始めていた。

「フルク！」

アレイラはフルクに剣を投げつけた。それはフルクの頬を通り過ぎて背後の敵に突き刺さる。

「センキュー！ アレイラ」

フルクはウィンクしてアレイラに礼を言った。

「どういたしまして！ おっと」

「これでは帝国軍に攻められてばかりだな。よし……暇つぶしにアレを使うか」

ヴィランティアはそう言うと、デッドソーサラーたちの背後から風術系魔法を使い、遙か上空へと飛び上がった。

前方には荒野と、大きな雪山と、敵軍が湧く帝国領土が見えた。雲がすぐ近くある。ヴィランティアは咄嗟に両手を上げ、何かを唱えた。

そしてヴィランティアの手のひらの上に、巨大な丸い光の弾が現れた。

「フッフ、これはプレゼントだ!!」

そして、思い切り腕を振り下ろした。次の瞬間、弾は帝国軍敵勢の中を這いずりまわり、数秒後に何千人を巻き込む超大爆発が巻き起こった。

敵軍の中に大きな穴があいた。ヴィランティアはその場で高らかに笑った。

「あーあ、これを出撃させるなんて、リーダーもやることがエグイんだよな」
青い毛皮の男が言う。

法衣の女は、とても興奮している様子だった。

「ウフフフフ、世界の破滅が手に取るようにわかるわ！ さあ、早く放出しましょう」

そして歯をギラギラ輝かせながら笑う。キラはやれやれと言った感じでそれをなだめた。

「はいはい、慌てない慌てない。……今解放するか」

バーン！！

「はっ！？」

「あーあ、檻の強度が足りなかったね。血のにおいを嗅ぎつけて暴れだした」

ダークフォースを取り押さえていた檻が、ダークフォース自らの手で打ち破られた。

そして、中からとんでもないほどの数の、黒い魔獣たちがあふれ出してきた。

「まあいいわ。もう放っておきましょう」

ついに、史上最悪にして最強の、ダークフォースが放たれた。

CHAPTER 31：伝説の大戦争（後書き）

もう場面がグチャグチャです。

CHAPTER 32：ダークフォース

「人の死とは実におもしろい……やはり、争いの世とはいいものだ」

キャリオルは王座に座り、不敵の笑みを浮かべて言う。

そのときだった。王の間へヌケヌケと入ってきて、帝王の名を呼ぶ下級兵士が現れたのは。

「キャ、キャリオル様ー!!」

酷く震えた声だ。こういう臆病者をからかうのも、キャリオルの趣味である。

「なんだ騒々しい。王の間では静かにするものだ」

「はっ……申し訳ございません！それが、北東部より、黒い獣のような群れが新ディンブルを襲っているという情報が入りまして……」

「何を言う？ 下手なデマカセはよせ。敵勢は全て、国境に集中しているのだぞ？」

キャリオルはひざまずく兵士を、今すぐ殺してしまいそうな鋭い目で見つめた。

兵士はヒィッと声を上げ、ぶるぶると震えだした。

しかし、そのときだった。

ドーン……!!

「っ！！？」

もの凄い音とともに、カイレトラン城が激しく揺れた。キャリオルは驚いて立ち上がる。そしてそのとき、王座の後ろにあったバルコニーへの窓が突き破られた。

パリン！

「キャシャアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「ガルウウウウウー！！！」

二匹の黒い魔獣の泣き声。キャリオルは目を丸くしてその醜い姿を見つめていた。

一匹はカマキリともいえない姿の巨大な黒い虫。もう一匹はまるでオオカミを巨大化し、それに翼を生やしたような奇妙な黒い獣。どちらも顔が歪み狂っていて、さらにドロドロとした液体を口から吐き出していた。

「ガアアアアアアアア！！！」

オオカミのような魔獣は、近くにあった王座を殴り飛ばした。キャリオルはしゃがんでかわす。

しかし、その怪力だけでこの魔物たちがどれだけ危険かを思い知ることができた。

「クッ！ 調子に乗るなよカス野郎！」

キャリオルは構わず剣を抜き、オオカミのような魔獣に切りかかった。

キンッ！！

「っ!？」

剣は見事に弾かれた。あまりの驚きに我を忘れ、床にしりもちをついてしまった。

「剣が……効かないだと……?」

その瞬間、近くにいた兵士たちがわれ先にと逃げ出した。扉のほうでは、下級兵士たちが群れている。キャリオルはもう一度魔獣と対峙し、剣を向けた。

ミクレスたちは空を飛んでいた。風が身体いっぱい吹きあたり、身体が持つていかれそうになる。もう文句を言ってもいらねず、ミクレスはF・Iにしがみついていた。

「おい、あれなんだよ?」

ミクレスは帝国軍のほうを指差して呟く。帝国では、敵軍が群れを成して進撃しているが、その背後から何やら変な物体と空を飛ぶ何かがこちらへ向かって進行していた。

F・Iはいったんそこにスカイボードを止め、双眼鏡を取り出してそれを見た。

「どれどれ……」

最初は微笑みを浮かべて、趣深そうにそれを見つめていたが、やがて双眼鏡を離れたときの彼女の目は、ただ恐怖に引きつっていた。

「まずいわ…… ログタントが言っていた、ダークフォースが動き出したのよ!!」

「はっ? なんだそれ……」

F・Iは、ログタントの基地のようなところにいたとき、パイプの上からログタントの会議を聞いていた。そのとき確かに、ダークフォースという言葉聞いたのだ。

しかしミクレスは遠くにいたため、その会話を聞いていない。F・Iは、真剣な表情で説明を始めた。

「ダークフォース…… 闇の軍隊…… おそらく、世界を支配するための、最強の切り札よ」

「どういうことだよ」
「つまり、ダークネスフラグメントを食べさせた魔物たちの軍団つてことよ!!」

F・Iは声を荒げて言う。ミクレスは目を丸くし、そして双眼鏡を取り上げた。

「おいおい…… そんなのってアリかよ……」

この数ヶ月で、嫌というほどダークネスフラグメントの恐ろしさを思い知らされてきた。そして、そのたびに何度も死ぬかと思っただがしかし、今回ほど最悪の状況でもない。ミクレスの目に映ったもの。それは、ダークフォースという名の災厄であった。

「どうすればアレを止められる!? なぁ! どうすれば」

「ダーククリスタルを破壊するのよ……」

F・Iはミクレスの言葉を遮って言った。

「ダーククリスタルを破壊すれば、魔物たちは力を失って、その場で消滅するはずよ！」

「なるほどな……そのダーククリスタルってのは、どこにある？」

「きつと島の中心。『秘境』と呼ばれる」

「さっそく行くぞ！」

ミクレスは急かして言った。しかし、F・Iは首を横に振った。

「先に時空移動装置のところに行くのよ！ そこにある残りのスライボードを使って、仲間をつれてから行くのよ！ 今行けばきつとやられるわ。あたしだって、もう弾は残ってないしね」

「だったら急いでそこに行くぞ！ 時間がない。さあ！」

ミクレスは促した。F・Iは頷く。

そして、前進スイッチを強く踏んだ。

「シズよ……わしは幻覚を見ているのか？ 敵の背後で、同じく

敵が宙に浮いているのだが……」

フォローガルはその光景を見つめて言った。

幻覚ではなかった。その現象は、確かに現実起こっている。敵が空高く突き上げられ、数々の悲鳴が聞こえる現象は、確かに起こっていた。

「うわあああああああー！」

「ぎゃあああああああああ!!」

「なんだあれ!! ああああああああああ!!」
「にげるおおお!!」

もはやフォローガルたちの姿など忘れ、敵は将棋倒しになりながらもセレディーへと駆け出していった。

やがてたくさんの敵兵の向こうから、巨大な黒い影が現れた。

「あれは……いったいなんだ？」

「さあ……新手的騎馬隊でしょうかね？」

フォローガルとシズはその巨体を見上げた。高く、厚い肉質を持つていて、顔は歪んでいて醜い。全身は漆黒に染まっており、ところどころに触手が蠢いていた。

「どうします？ これ、とんでもなくやばそうですね？」

「うーん、そもそもこれは動物なのか？」

そんなことを言っているとき、黒い魔獣は巨大な腕を振り上げ、フォローガルめがけて振り下ろした。

「っ!!」

フォローガルは後ろへ大きく跳び、なんとかそれをかわした。

フォローガルのいた地面が、大きく陥没し亀裂が走っていた。

「……逃げたほうがよさそうだな……」

「はい、そうしましょう」

「さて……私たちもそろそろ、参戦させてもらいますか！」

法衣の女は言う。キラと青い毛皮の男も頷いた。

「レフェードはリンディアに行ったから、ルヴァイス、あんたはラフェルフォードをよろしく！」

キラはしたり顔で言う。青い毛皮の男　ルヴァイスは小さく頷いた。

「やっとな殺れるんだー！　ラッキーラッキー」

ルヴァイスは、ラッキーとアンラッキーの言葉を使うことが多く、口調は子供っぽい。しかし、性格は恐ろしく、人を殺すことに何の躊躇いも持たないといった非道な性格を持ち合わせている。

「ティアマ、あんたはどうする？」

ティアマと呼ばれた法衣の女は、ニヤニヤと笑って答えた。

「そうね。私はヴィランティア様に相手してもらおうかしら」

「じゃ私は生き残った帝国軍を掃除しにかかるか」

ロゲタント、出撃

CHAPTER 32：ダークフォース（後書き）

もうファイアーシル島はグチャグチャになっています。

とどころで戦乱が起こり、もう何が何だかです！

そして次回、二部最終回となります！是非お楽しみください！

THE FINAL：最強の指導者

スホウはパードラグリフにつかまり、島の中心へと向かっていた。

あたりは白い霧に包まれ、とても空気が薄かった。風はなく、でもどこかひんやりと寒い。空気は湿っていて、しっとりとした空気がスホウを包み込んでいた。

しかし、どうやらスホウは「秘境」の位置を把握しているみたいだった。迷うことなくただ一点を目掛けてパードラグリフを誘導している。先に進むことに彼の表情は険しくなり、そして哀しくなった。

「ここに来るのは久しぶりだな」

スホウがそう言った瞬間、あたりの霧は一気に晴れ、そこに大きな草原が現れた。

そこは山頂が円形にくぼんだようなところで、とても寂しげな霧囲気を醸し出している、スホウの思い出の場所である。そこに生えそむる草は全て青緑色で、草丈は地面を隠すくらい。大きくもなく小さくないくらいだ。

「いつになっても変わらないな……」

スホウは懐かしそうに言った。パードラグリフから手を離し、草原に降り立つ。そして、眼前で紫色に光る大きなクリスタルに向かい合った。

クリスタルはいかにも人々の闇を蓄積したような、菖蒲色の蒸気

を空に放出していた。そしてそれを守る番人かのように、クリスタルに腰掛ける一人の男がいた。

「やはりお前がやっていたのか……まさか、こんな形で再開するとはな……」

スホウは哀しそうに呟いた。そして目を閉じる。

腰掛けていた男は、クリスタルから離れ、スホウに向かって歩き出した。

「久しぶりですね……お父さん」

銀髪で、顔立ちは良く、身体も細い。黒い麻の服に、黒いボロボロのマントを羽織って、腰にはイカツイ形状の剣を掛けていた。切なく寂しい紅い瞳は、彼独特の雰囲気醸し出す特徴であった。

「長いこと見ない間にたくましく成長したな」

スホウは微笑んで言う。銀髪の少年は軽く会釈した。

「おかげさまで」

銀髪の少年は、とても礼儀正しく、堂々としていた。スホウはそれを見て、とても嬉しそうに、でもどこか悲しげに感じていた。

「お父さんな……寂しかったんだ」

スホウは静かに口を開いた。

「お前がよ、こんな大騒動を引き起こした元凶だって聞いてよ……」

そして険しい顔に戻る。

「心の中から、許せないと思ったんだよ！」

威厳のある声。鋭い目。全てはわが子に対する怒りから来るものであった。

銀髪の少年は低く笑った。スホウは少年を睨む。

「俺は責任を持ってお前を倒させもらうぜ、ファールックよ」

修行のときでも、お喋りをしているときでも、怒ったときでも、決して見せなかった心の怒り。スホウは身体から威圧のオーラを出し、銀髪の少年に立ちはだかった。

「いいよ、やってみなよ」

少年は二つと笑って言う。

次の瞬間、スホウは剣を抜いて駆け出した！

THE FINAL：最強の指導者（後書き）

今まで誰にも言わず、ずっと隠してきた親子関係。

共に修行をした思い出の場所で、フィアール島の未来をかけた最終決戦が幕を開ける。

第二部はここで完結なので、できれば感想・評価等お願いします！

MESSAGE：作者より（2）

第二部が完結いたしました！ご愛読ありがとうございます！

相変わらず微妙なところで終わりました（笑）

第三部は物語の最後でございます。

ということで、最後の章は「THE FINAL」ではなく「STORY OF END」という形で表します！

* * * *

わかりにくい表現が多々あったと思います。なにしろ、表現が難しくて……（汗）

どうしてもわからないというのであれば、メッセージをお送りください。

* * * *

できれば感想・評価・アドバイス等お願いいたします。

まだ第三部が控えていますが一作品としてよりよいものにするためには

やはり読者様のご指摘が最適だと思います。

もちろん私自身も努力致しますが、できればご協力いただければと思います。

あ、普通に「おもしろかった」等の感想でも大歓迎ですよ！

* * *

さてここからは第三部についてとなります。

第三部はもちろん戦いをメインとして作り上げていく予定ですが、

その中でも「大切なこと」を伝えていきたいと思います。

ちなみに第三部は、「THE FINAL」をCHAPTER34として、「CHAPTER35」からの開始となります。

そこまで詳しいストーリーにするつもりはないので、主人公たちの居場所と、

スホウ・フローガル・シズ・キャリオル・ファールック、このあたりのキャラクターの

居場所と状況の確認だけしておけば比較的読みやすいことかと思われます。

* * * *

では続いて「CHAPTER35：緊急避難命令」よりお楽しみください！

MESSAGE：作者より（2）（後書き）

いよいよ物語も大詰めです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1968d/>

フィアーシル島物語

2010年10月17日02時18分発行